

県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

山 南 遺 跡

2003. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター

序 文

善通寺市は、国指定史跡有岡古墳群や古刹善通寺等が所在する、古代讃岐の中心的な地域として知られております。

平成10年度に同市生野町で計画された公営住宅の建設事業に伴い、香川県教育委員会から委託を受け、用地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしましたところ、弥生時代から近世に至る居住区などが検出され、この地域の歴史に新たな1ページを加えることができました。

このたび、平成14年4月から実施しておりました山南遺跡の整理事業が終了し、「県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 山南遺跡」として刊行することになりました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心を一層深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、県土木部住宅課をはじめとする関係機関及び地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月28日

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
所長 小原 克己

例 言

1. 本報告書は、県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県善通寺市生野町に所在する山南遺跡（やまみなみいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は、予備調査を平成9年6月・11月、本調査を平成10年6月1日から同年12月28日まで実施した。
調査組織は、本文中に記したとおりである。
4. 調査・整理に当たっては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
地元自治会、地元水利組合、香川県歴史博物館
5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
編集・執筆は、同センター主任文化財専門員真鍋昌宏が担当した。なお、近世遺物の記述については同センター主任技師松本和彦の協力を得た。
6. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はT. P. を基準としている。
また遺構は、下記の略号により表示している。

SA 柵列跡	SB 掘立柱建物跡	SD 溝状遺構
SE 井戸跡	SH 竪穴住居跡	SK 土坑
SP 柱穴跡	SX 不明遺構	
7. 挿図の一部に、国土地理院地形図「丸亀」「善通寺」（1/25,000）を使用した。

本文目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	1
1 調査体制	1
2 本調査の経過	2
3 整理作業の経過	3
第2章 立地と環境	4
第3章 調査の成果	6
第1節 土層序について	6
第2節 主要遺構の検出状態	6
第3節 遺構と遺物	6
1 掘立柱建物跡	6
2 柵列跡	42
3 柱穴跡	43
4 溝状遺構	47
5 土坑	78
6 井戸	97
7 不明遺構	100
8 包含層	102
第4節 自然科学分析	112
第4章 まとめ	115

插图目次

第1图	調査区割図……………	2	第33图	SD02~04断面図、出土遺物実測図①…	48
第2图	遺跡位置図……………	4	第34图	SD02~04出土遺物実測図②…	49
第3图	周辺遺跡位置図……………	5	第35图	SD06・07・09・11~13・15~20平面図…	50
第4图	調査壁土層断面図①…	7、8	第36图	SD06・07・09・11~13・15~20断面図、 出土遺物実測図……………	51
第5图	調査壁土層断面図②…	9、10	第37图	SD22~24平面図、SD22・23断面図、 出土遺物実測図……………	53
第6图	調査壁土層断面図③…	11、12	第38图	SD24断面図、出土遺物実測図①…	54
第7图	調査壁土層断面図④…	13、14	第39图	SD24出土遺物実測図②…	55
第8图	調査壁土層断面図⑤…	15、16	第40图	SD24出土遺物実測図③…	56
第9图	SB01・SA01平・断面図、出土遺物実測図…	18	第41图	SD25・26平・断面図、出土遺物実測図…	57
第10图	SB02平・断面図…	19	第42图	SD28・29平・断面図、出土遺物実測図…	58
第11图	SB02出土遺物実測図…	20	第43图	SD30~32平面図…	59
第12图	SB03平・断面図、出土遺物実測図…	21	第44图	SD31断面図、出土遺物実測図①…	60
第13图	SB04平・断面図、出土遺物実測図…	22	第45图	SD31出土遺物実測図②…	61
第14图	SB05平・断面図、出土遺物実測図…	23	第46图	SD30・32断面図、出土遺物実測図…	62
第15图	SB06平・断面図、出土遺物実測図…	24	第47图	SD33平・断面図…	62
第16图	SB07平・断面図…	25、26	第48图	SD36・37平・断面図、SD37出土遺 物実測図①……………	63
第17图	SB07出土遺物実測図…	27	第49图	SD37出土遺物実測図②…	64
第18图	SB08平・断面図…	29、30	第50图	SD40~43平・断面図…	65
第19图	SB08出土遺物実測図…	28	第51图	SD41・43平・断面図、SD41出土遺 物実測図……………	66
第20图	SB09平・断面図、出土遺物実測図…	31、32	第52图	SD44~49平面図…	67
第21图	SB10平・断面図…	33	第53图	SD44・46・47・49断面図…	68
第22图	SB11平・断面図、出土遺物実測図…	34	第54图	SD45断面図、出土遺物実測図①…	69
第23图	SB12平・断面図、出土遺物実測図…	37	第55图	SD45出土遺物実測図②…	70
第24图	SB13・SA04平・断面図、出土遺物実 測図……………	35、36	第56图	SD45出土遺物実測図③…	71
第25图	SB14平・断面図、出土遺物実測図…	38	第57图	SD45出土遺物実測図④…	72
第26图	SB15平・断面図、出土遺物実測図…	39、40	第58图	SD45出土遺物実測図⑤…	73
第27图	掘立柱建物出土遺物実測図……………	41	第59图	SD48断面図…	74
第28图	SA02平・断面図、出土遺物実測図…	42	第60图	SD48出土遺物実測図①…	75
第29图	SA03平・断面図…	43	第61图	SD48出土遺物実測図②…	76
第30图	SA05平・断面図…	43			
第31图	柱穴出土遺物実測図①……………	44			
第32图	柱穴出土遺物実測図②……………	45			

第62図	SD50平・断面図	77	第80図	SK30断面図、出土遺物実測図	95
第63図	SD53出土遺物実測図	77	第81図	SK31平・断面図	96
第64図	SK01平・断面図	78	第82図	SE01平面図、出土遺物実測図	97
第65図	SK01出土遺物実測図	79	第83図	SE02・03平・断面図、SE03出土遺物実測図	98
第66図	SK02平・断面図、出土遺物実測図①	81	第84図	SE04平・断面図、出土遺物実測図	99
第67図	SK02出土遺物実測図②	82	第85図	SX01平・断面図、出土遺物実測図	101
第68図	SK03～06平・断面図、出土遺物実測図	83	第86図	包含層出土遺物実測図①	102
第69図	SK07～09平・断面図	84	第87図	包含層出土遺物実測図②	105
第70図	SK10平・断面図	85	第88図	包含層出土遺物実測図③	106
第71図	SK11平・断面図、出土遺物実測図	86	第89図	包含層出土遺物実測図④	107
第72図	SK12平・断面図、出土遺物実測図	87	第90図	包含層出土遺物実測図⑤	108
第73図	SK13～16平・断面図	88	第91図	包含層出土遺物実測図⑥	109
第74図	SK17～19平・断面図、出土遺物実測図	89	第92図	包含層出土遺物実測図⑦	110
第75図	SK20平・断面図、出土遺物実測図	90	第93図	包含層出土遺物実測図⑧	111
第76図	SK21・22平・断面図、SK22出土遺物実測図	91	第94図	調査区全体図	117
第77図	SK23～25平・断面図、SK25出土遺物実測図	92	第95図	遺構変遷図①	118
第78図	SK26～28平・断面図	93	第96図	遺構変遷図②	119
第79図	SK29平・断面図、出土遺物実測図	94	第97図	遺構変遷図③	120
			第98図	遺構変遷図④	121

写真図版目次

図版 1 (1)	SB01全景(北から)	(3)	SB08全景(西から)
(2)	SB02全景(南東から)	図版 5 (1)	SB09全景(南から)
図版 2 (1)	SB02(SP153)柱痕検出状態(西から)	(2)	SB09全景(西から)
(2)	SB03(SP137)遺物出土状態(北から)	図版 6 (1)	SB09(SP367)根石検出状態(西から)
(3)	SB04(SP97)遺物出土状態(西から)	(2)	SB09(SP369)根石検出状態(東から)
(4)	SB05・06全景(東から)	(3)	SB09(SP372)根石検出状態(西から)
図版 3 (1)	SB07全景(東から)	(4)	SB09(SP395)根石検出状態(北から)
(2)	SB07(SP271)完掘状態(南西から)	(5)	SB09(SP396)根石検出状態(北から)
(3)	SB07(SP277)遺物出土状態(西から)	(6)	SB09(SP410)根石検出状態(南から)
(4)	SB07(SP279)完掘状態(西から)	(7)	SB09(SP411)根石検出状態(南から)
(5)	SB07(SP287)根石検出状態(西から)	(8)	SB09(SP412)根石検出状態(南から)
図版 4 (1)	SB07(SP291)根石検出状態(南から)	図版 7 (1)	SB09(SP420)根石検出状態(南から)
(2)	SB07(SP300)完掘状態(北西から)	(2)	SB09(SP421)根石検出状態(南から)

- 図版7(3) SB09(SP423)根石検出状態(北から)
 (4) SB09(SP424)根石検出状態(北から)
 (5) SB09(SP426)根石検出状態(南から)
 (6) SB09(SP427)根石検出状態(南から)
 (7) SB09(SP431)柱痕検出状態(南から)
 (8) SB09(SP434)根石検出状態(西から)
- 図版8(1) SB09(SP454)完掘状態(西から)
 (2) SB10全景(南から)
- 図版9(1) SB11・SE04全景(南東から)
 (2) SB11・SE03・04全景(南から)
- 図版10(1) SB12全景(北から)
 (2) SB12・13全景(南から)
- 図版11(1) SB12・13全景(北から)
 (2) SB13全景(南から)
- 図版12(1) SB15全景(南から)
 (2) SA02全景(南から)
- 図版13(1) SA03全景(東から)
 (2) SD15全景(東から)
- 図版14(1) SD15全景(西から)
 (2) SD24全景(北から)
- 図版15(1) SD24全景(北から)
 (2) SD25・26・27全景(北から)
- 図版16(1) SD28全景(北から)
 (2) SD30全景(北から)
- 図版17(1) SD31全景(北から)
 (2) SD31全景(南から)
- 図版18(1) SD33遺物出土状態(南西から)
 (2) SD33遺物出土状態(南西から)
- 図版19(1) SD41・43全景(北から)
 (2) SD44全景(南から)
- 図版20(1) SD45全景(北東から)
 (2) SD45全景(北東から)
- 図版21(1) SD48全景(北から)
 (2) SD48全景(南から)
- 図版22(1) SD48遺物出土状態(南東から)
 (2) SD50全景(南から)
- 図版23(1) SK01遺物出土状態(北から)
 (2) SK02遺物出土状態(北から)
- 図版24(1) SK03全景(南から)
 (2) SK04全景(南西から)
- 図版25(1) SK06遺物出土状態(北から)
 (2) SK07全景(南西から)
- 図版26(1) SK08全景(北東から)
 (2) SK09全景(南から)
- 図版27(1) SK10全景(南から)
 (2) SK11全景(北から)
- 図版28(1) SK12遺物出土状態(北から)
 (2) SK14全景(東から)
- 図版29(1) SK18全景(南から)
 (2) SK19全景(南から)
- 図版30(1) SK20全景(東から)
 (2) SK21全景(南から)
- 図版31(1) SK24全景(南から)
 (2) SE01全景(北から)
- 図版32 掘立柱建物跡出土遺物(1)
 図版33 掘立柱建物跡出土遺物(2)
 図版34 柱穴出土遺物
 図版35 溝状遺構出土遺物(1)
 図版36 溝状遺構出土遺物(2)
 図版37 溝状遺構出土遺物(3)
 図版38 溝状遺構出土遺物(4)
 図版39 溝状遺構出土遺物(5)
 図版40 溝状遺構出土遺物(6)
 図版41 溝状遺構出土遺物(7)
 図版42 溝状遺構・土坑出土遺物
 図版43 土坑・井戸・不明遺構・包含層出土遺物
 図版44 包含層出土遺物(1)
 図版45 包含層出土遺物(2)
 図版46 包含層出土遺物(3)
 図版47 包含層出土遺物(4)
 図版48 溝・包含層出土遺物
 図版49 掘立柱建物跡・柱穴・溝状遺構・包含層出土遺物
 図版50 掘立柱建物跡・柱穴・溝状遺構・井戸・包含層出土遺物
 図版51 包含層出土遺物(5)

表 目 次

第1表	整理作業工程表	3	第6表	管玉觀察表	129
第2表	掘立柱建物跡一覽表	6	第7表	金属觀察表	129
第3表	樹種同定結果	112	第8表	木器觀察表	129
第4表	土器觀察表	123	第9表	瓦觀察表	129
第5表	石器觀察表	128			

付 図 目 次

付図1 山南遺跡遺構配置図(1)

付図2 山南遺跡遺構配置図(2)

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

山南遺跡は、公営住宅（善通寺地区）建設事業に伴い、香川県教育委員会が当該地における埋蔵文化財の確認を目的に平成9年6月と11月に試掘調査を実施した結果、文化財保護法に基づく保護措置が必要であると判断した。（「埋蔵文化財試掘調査報告X I 香川県内遺跡発掘調査」平成10年3月 香川県教育委員会）

この結果に基づき、香川県教育委員会は財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）との間で、平成10年4月1日付けで「埋蔵文化財調査委託契約」を締結し、センターが発掘調査を担当することになった。

第2節 調査の経過

1 調査体制

平成10年度の調査及び平成14年度の整理は、香川県教育委員会事務局文化行政課の指導の下、次の体制で実施した。

平成10年度

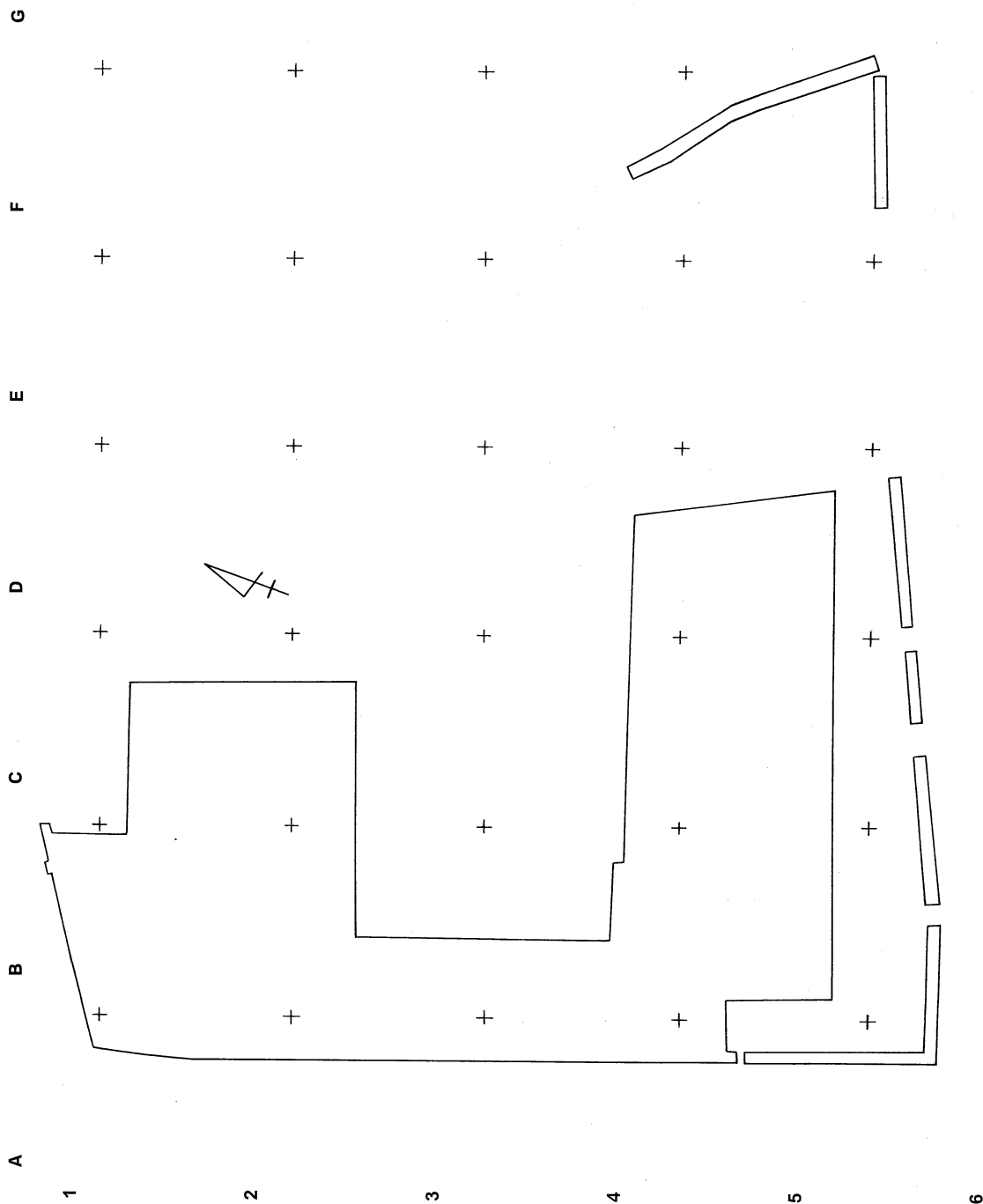
総括 所 長	菅原 良弘
次 長	小野 善範
総務 副主幹兼係長	田中 秀文
主 査	長尾寿江子
参 事	別枝 義昭
調査 主任文化財専門員	廣瀬 常雄
参 事	長尾 重盛
主任文化財専門員	中西 昇
文化財専門員	島田 英夫
調査技術員	糸山 晋

平成13年度

総括 所 長	小原 克己
次 長	渡部 明夫
総務 副主幹	野保 昌弘
係 長	多田 敏弘
主 査	山本 和代
主任主事	高木 康晴
整理 主任文化財専門員	真鍋 昌宏
担 当	東條 俊子、長井真由美、西本英里香、加藤 恵子、藤澤 明子、 東川真希子、福家 良子、徳永 貴美

2 本調査の経過

調査は、平成10年6月1日から同年12月28日にかけての、およそ7ヶ月間実施した。調査時点では、調査区は対象地の南、建物本体部分にあたるⅠ区、北と西にかけてL字状を呈する建物及び付帯施設部分のⅡ区、擁壁工事部分の北辺、西辺、南辺、南東隅の各部分をそれぞれ擁壁調査区1～4とした。調査面積は、Ⅰ区が1,160㎡、Ⅱ区1,150㎡、擁壁調査区1～4が90㎡、270㎡、60㎡、50㎡の合計2,780㎡である。県土木部住宅課との協議により、工事工程を踏まえて、擁壁調査区とそれに続けてⅠ区から発掘調査を開始した。



第1図 調査区割図

香川県教育委員会の試掘調査結果から、遺構面が2面あることが確認されており、本調査ではⅠ区の西半分強及びⅡ区、擁壁調査区1・2において下層の遺構面を検出・精査した。その結果実掘面積は、5,220㎡となった。

なお、航空写真測量は、Ⅰ区第1遺構面・擁壁調査区2の南半分・擁壁調査区3について8月15日（1回目）、Ⅰ区第2遺構面・擁壁調査区1及び2の第2遺構面について10月2日（2回目）、Ⅱ区第1遺構面を11月17日（3回目）、Ⅱ区第2遺構面を12月16日（4回目）に実施した。

また、平成11年3月31日付けで「県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度 山南遺跡」を刊行した。

以下、本報告中では、Ⅰ区・Ⅱ区等の呼称は用いず全体を第1図に示した地区割りをを用いて説明する。

3 整理作業の経過

整理作業は、4月～9月の6ヵ月間で実施した。作業の進捗状況は第1表のとおりである。

第1表 整理作業工程表

	4	5	6	7	8	9
遺物の注記	■					
遺物の接合、石膏復元	■					
報告遺物の抽出	■	■				
遺物の実測		■	■			
遺物図面のチェック		■	■			
遺物挿図原稿の作成					■	■
遺構整理				■	■	
遺構挿図原稿の作成					■	■
付図、表原稿の作成				■	■	
遺物写真撮影				■		
原稿作成			■	■	■	■
編集						■
遺物の収納、台帳整備						■

第2章 立地と環境

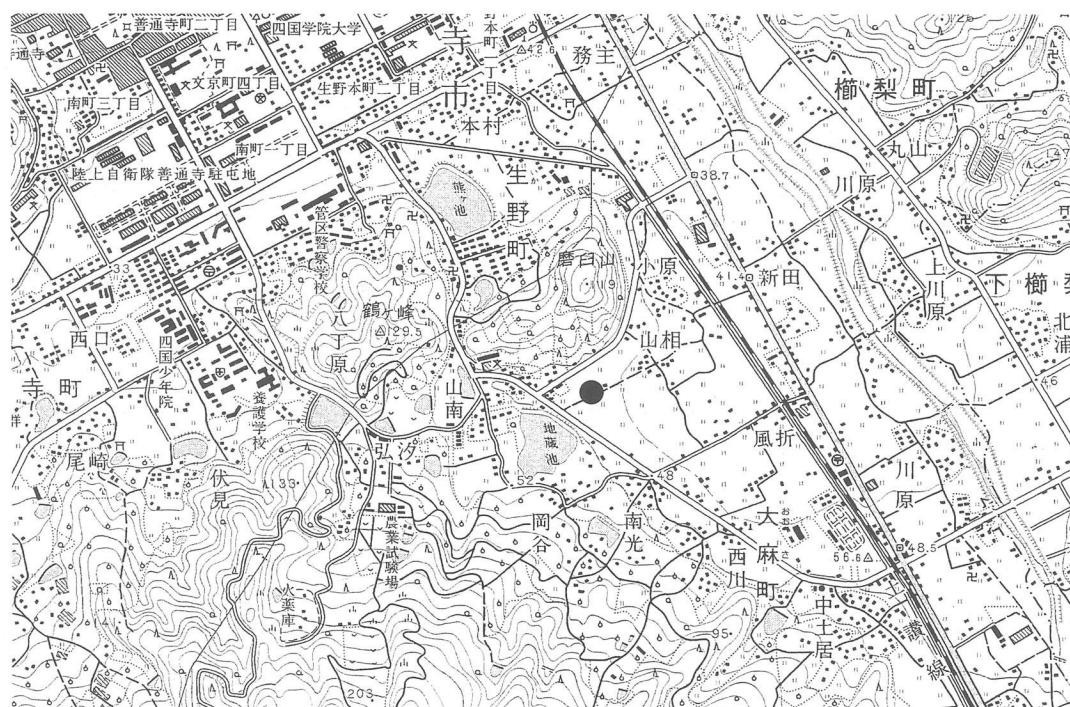
山南遺跡は、香川県西部の善通寺市生野町山南2881-1番地外に所在する。丸亀平野の南西に位置する大麻山から北東に延びる尾根の末端で、やや独立丘陵状に標高119mのピークをもつ磨臼山の南麓にあり、別に大麻山の小尾根末端からさらに延びる微高地の斜面部から谷部に至る地点に位置する。当該地の標高は約42mを測る。

平成10年度の同時期に、南側隣接地において善通寺市教育委員会による発掘調査が実施され、弥生時代前期の土坑、後期の竪穴住居跡などが検出されている。（「山南遺跡・彼ノ宗遺跡発掘調査報告書～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5～」1999年3月 善通寺市教育委員会）

周辺で確認されている遺跡には、縄文時代までのものはあまり知られていない。弥生時代には、この地域の拠点集落である旧練兵場遺跡が、当遺跡の北西方向約3kmに所在する。また、大麻山北西麓の瓦谷遺跡では平形銅剣・中広銅剣・中細銅矛などが出土している。近接する磨臼山丘陵上にも弥生土器の散布が見られる。なお、西方の我拝師山から大麻山西麓にかけての地域は、銅鐸をはじめとする青銅器の出土地として知られているなど、県下でも弥生時代の中心的な地域であったと考えられる。

古墳時代には、大麻山北西部中腹の標高400mを超える高所に、前期の前方後円墳である野田院古墳がある。前方部は盛土、後円部は安山岩の積石によって築かれている。同山腹にはこの他にも、大麻山椀貸塚古墳・大麻山経塚古墳・丸山1号墳等の積石塚が分布する。盛土の前方後円墳としては、東より磨臼山古墳・鶴ヶ峰4号墳、王墓山古墳などがある。当遺跡に近接する磨臼山丘陵頂部に立地する磨臼山古墳は全長49mの前方後円墳で、後円部からは過去に、造付石枕をもつ国分寺町鷺ノ山産角閃安山岩製刳抜式石棺が出土しており、重要文化財に指定されている。後期古墳としては、大麻山北東麓の岡1号墳と西麓に宮ヶ尾古墳が所在する。共に、横穴式石室内部に線刻画をもつ円墳として知られている。前者では竪穴住居と考えられる線刻が確認されており、後者では騎馬人物・舟・武人などが描かれているなど、古墳時代に至っても中心的な地域を形成している。

古代以降、散発的な遺跡の確認は行われているが、この地域の全体像は不明の状態である。今後の調査等を待ちたい。



第2図 遺跡の位置図 (1/25,000)



- | | | | |
|-------------|---------------|-------------|--------------|
| 1. 山南遺跡 | 14. 龍川五条遺跡 | 27. 九頭神遺跡 | 35. 王墓山古墳 |
| 2. 田村廃寺 | 15. 龍川四条遺跡 | 28. 下吉田神社古墳 | 36. 丸山古墳 |
| 3. 中ノ池遺跡 | 16. 三条番ノ原遺跡 | 29. 青龍古墳 | 37. 御館神社古墳 |
| 4. 平池南遺跡 | 17. 三条黒島遺跡 | 30. 大塚池古墳 | 38. 宮が尾1・2号墳 |
| 5. 田村遺跡 | 18. 郡家原遺跡 | 31. 旧練兵場遺跡群 | 39. 宮が尾3号墳 |
| 6. 三井遺跡 | 19. 郡家一里屋遺跡 | ①彼ノ宗遺跡 | 40. 瓦谷1号墳 |
| 7. 上一坊遺跡 | 20. 群家大林上遺跡 | ②仙遊遺跡 | 41. 鶴が峰4号墳 |
| 8. 乾遺跡 | 21. 郡家田代遺跡 | ③仲村廃寺 | 42. 鶴が峰山頂古墳 |
| 9. 中村遺跡 | 22. 川西北・原遺跡 | ④普通寺西遺跡 | 43. 磨臼山古墳 |
| 10. 永井遺跡 | 23. 宝幢寺跡 | ⑤普通寺伽藍 | 44. 岡古墳群 |
| 11. 稻木遺跡 | 24. 陣山古墳群 | 32. 香色山経塚群 | 45. 大麻山椀笥塚古墳 |
| 12. 金蔵寺下所遺跡 | 25. 鉢伏山北東麓遺跡群 | 33. 北原古墳群 | 46. 大麻山経塚古墳 |
| 13. 五条遺跡 | 26. 石川遺跡 | 34. 菊塚古墳 | 47. 野田院古墳 |

第3図 周辺遺跡位置図 (1/50,000)

第3章 調査の成果

第1節 土層序について

調査区の基本層序は耕作土・床土・部分的に残る灰褐色土の古代～中世包含層を経て、地表下0.3～0.5mで第1遺構面に至る。更に暗褐色ないし暗灰褐色粘質土下0.3～0.5mの灰黄色シルト・粘質土の上面で第2遺構面が存在する。

第4～8図は、調査区の東西南北壁の土層である。基本層位は前述したとおりであるが、異なる部分も多々ある。特に第2遺構面は全ての調査区で確認されず、微地形の影響によるものと考えられる。この点、中世以降は比較的安定した地形の元に集落形成が行われたことが伺われる。

第2節 主要遺構の検出状態

第1遺構面で検出した遺構は、掘立柱建物跡15棟、柵列跡5条、井戸跡4基をはじめ、多数の土坑、柱穴跡群、大小の溝状遺構等がある。近世以降に削平を受けているためか、第1遺構面では中世の遺構が大半を占めるものの、古代及び近世の遺構も同一面で検出している。なお、この面における検出遺構は、調査区北部で密度が高い。

第1遺構面における主たる出土遺物は、8世紀代の須恵器（杯・杯蓋・甕等）、中世の土師器（杯・小皿・羽釜・鉢等）、須恵器（東播系こね鉢・甕等）、青磁碗片、近世のものでは肥前系陶器、土師質土器、瓦等がある。

下位の第2遺構面では、調査区南部で弥生時代後期の溝状遺構、調査区北部では北西隅で弥生時代前期土器を含む包含層等を、東端で弥生時代後期の溝状遺構を検出した。主たる出土遺物は、弥生土器（前期・後期）の甕・鉢・高杯等、石鏃、磨製石斧等がある。

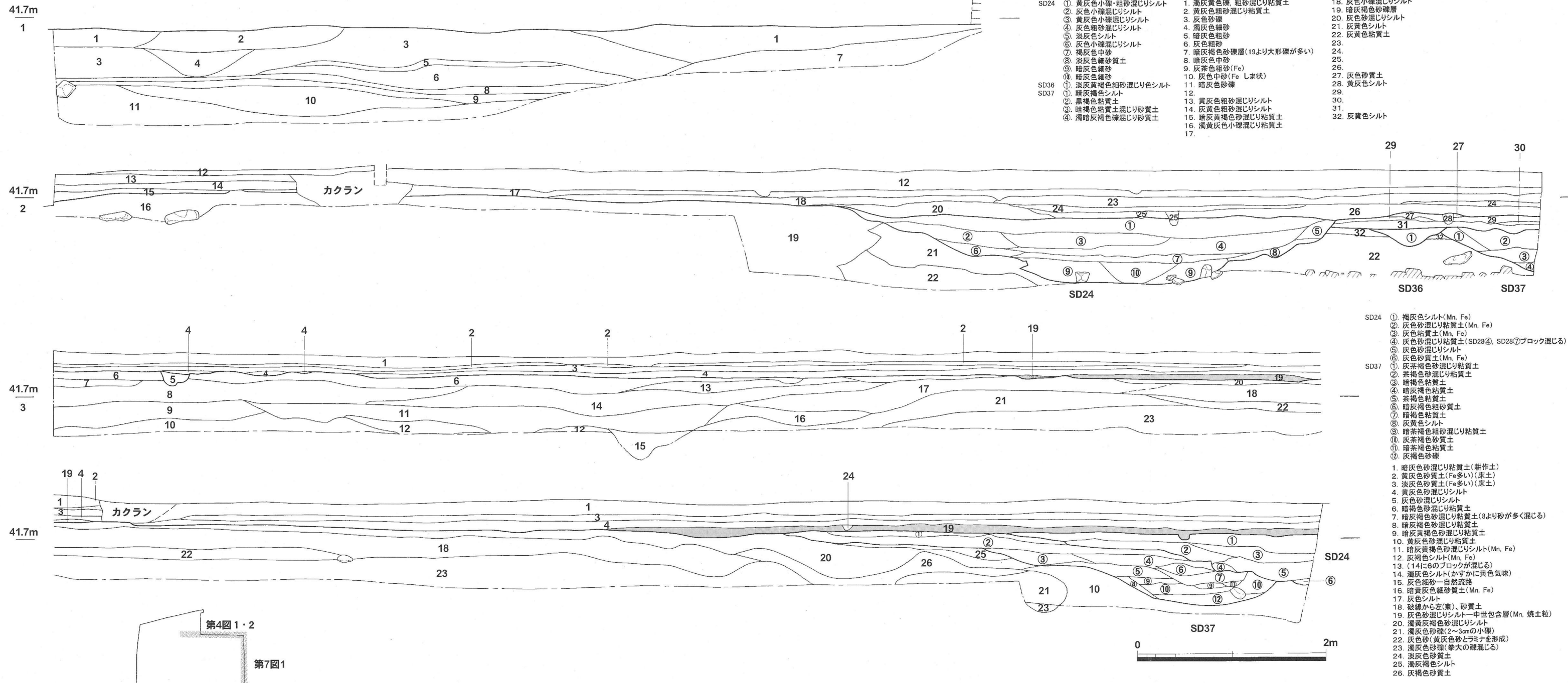
第3節 遺構と遺物

前節まで記述した第1遺構面、第2遺構面は、部分的な確認に終わっており、面による時代差を明瞭に反映したものではない。また、出土している遺物から弥生時代前期・後期、古墳時代、古代～中世、近世の複合遺跡であること、年代を確定させるための出土遺物を持たない遺構も多々あるため、ここでは、遺構の種別にそって記述し、時代ごとの概要については第4章でまとめる。

1 掘立柱建物跡

第2表 山南遺跡掘立柱建物一覧表

遺構名	規模・構造(桁行×梁間) m	面積(m ²)	主軸方向
SB01	2間(3.5)×2間(3.0)	10.5	N-77°-E
SB02	2間(3.5)×3間(8.0)	28	N-74°-E
SB03	1間(2.8)×3間(5.8)	16.24	N-18°-W
SB04	2間(6.0)×2間(3.9)	23.4	N-70°-E
SB05	1間(1.7)×2間(4.2)	7.14	N-14°-W
SB06	1間(2.2)×2間(3.7)	8.14	N-15.5°-W
SB07	2間(4.2)×3間(7.3)	30.66	N-15.5°-W
SB08	1間(3.9)×2間(6.0)	21.6	N-70°-E
SB09	2間(3.8)×5間(12.4)	47.12	N-72.25°-E
SB10	2間(2.7)×2間(2.1)	5.67	N-21.4°-W
SB11	2間(3.2)×5間(5.7)	18.24	N-18.5°-W
SB12	1間(2.2)×3間(4.0)	8.8	N-71°-E
SB13	4間(6.3)×4間(7.6)	47.88	N-71.4°-E
SB14	2間(4.1)×3間(7.2)	29.52	N-67.5°-E
SB15	2間(3.7)×3間(6.3)	23.31	N-21.75°-W

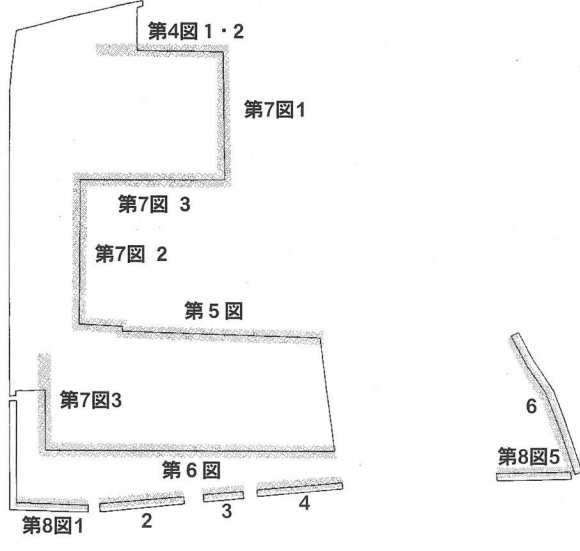


- SD24 ① 黄灰色小礫・粗砂混じりシルト
- ② 灰色小礫混じりシルト
- ③ 黄灰色小礫混じりシルト
- ④ 灰色粗砂混じりシルト
- ⑤ 淡灰色シルト
- ⑥ 灰色小礫混じりシルト
- ⑦ 褐色中砂
- ⑧ 灰色細砂質土
- ⑨ 暗灰色細砂
- ⑩ 暗灰色細砂
- ⑪ 淡灰黄褐色細砂混じりシルト
- ⑫ 暗灰色シルト
- ⑬ 黄褐色粘質土
- ⑭ 暗褐色粘質土混じり砂質土
- ⑮ 暗褐色粘質土
- ⑯ 黄灰色細砂
- ⑰ 黄灰色細砂(Fe)
- ⑱ 灰色中砂(Feしま状)
- ⑲ 暗灰色砂礫
- ⑳ 黄灰色粗砂混じりシルト
- ㉑ 灰黄色粗砂混じりシルト
- ㉒ 暗黄褐色粘質土
- ㉓ 黄褐色粘質土
- ㉔ 黄褐色粘質土
- ㉕ 暗褐色粘質土
- ㉖ 暗褐色粘質土
- ㉗ 暗褐色粘質土
- ㉘ 暗褐色粘質土
- ㉙ 暗褐色粘質土
- ㉚ 暗褐色粘質土
- ㉛ 暗褐色粘質土
- ㉜ 暗褐色粘質土
- ㉝ 暗褐色粘質土
- ㉞ 暗褐色粘質土
- ㉟ 暗褐色粘質土
- ㊱ 暗褐色粘質土
- ㊲ 暗褐色粘質土
- ㊳ 暗褐色粘質土
- ㊴ 暗褐色粘質土
- ㊵ 暗褐色粘質土
- ㊶ 暗褐色粘質土
- ㊷ 暗褐色粘質土
- ㊸ 暗褐色粘質土
- ㊹ 暗褐色粘質土
- ㊺ 暗褐色粘質土
- ㊻ 暗褐色粘質土
- ㊼ 暗褐色粘質土
- ㊽ 暗褐色粘質土
- ㊾ 暗褐色粘質土
- ㊿ 暗褐色粘質土

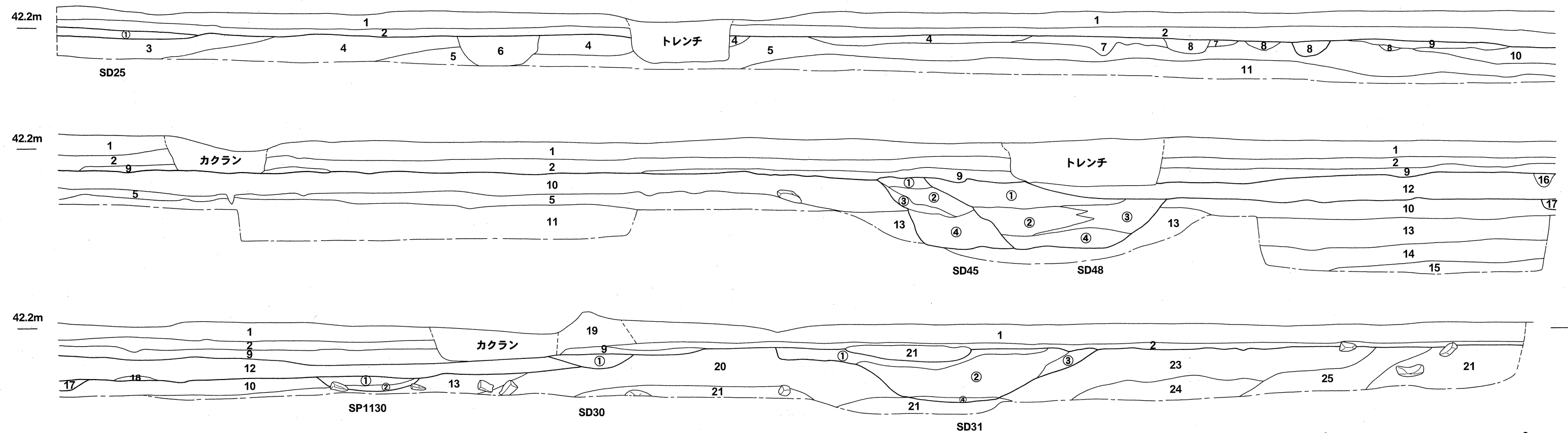
- SD24 ① 褐色シルト(Mn, Fe)
- ② 灰色砂混じり粘質土(Mn, Fe)
- ③ 灰色粘質土(Mn, Fe)
- ④ 灰色砂混じり粘質土(SD28④, SD28⑦ブロック混じる)
- ⑤ 灰色砂混じりシルト
- ⑥ 灰色粘質土(Mn, Fe)
- ⑦ 暗灰褐色粘質土
- ⑧ 暗灰褐色粘質土
- ⑨ 暗灰褐色粘質土
- ⑩ 暗灰褐色粘質土
- ⑪ 暗灰褐色粘質土
- ⑫ 暗灰褐色粘質土
- ⑬ 暗灰褐色粘質土
- ⑭ 暗灰褐色粘質土
- ⑮ 暗灰褐色粘質土
- ⑯ 暗灰褐色粘質土
- ⑰ 暗灰褐色粘質土
- ⑱ 暗灰褐色粘質土
- ⑲ 暗灰褐色粘質土
- ⑳ 暗灰褐色粘質土
- ㉑ 暗灰褐色粘質土
- ㉒ 暗灰褐色粘質土
- ㉓ 暗灰褐色粘質土
- ㉔ 暗灰褐色粘質土
- ㉕ 暗灰褐色粘質土
- ㉖ 暗灰褐色粘質土
- ㉗ 暗灰褐色粘質土
- ㉘ 暗灰褐色粘質土
- ㉙ 暗灰褐色粘質土
- ㉚ 暗灰褐色粘質土
- ㉛ 暗灰褐色粘質土
- ㉜ 暗灰褐色粘質土
- ㉝ 暗灰褐色粘質土
- ㉞ 暗灰褐色粘質土
- ㉟ 暗灰褐色粘質土
- ㊱ 暗灰褐色粘質土
- ㊲ 暗灰褐色粘質土
- ㊳ 暗灰褐色粘質土
- ㊴ 暗灰褐色粘質土
- ㊵ 暗灰褐色粘質土
- ㊶ 暗灰褐色粘質土
- ㊷ 暗灰褐色粘質土
- ㊸ 暗灰褐色粘質土
- ㊹ 暗灰褐色粘質土
- ㊺ 暗灰褐色粘質土
- ㊻ 暗灰褐色粘質土
- ㊼ 暗灰褐色粘質土
- ㊽ 暗灰褐色粘質土
- ㊾ 暗灰褐色粘質土
- ㊿ 暗灰褐色粘質土



包含層

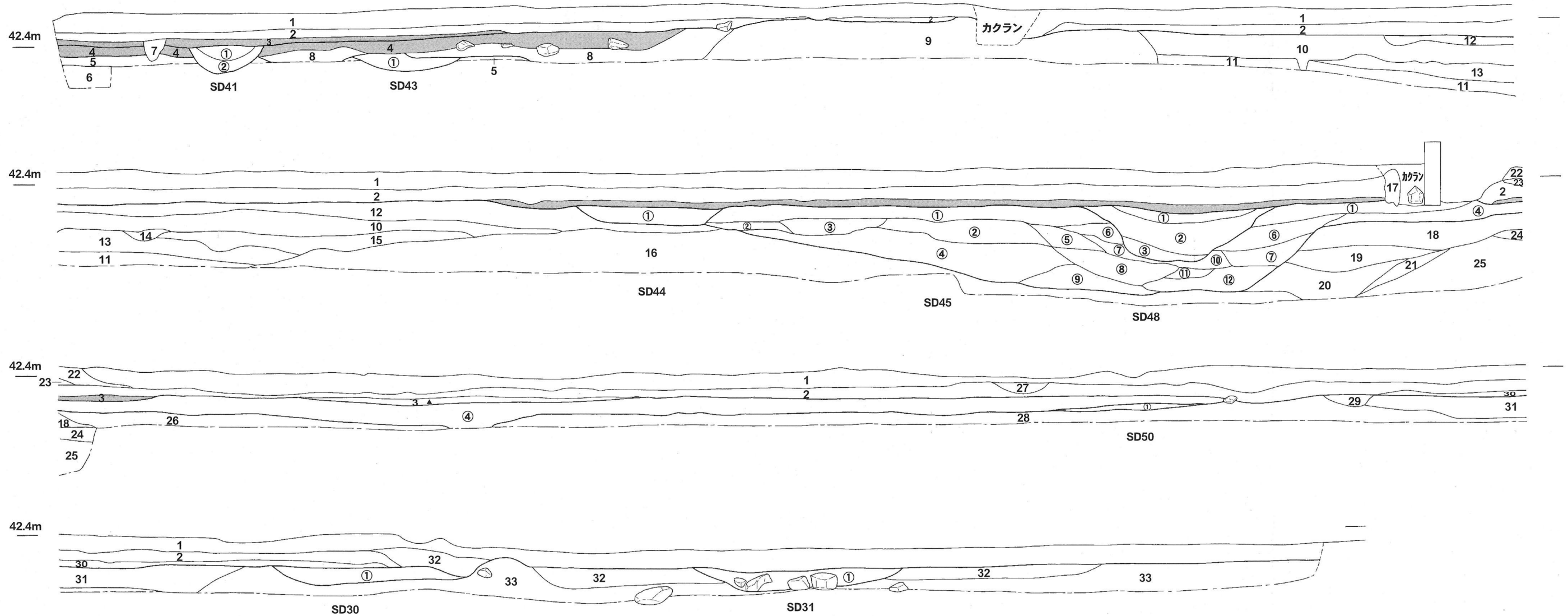


第4図 調査壁土層断面図① (1/40)



- | | | |
|---|--|---|
| <p>SD25 ① 黒灰細砂混じり粘質土
SD30 ① 灰褐色砂質土(Mn, 小礫混じり)
SD31 ① 灰褐色砂質土(Mn)
② 灰褐色砂質土(Fe, Mn)
③ 黄灰色中砂(小礫, 粗砂混じり)
④ 濁灰色細砂質土(やや硬質)</p> <p>SD45 ① 濁灰色砂混じりシルト
② 濁暗灰褐色粗砂質土
③ 濁灰茶色砂質土(Fe, Mn)
④ 濁灰茶色砂混じりシルト</p> <p>SD48 ① 黒褐色粘質土
② 濁暗褐色粗砂に③がラミナ状に堆積する
③ 暗褐色砂混じり粘質土
④ 黒褐色砂質土</p> <p>SP1130 ① 茶灰色砂混じり粘質土(暗褐色粘質土ブロック混じる)
② 淡茶灰色砂混じり粘質土(暗褐色粘質土ブロック混じる)</p> | <p>1. 暗灰褐色砂混じり粘質土(耕作土)
2. 黄灰色砂質土(床土)
3. 暗灰茶褐色砂混じり粘質土(Fe, Mn)
4. 灰褐色シルト混じり礫層
5. 黄灰色砂質土(小礫, Fe, Mn混じり)
6. 灰色シルト(小礫, 5のブロック, Fe, Mn混じる)
7. 濁灰黄色シルト
8. 濁暗褐色シルト
9. 淡灰色シルト(Fe, Mn)
10. 暗褐色粘質土(小礫混じる, ややシルト気味)
11. 灰黄色砂質土(Fe, Mn)
12. 灰色砂混じりシルト(Fe, Mn)
13. 灰黄褐色粘質土(Fe, Mn)</p> | <p>14. 暗黄灰褐色砂混じりシルト(Fe, Mn)
15. 暗黄灰褐色砂質土
16. 淡黄灰色シルト
17. 淡茶灰色粘質土(10のブロック混じる)
18. 灰色シルト(12よりやや暗い)
19. 暗黄灰色砂混じり粘質土(耕作土一畦畔土)
20. 淡灰褐色細砂質土(拳大礫, Fe, Mn)
21. 灰色礫層
22. 拳大礫を含む灰色砂礫
23. 黄灰色中砂(最上面にMn)
24. 黄灰色粗砂
25. 濁灰色粗砂</p> |
|---|--|---|

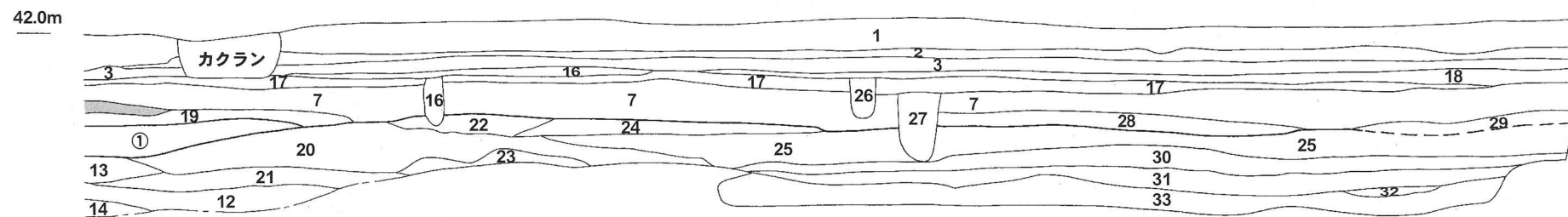
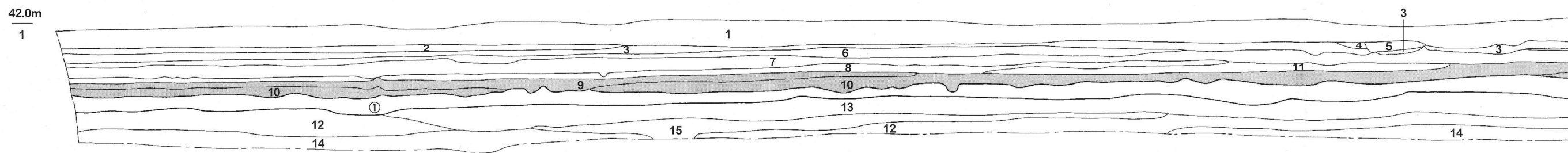
第5図 調査壁土層断面図② (1/40)



- | | | | |
|---------------------------------|------------------------------|---------------------------|--------------------------------|
| SD30 ① 暗灰色シルト(Fe, Mn, 僅かに黄味帯びる) | SD45 ① 暗褐色粘質土 | ⑦ 灰茶褐色細砂質土 | SD48 ① 黒褐色粘質土(Fe, Mn)-②より黒味が強い |
| SD31 ① 濁灰色シルト混じり砂質土(礫多く混じる) | ② 濁灰黄褐色砂混じりシルト(Fe, Mn) | ⑧ 濁灰色砂質土 | ② 黒褐色粘質土(Fe, Mn) |
| SD41 ① 濁暗灰褐色砂混じり粘質土 | ③ 暗灰褐色小礫混じり粘質土 | ⑨ 黄灰色砂質土(Fe) | ③ 濁灰茶色粗砂質土 |
| ② 濁暗灰褐色粘質土 | ④ 濁灰茶褐色小礫混じりシルト(Fe, Mn) | ⑩ 濁灰色細砂質土(Fe, Mn) | SD50 ① 暗灰黄色シルト |
| SD43 ① 暗灰褐色粘質土 | ⑤ 灰茶褐色シルト | ⑪ 濁灰色砂質土 | |
| SD44 ① 黒褐色小礫混じり粘質土 | ⑥ 濁灰黄褐色粗砂混じりシルト(Fe, Mn) | ⑫ 濁灰茶褐色砂質土(Fe, Mn, 小礫混じり) | |
| | | | |
| 1 暗灰色砂混じり粘質土(Fe, Mn) | 9 礫層(暗灰色細砂~粗砂混じり), 拳大の礫多く混じる | 17 淡灰色砂混じり粘質土 | 25 濁灰褐色砂礫(Fe, Mn) |
| 2 灰黄色シルト混じり砂質土(やや粘性, Fe, Mn) | 10 灰色細砂質土(Fe, Mn) | 18 暗灰黄褐色シルト(Fe, Mn) | 26 濁灰褐色シルト |
| 3 濁灰褐色砂混じり粘質土(Mn, 4層のブロック混じる) | 11 灰色シルト(Fe, Mn)非常に多い | 19 灰茶褐色砂質土(Fe, Mn) | 27 第1層, 第2層の混じり |
| 4 暗褐色粘質土 | 12 灰褐色小礫混じりシルト(風化小礫多い) | 20 灰茶褐色砂質土(Fe, Mn)多くやや粘質 | 28 灰黄色シルト(Fe, Mn) |
| 5 黄灰色砂混じり粘質土 | 13 灰色細砂質土(Fe, Mn)非常に多い | 21 濁灰色砂質土(Fe, Mn) | 29 暗褐色砂混じり粘質土 |
| 6 濁灰黄褐色砂混じり粘質土 | 14 灰色細砂 | 22 灰褐色砂混じり粘質土 | 30 淡灰色シルト |
| 7 淡黄灰色粘質土 | 15 灰色細砂質土(Fe, Mn多い) | 23 黄灰色シルト混じり砂質土 | 31 暗灰色シルト(Fe, Mn, 僅かに黄味帯びる) |
| 8 濁暗灰褐色砂混じり粘質土 | 16 黄灰色シルト(Fe, Mn) | 24 濁灰黄褐色砂混じりシルト(Fe, Mn) | 32 暗黄灰色砂混じりシルト |
| | | | 33 暗灰色砂礫(拳大~人頭大の塊石含む) |

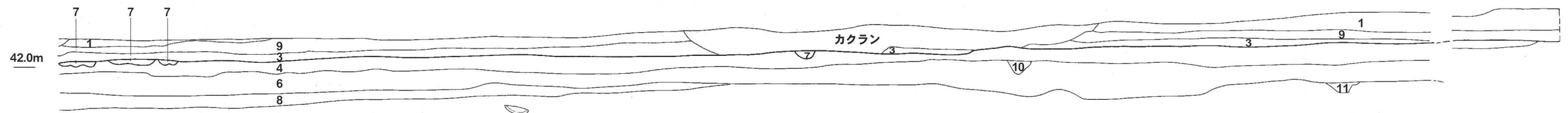
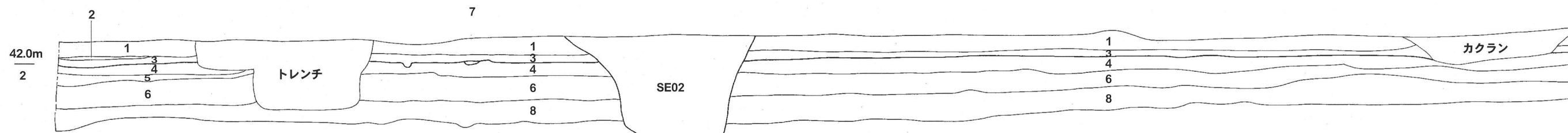


第6図 調査壁土層断面図③ (1/40)

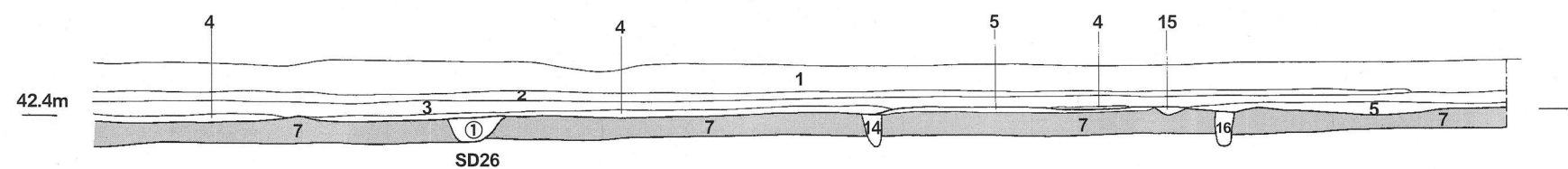
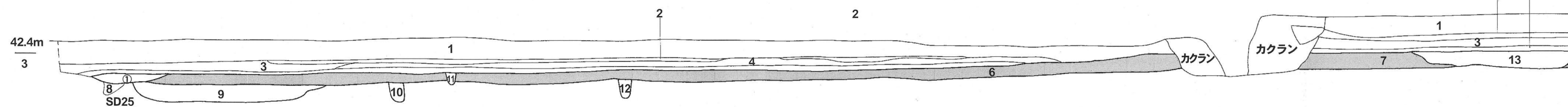


SD37 ① 黒褐色~暗褐色粘質土

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------------|
| 1. 暗灰色砂混じり粘質土(耕作土) | 17. 黄灰色細砂混じりシルト |
| 2. 黄灰色砂質土(Fe, Mn)(床土) | 18. 灰色砂混じりシルト(Fe, Mn) |
| 3. 黄灰色砂混じりシルト(Fe, Mn)(床土) | 19. 明茶褐色細砂混じり粘質土 |
| 4. 濃灰黄色シルト+暗褐色粘質土(攪乱) | 20. 暗黄褐色粘質土 |
| 5. 灰色砂混じり粘質土 | 21. 暗黄褐色粘質土混じり細砂質土 |
| 6. 灰色砂混じり粘質土(Mn) | 22. |
| 7. 灰色砂混じり粘質土(6よりやや暗い) | 23. 濃灰黄色シルト |
| 8. 黄灰色砂質土(Fe, Mn) | 24. 灰黄色砂混じりシルト |
| 9. 灰色砂混じりシルト(Fe, Mn) | 25. 黄灰色砂混じりシルト(Fe, Mn) |
| 10. 灰色砂混じりシルト | 26. 黄灰色砂混じりシルト |
| (Fe, Mn)ブロック, SD37①ブロック混じる) | 27. 黄灰色砂混じりシルト(須恵器片, 焼土粒混じる) |
| 11. 淡灰色砂混じりシルト(Fe, Mn) | 28. |
| 12. 暗褐色粘質土混じり砂質土 | 29. 灰色粘質土 |
| 13. 暗褐色細砂混じり粘質土 | 30. 黄灰色砂混じりシルト(26より砂が多く, Fe, Mnも多い) |
| 14. 濃灰褐色等大礫混じり砂質土 | 31. 灰色細砂(暗褐色粘質土ブロック混じる) |
| 15. 暗黄褐色粘質土 | 32. 灰白色細砂 |
| 16. 淡黄灰色シルト(Fe, Mn) | 33. 灰色細砂(31より粗く, そこは粗砂, 小礫が混じる) |



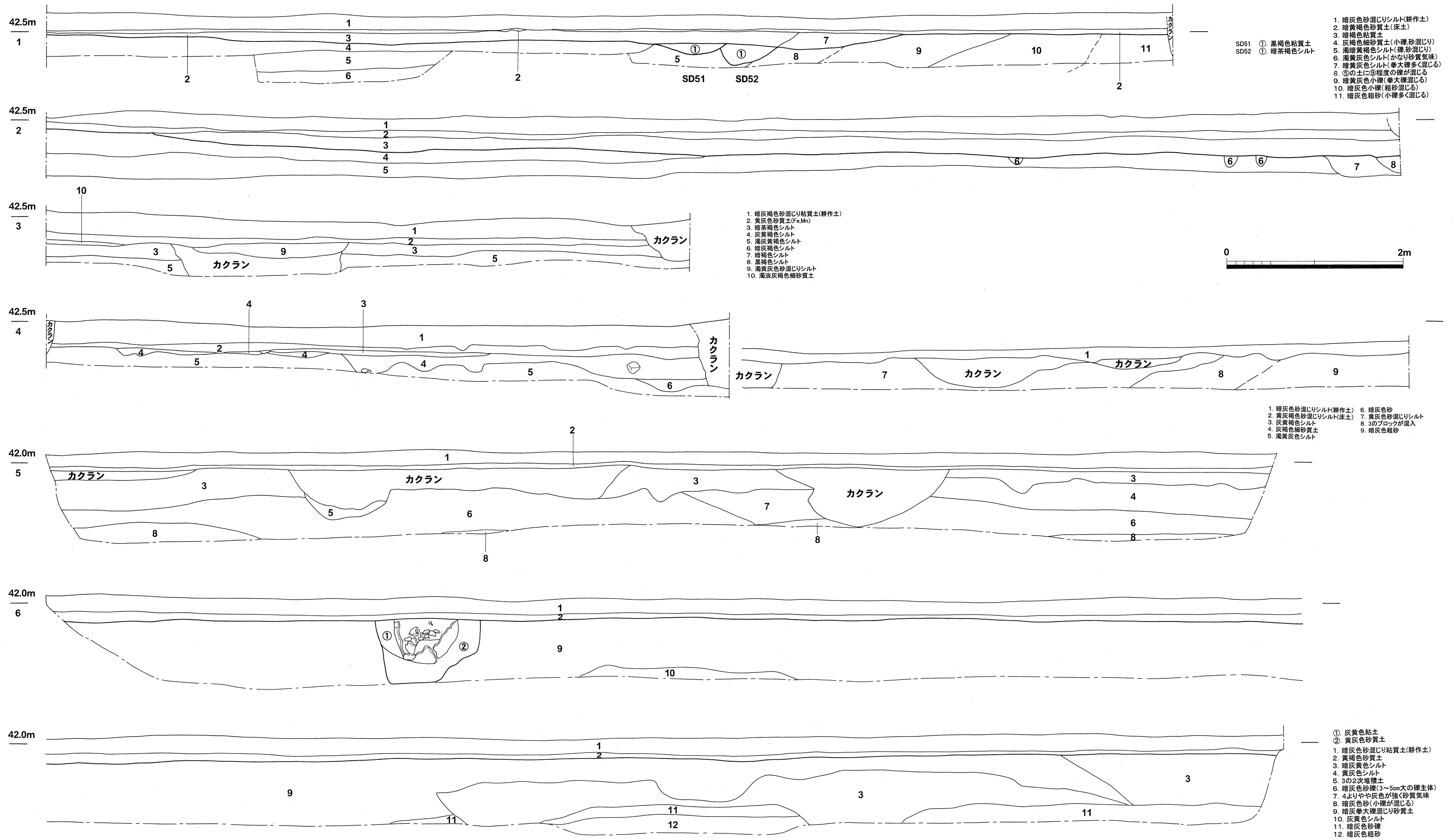
- | |
|-----------------------------|
| 1. 暗灰色砂混じり粘質土(耕作土) |
| 2. 黄灰色砂質土(Fe多い) |
| 3. 淡灰色砂質土 |
| 4. 暗褐色砂混じり粘質土(砂が多く混じる) |
| 5. 暗褐色粘質土 |
| 6. 暗褐色砂混じりシルト(6より暗く砂が多く混じる) |
| 7. 淡灰色砂混じりシルト |
| 8. 暗黄褐色砂混じり粘質土(砂混じり) |
| 9. 3より淡黄灰色砂質土 |
| 10. 暗褐色砂混じりシルト |
| 11. 灰褐色砂混じりシルト |



- | | |
|------------------------|------------------|
| SD25 ① 灰褐色シルト | 9. 黒褐色粘質土 |
| SD26 ① 暗灰色シルト混じり粘質土 | 10. 黒褐色粘質土 |
| 1. 暗灰色砂混じり粘質土(耕作土) | 11. 灰黄色シルト |
| 2. 茶灰色シルト混じり砂質土(Fe含む) | 12. 濃灰色粘質土 |
| 3. 灰黄褐色シルト混じり砂質土(Fe含む) | 13. 暗灰色シルト混じり粘質土 |
| 4. 濃黄灰色粘質土 | 14. 淡灰色シルト |
| 5. 濃灰褐色粘質土(Mnブロック含む) | 15. 濃灰色粘質土 |
| 6. 暗黄褐色粘質土気味 | 16. 暗褐色粘質土 |
| 7. 暗褐色砂混じり粘質土 | |
| 8. 暗灰褐色シルト | |



第7図 調査壁土層断面図④ (1/40)



第8図 調査壁土層断面図⑤ (1/40)

SB01・SA01 (第9図)

B2調査区で確認した2間×2間の総柱建物である。柱穴の大きさに大小があり、推定プランも明確な長方形にならないが、東側のSB02や北側のSA01との関係から建物と認定している。柱穴の平断面からして柱の抜き取り穴やその痕跡が認められないため、移動に際しては柱材を根元から切断したと考えられる。柱穴に近接して小形の柱穴が多く認められる。これは、主たる建物の柱穴とは考えられないが、柱を補助するためのものとも考えられる。この小柱穴はほぼ垂直の掘り方を持つことから、添え柱的な役割を担っていたと考えることもできる。

SA01は、現状では6間のみ確認されており、SB01・SB02の北辺を東西に延びている。ただし、それぞれの掘立柱建物跡の庇に分割される可能性もある。

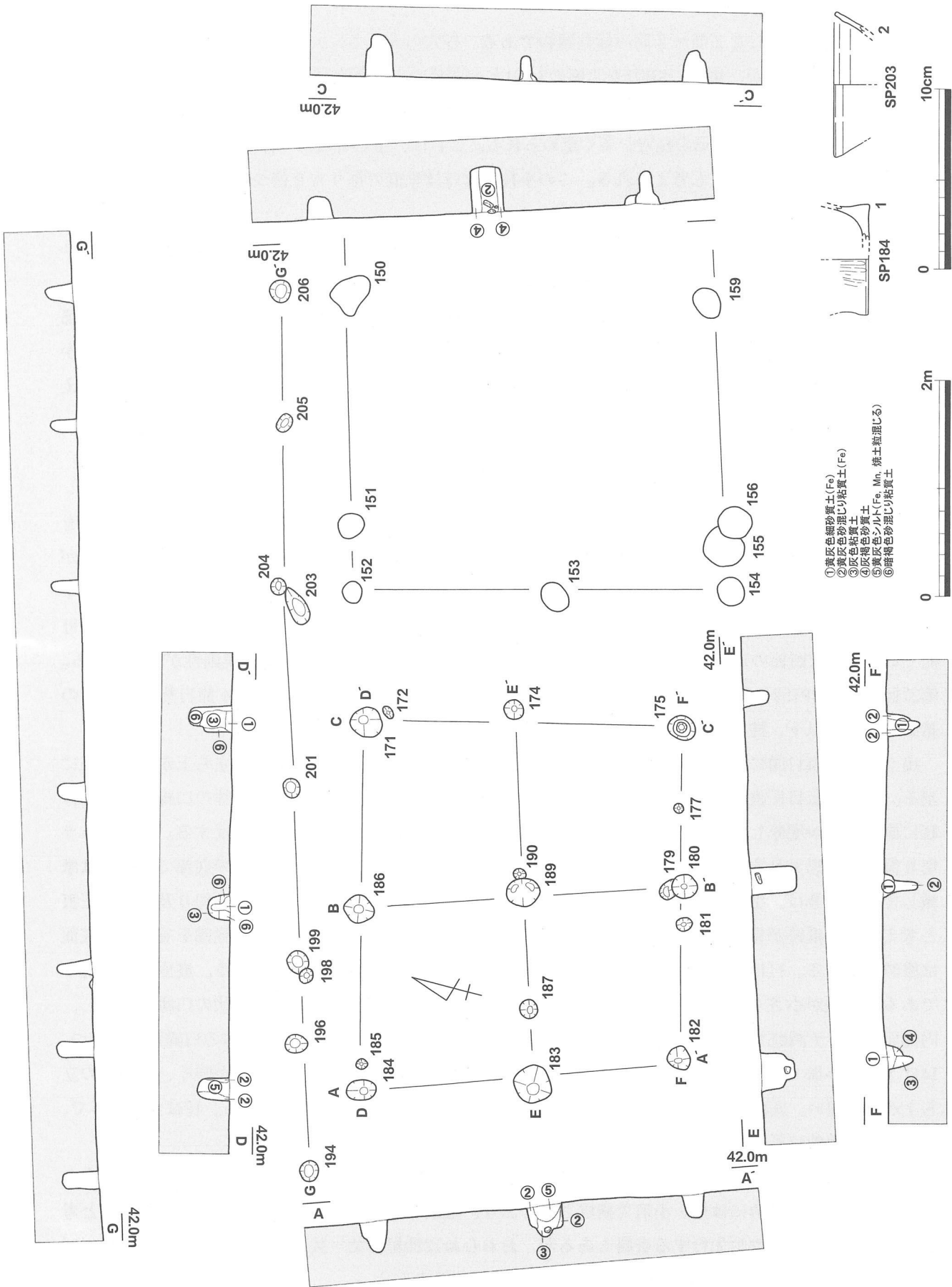
1はSB01出土の土器である。2はSA01出土の土器である。1は、縦方向のヘラミガキを持つ甕底部で、弥生時代中期の所産と考えられる。2は土師器杯の口縁で、破片であること単独資料であることから年代決定は難しい。以上1・2の資料は、この掘立柱建物跡の年代を示す資料とはなり得ないと考えている。

SB02 (第10・11・27図)

B2調査区で確認した2間×3間の東西棟である。この掘立柱建物跡もSB01同様、添え柱的役割を持つ小柱穴が顕著である。SP151とSP156を結ぶ線は西辺に並行するため、この部分に何らかの施設があった可能性もある。また、東辺から1間のラインは北辺・南辺の柱穴跡の位置がずれており斜めラインになるが、中央にSP163・164があるため、変形ではあるが土間等何らかの施設を想定することが可能である。柱穴断面の形状・深さなど必ずしも一定しないことから、使用部材の不規則性が考えられる。第27図74は、SP152に残存していた柱材である。材質は、コウヤマキである。(第4節自然科学分析の結果による。以下、柱材については同文による。)

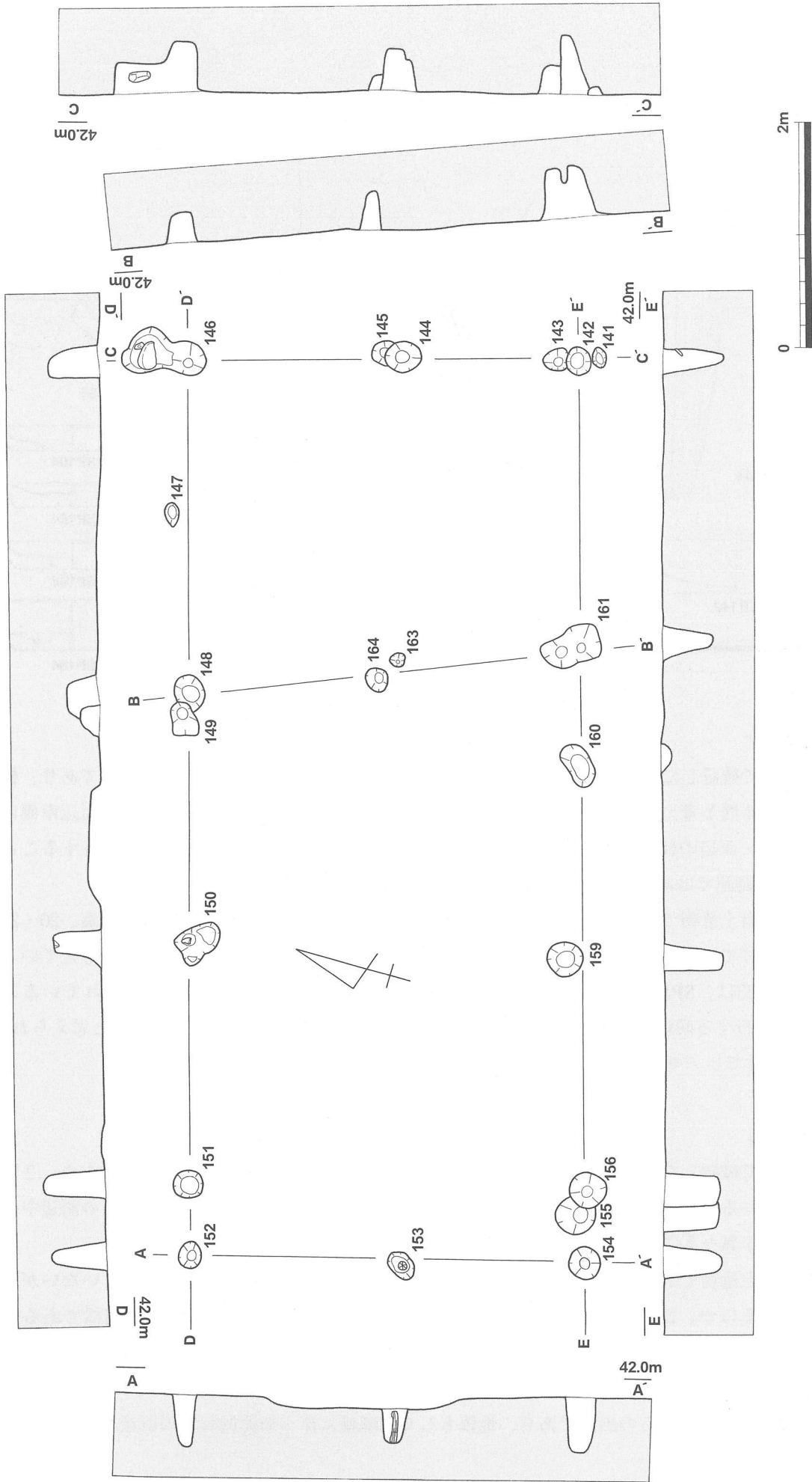
出土遺物は第11図に図示した。3は土師器杯で、平底の底部からやや内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。底面は板目圧痕を残す。4は、土師質土釜の脚部である。5は、東播系こね鉢の口縁部で、玉縁状に端部外面が肥厚している。6は、土師器小皿で、器壁が厚く、口縁部も短く外反する。底面はヘラ切り後ナデと思われる。7も土師器小皿で、底面は摩滅している。8は、土師器杯の底部で、底面は摩滅している。9は、土師器小皿で、短く外反する口縁部を有する。底面は平らで、糸切り及び板目圧痕と考えられる痕跡が見られる。10も土師器小皿で、器壁が厚く、短く立ち上がる口縁部を有する。底面は摩滅している。11は土師器杯Dで、底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を有する。底面はヘラ切りである。口径が小さく、やや内湾する口縁部を有する。12は土師質土鍋で、受け口状の口縁部を有し、内外面を板ナデ調整している。13も土師質土鍋の口縁部で12ほど顕著ではないが同様の口縁形態を持つ。14は土師器小皿で、6に共通する体部形態を有する。15も土師器小皿で、より器壁が厚く、口縁部の立ち上がりは短い。底面はヘラ切りである。16も土師器小皿で、底面はヘラ切りである。17は土師器杯で、底部から直線的に延びた体部が上方に屈曲して口縁部に至る。

以上の資料の内、5～11はSP161から、SP12～17はSP164からの出土である。内容的にやや不適当な資料もあるが、基本的には杯・小皿で構成されており、地鎮もしくは廃絶に伴う祭祀的行為の所産と考えられる。時期は、やや先行する資料もあるが、おおむね12世紀中葉～後半代と考えられる。片桐1992(以下、古代～中世土器に関しては、同書を基準として使用する。)

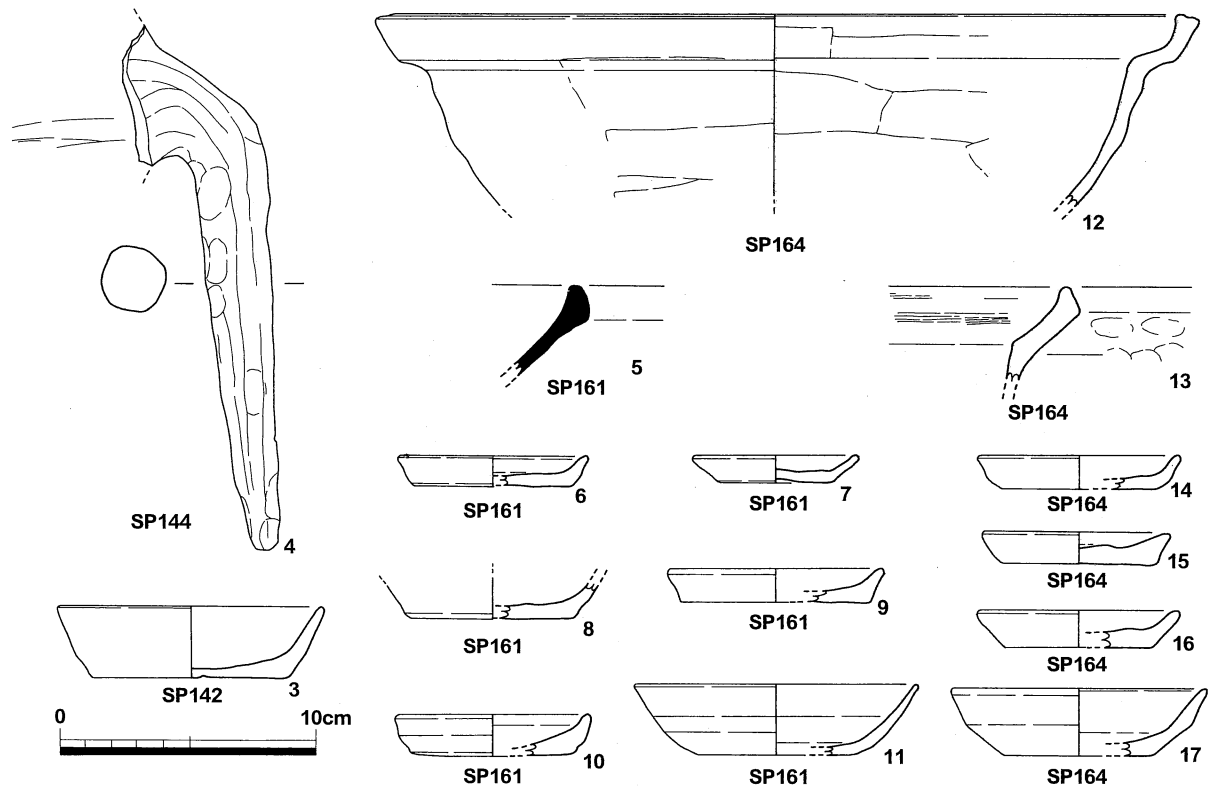


- ①黄灰色細砂質土 (Fe)
- ②黄灰色砂質じり粘質土 (Fe)
- ③灰色粘質土
- ④灰褐色砂質土
- ⑤黄灰色シルト (Fe, Mn, 粘土結集)
- ⑥暗褐色砂質じり粘質土

第9図 SB01・SA01 平・断面図 (1/50)、出土遺物表測図 (1/3)



第10图 SB02平·断面图 (1/50)



第11図 SB02出土遺物実測図 (1/3)

SB03 (第12図)

B 2 調査区で確認した1間×3間の南北棟である。この掘立柱建物跡も桁行が不明確であり、柱間の数から言えば4間と考えることもできる。北辺から1間目の東辺中央に1穴、2間目の西辺南側に1穴見られ、東辺・西辺の柱が対象とならない。ただし、SP99とSP102を結ぶ線と南辺は並行することからSB02同様狭い範囲ではあるが何らかの施設を想定することができる。

18～23が、出土遺物である。いずれも土師器杯で、19・23は底面が糸切り後板目状圧痕、20・21がヘラ切りで仕上げている。全体的にⅡ-⑦～⑨期に位置づけられ、13世紀後半代の所産と考えている。

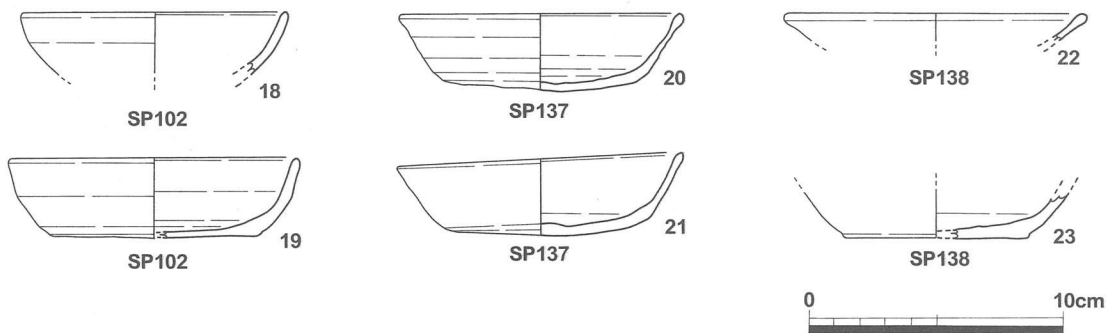
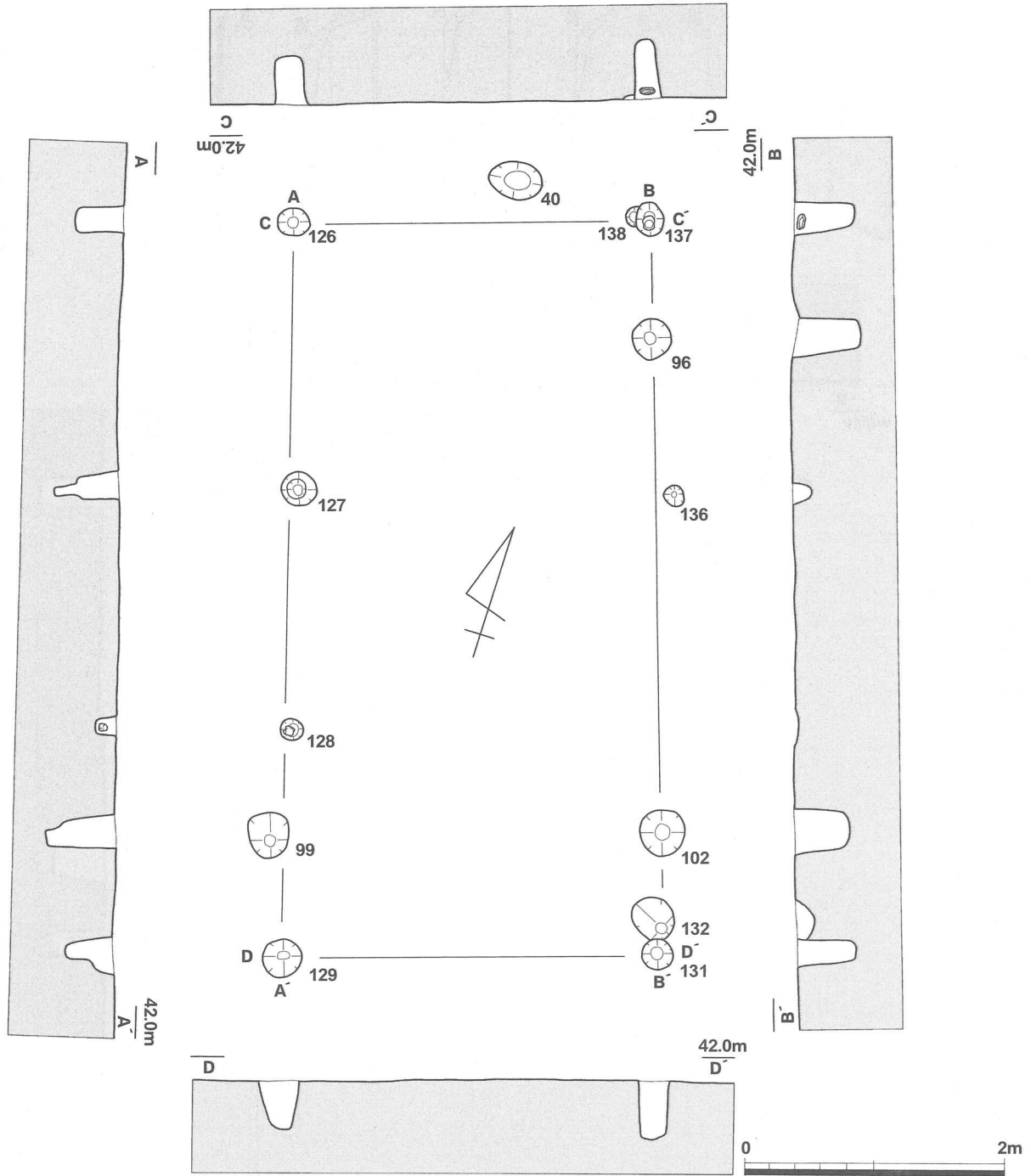
また、22・23は、SP138から出土しているが、SP138はSB03を構成するSP137に切られていることから、SB03に先行する時代の柱穴跡であるが、いずれも13世紀の範囲内での建て替え等と考えられる。73はSB03の柱材でヒノキと考えられる。

SB04 (第13図)

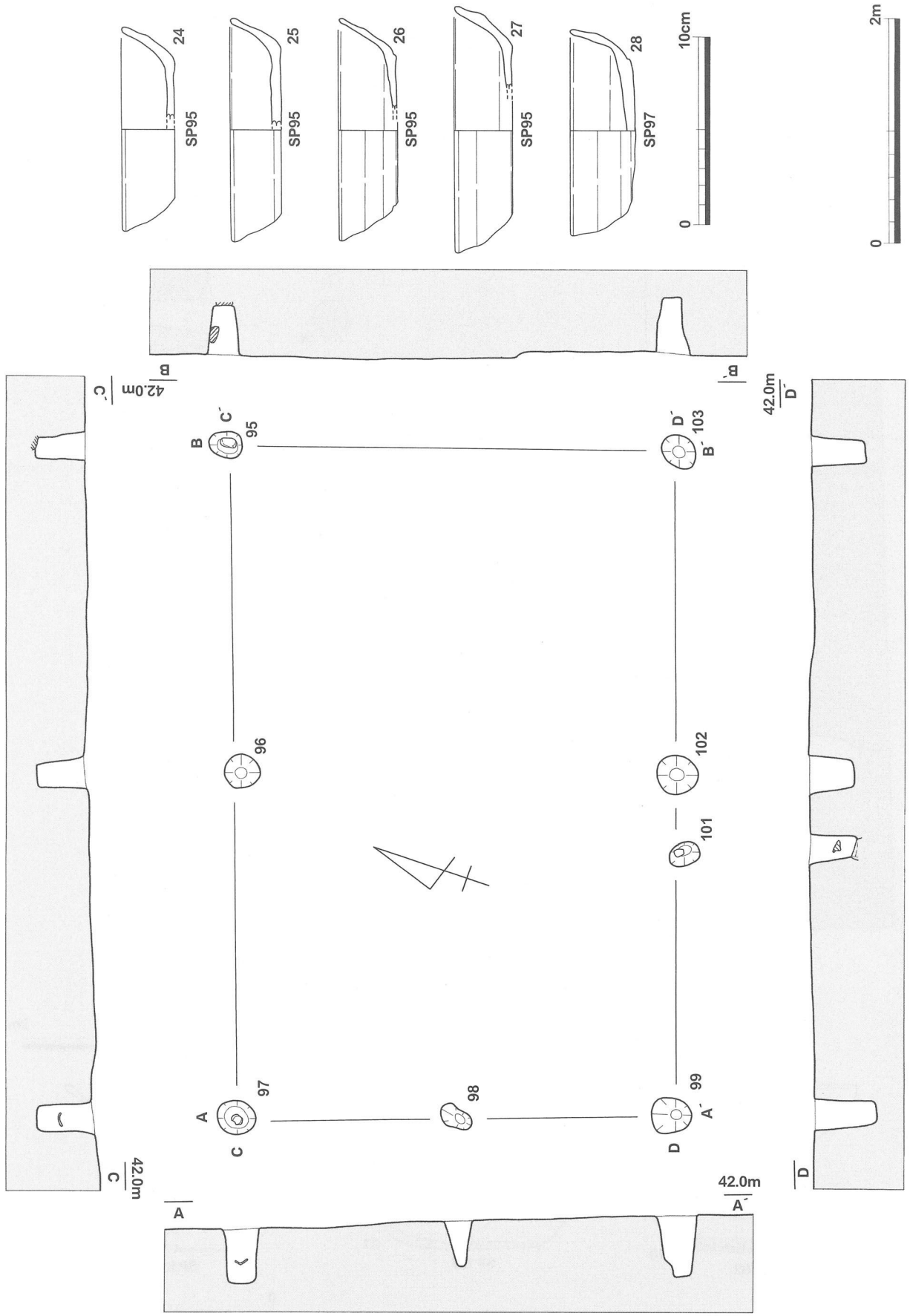
B 2 調査区で確認した1間×2間の東西棟である。西辺では中央に柱穴が認められるため、2間×2間とも考えられるが、柱穴規模が平断面からもわかるように比較的整っている中で、この西辺中央の柱のみ断面形状が異なることから付随的な柱と考えられる。

24～28が出土遺物である。いずれも土師器杯で、27は摩滅しており観察が十分行えていないがヘラ切りと考えられるほか、24～26・28は糸切り成形である。器形は、先のSB03出土資料同様であるが、総体的に口径が大きく、口縁部もあまり外傾しないことから、Ⅱ-⑦～⑨期に相当する資料であるが、ややSB03よりも先行し13世紀中葉～後半代の所産と考えている。

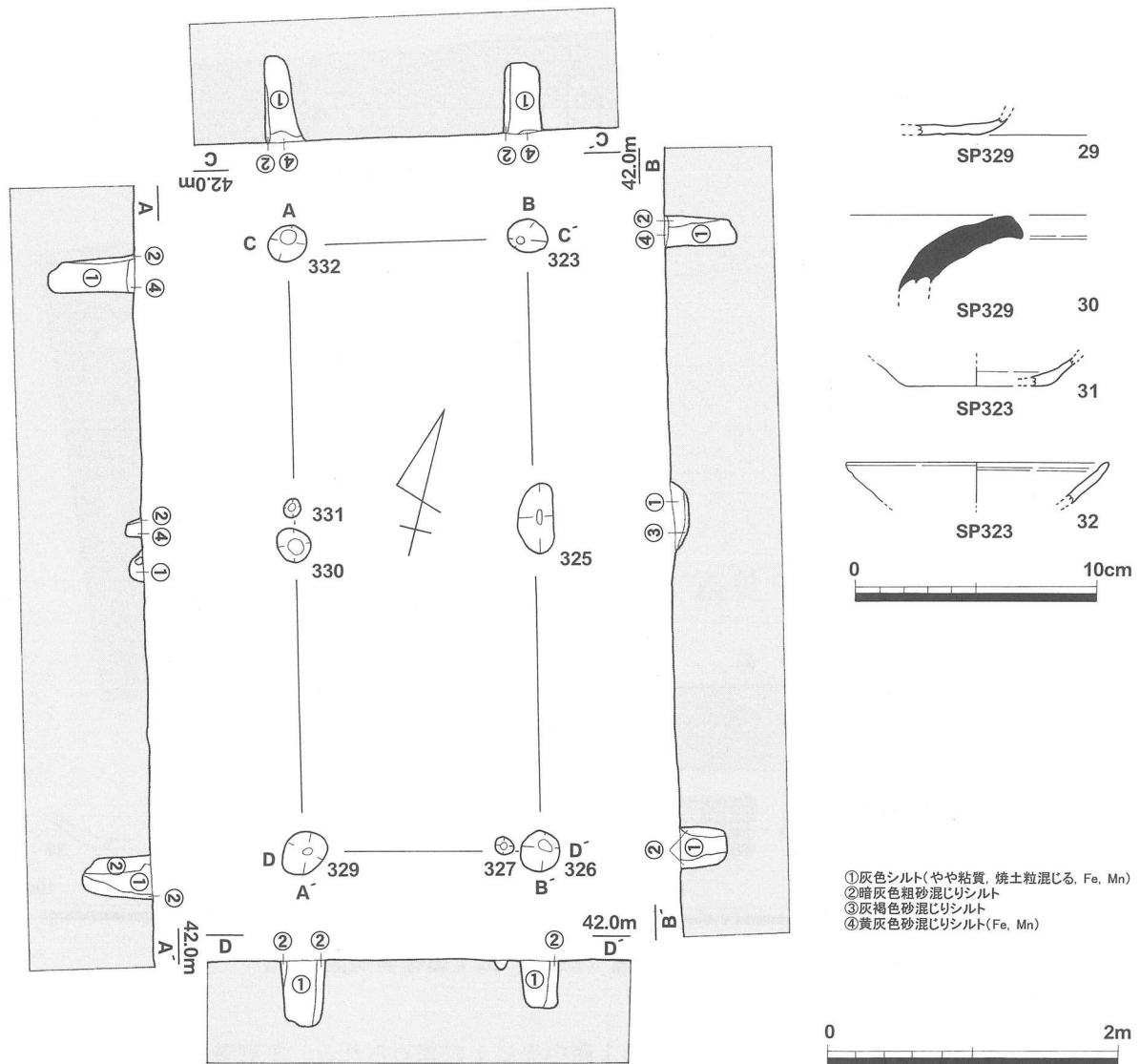
なお、24～27はSP95からの出土であり、地鎮もしくは廃絶に伴う祭祀的行為の所産と考えられる。



第12図 SB03平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/3)



第13図 SB04平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/3)



第14図 SB05平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/3)

SB05 (第14図)

B 2 調査区で確認した 1 間×2 間の南北棟である。西辺・東辺とも中央の柱穴が四隅の柱穴に比べて浅く貧弱である。この掘立柱建物跡を構成する柱穴 6 穴の内 2 穴には添え柱と考えられる小柱穴が認められる。四隅の柱穴は、柱穴に柱材を建てた後、側面に土を充填している。柱の抜き取り痕が見られないことから、撤去に際しては柱を切り取った可能性が高い。

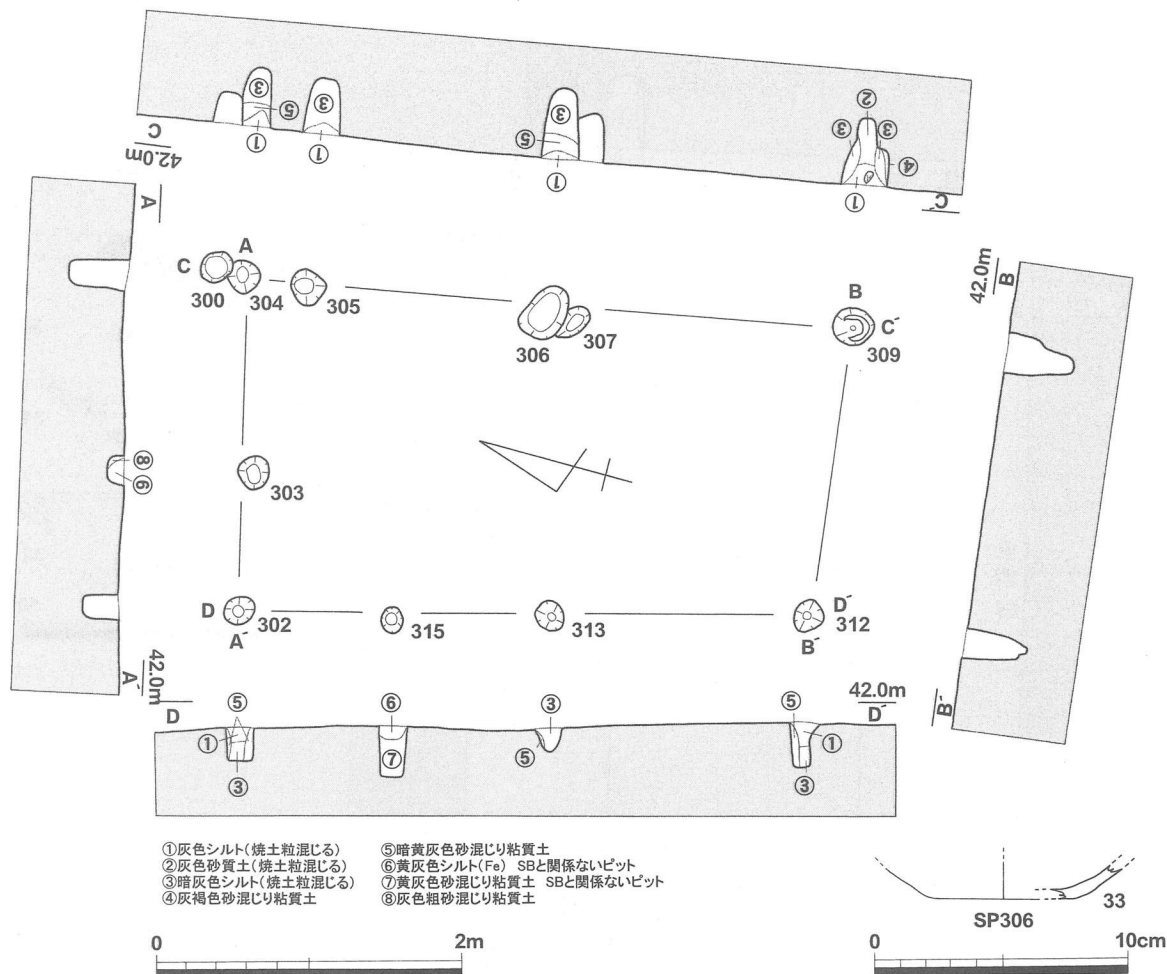
29～32が出土遺物である。29・30はSP329の、31・32はSP323の出土である。

29は、土師器杯の底部片で、年代は不詳である。30は、須恵器甕の口縁部片で、同じく年代は不詳である。31・32は土師器杯で、31は糸切りである。32は、小型化し口縁部の傾きも低くなることなど、後出する要素が大きい。

以上の特徴から、年代を決定することは難しいが、おおよそ14世紀中葉～後半頃と推定される。

SB06 (第15図)

B 2 調査区で確認した 1 間×2 間の南北棟である。全体的にはやや台形に近く、北辺の梁間が南辺に



第15図 SB06平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/3)

比べて広い。北辺の中央少し西に1穴、西辺の1間中央に1穴認められる。北東隅の柱穴は切りあいと添え柱と考えられる柱穴が認められる。また、西辺中央の柱穴にも切り合いが認められる。埋土最上層が皿状に堆積していることから柱の抜き取りが想定される。

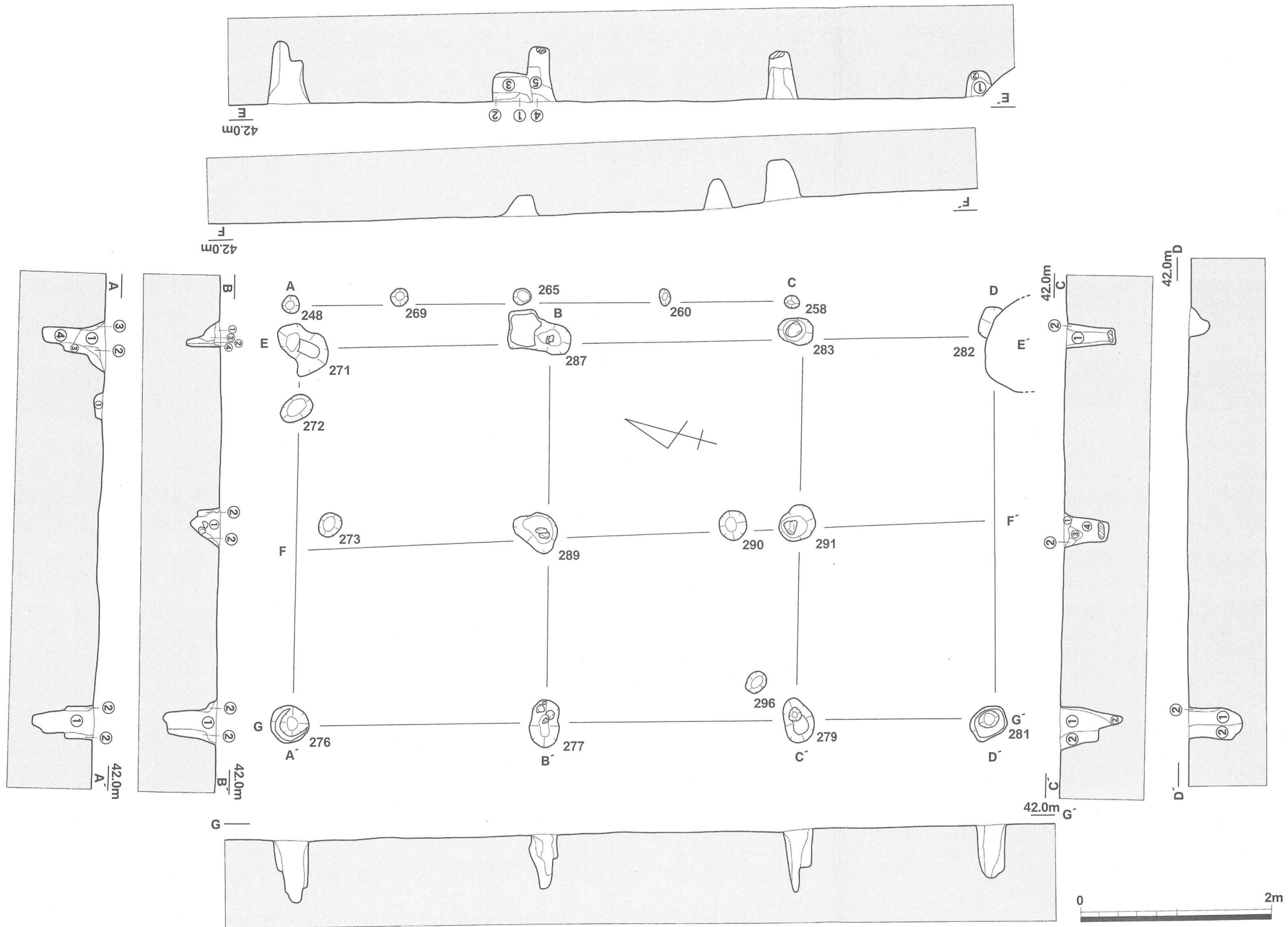
出土遺物は33のみである。33は、土師器杯の底部片で、年代を決定する資料にはならない。

SB07 (第16・17図)

B 2 調査区で確認した2間×3間、総柱の南北棟である。ただし、西辺・東辺の中央に柱穴が認められず、規模・構造等についてはやや問題を残す。このことは、北辺に庇と考えられる小柱穴が見られるものの、2間幅しか確認されていないことから推定できるが、四隅の柱穴の状態が良好であることから、1間×3間の建物の中に2本の支え柱を想定することも可能である。ただ、このことは先の庇の問題を解決するものではない。

この建物では、SP271・287は明らかに柱の抜き取り穴が認められ、その他は柱を切り取ったと考えられる断面形状を示す。

出土遺物は34~47である。34は土師質土鍋の脚部で、中央から先端にかけて欠損している。35は土師器小皿、36は底面ヘラ切りの杯、37は土鍋口縁部でⅢ-⑦期頃、38は土師器杯でⅡ-⑧・⑨期頃、39は



SP271 ① 灰色砂混じりシルト(焼土粒含む)
 ② 灰褐色粘質土
 ③ 灰色粘質土
 ④ 暗灰色粘質土

SP272 ① 灰褐色砂混じり粘質土(黄褐色粘質土ブロック混じる)

SP277 ① 濁灰色シルト(暗褐色砂混じり粘質土ブロック混じる)
 ② 黄灰色砂混じり粘質土
 (暗褐色砂混じり粘質土ブロック混じる)

SP279 ① 灰色粘質土(黄褐色粘質土ブロック混じる)
 ② 黄灰色砂混じりシルト

SP281 ① 灰色砂混じり粘質土(Fe, Mn)
 ② 暗褐色砂混じりシルト(Fe, Mn)

SP282 ① 灰色砂混じりシルト(焼土粒含む)
 ② 暗灰色砂混じり粘質土

SP283 ① 淡灰色シルト(黄褐色粘質土ブロック混じる)
 ② 黄灰色砂混じりシルト(Fe, Mn)

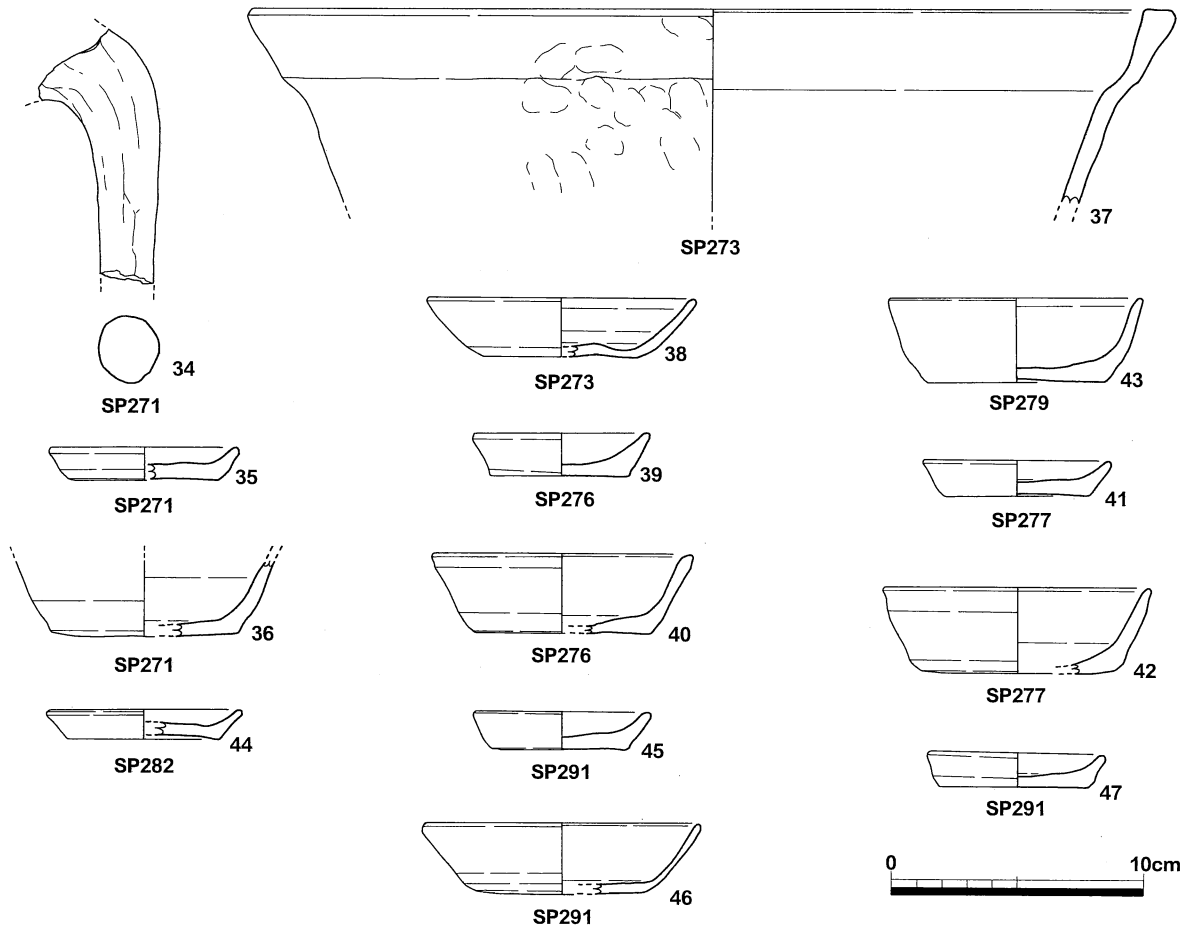
SP287 ① 黄灰色砂混じりシルト
 ② 暗褐色砂混じり粘質土
 ③ 暗灰褐色砂混じり粘質土
 ④ 灰色砂混じりシルト
 ⑤ 灰色粘質土

SP289 ① 黄灰色砂混じりシルト
 ② 灰褐色粗砂混じり粘質土

SP291 ① 淡灰色砂混じりシルト(暗褐色粘質土ブロック混じる)
 ② 黄灰色砂混じりシルト
 ③ 濁灰褐色砂混じり粘質土(暗褐色粘質土ブロック混じる)
 ④ 灰色砂混じりシルト(暗褐色粘質土ブロック混じる)

SP300 ① 灰色砂混じり粘質土(焼土粒混じる)
 ② 灰褐色砂混じりシルト

第16図 SB07平・断面図 (1/50)



第17図 SB07出土遺物実測図 (1/3)

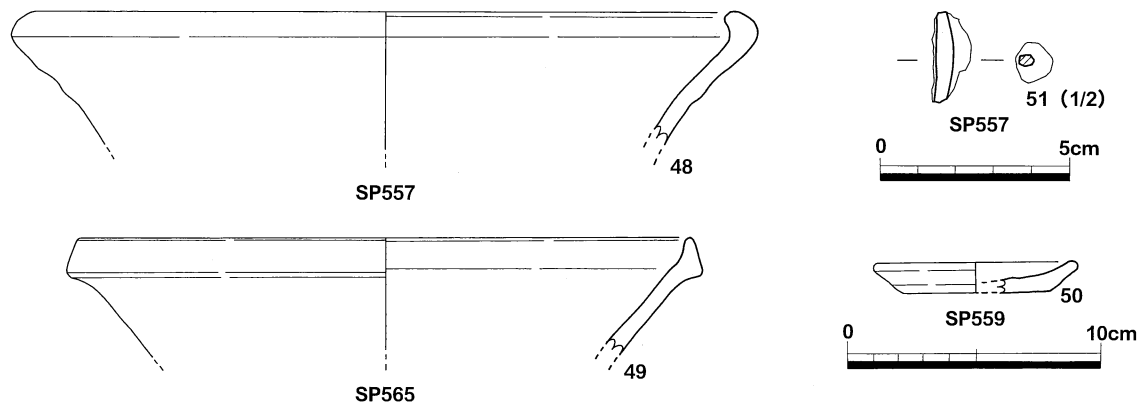
土師器小皿で底面糸切り、40は土師器杯で底面ヘラ切り、41は土師器小皿で糸切り、42・43は土師器杯で糸切り、44は土師器小皿、45も土師器小皿で糸切り、46は土師器杯でヘラ切り、47は土師器小皿で糸切りである。総体に土師器杯は小型化したものが多く、深い。ヘラ切り、糸切りが混在することから、37の資料もあり、14世紀代の資料が不明確な点はあるが、Ⅱ-⑦~⑨期、13世紀後半代と考えておく。

SB08 (第18・19図)

B2・3、C2・3調査区で確認した1間×2間の東西棟である。北・東・南の三辺には庇が見られる。ただし、南辺の西端には、北辺と対応する柱穴が確認できていない。また、建物本体の西辺には主柱穴P539・547の間に4穴認められ、これに対応する形で西辺に並行して柱穴列が存在する。この部分に何らかの施設を想定することが可能であり、入り口施設の痕跡ではないかと考えられる。これは、柱穴が均等距離で検出されておらず、ほぼ中央の柱間がやや広いことによる。

建物全体の柱穴には、根石・詰石が多く見られる。

出土遺物は、48~51である。48・49は須恵質こね鉢である。48は口縁端部が内側に円く湾曲し、あまり例を知らない。49は口縁端部に面を持ち、上方に三角形に端部を納める。東播系と考えられ、13世紀前半代と考えられる。50は、土師器小皿で、摩滅しているが糸切りと考えられ、先のこね鉢とほぼ同年代と考えうる。51は不明鉄製品である。以上のことから、13世紀前半代の掘立柱建物跡と考える。



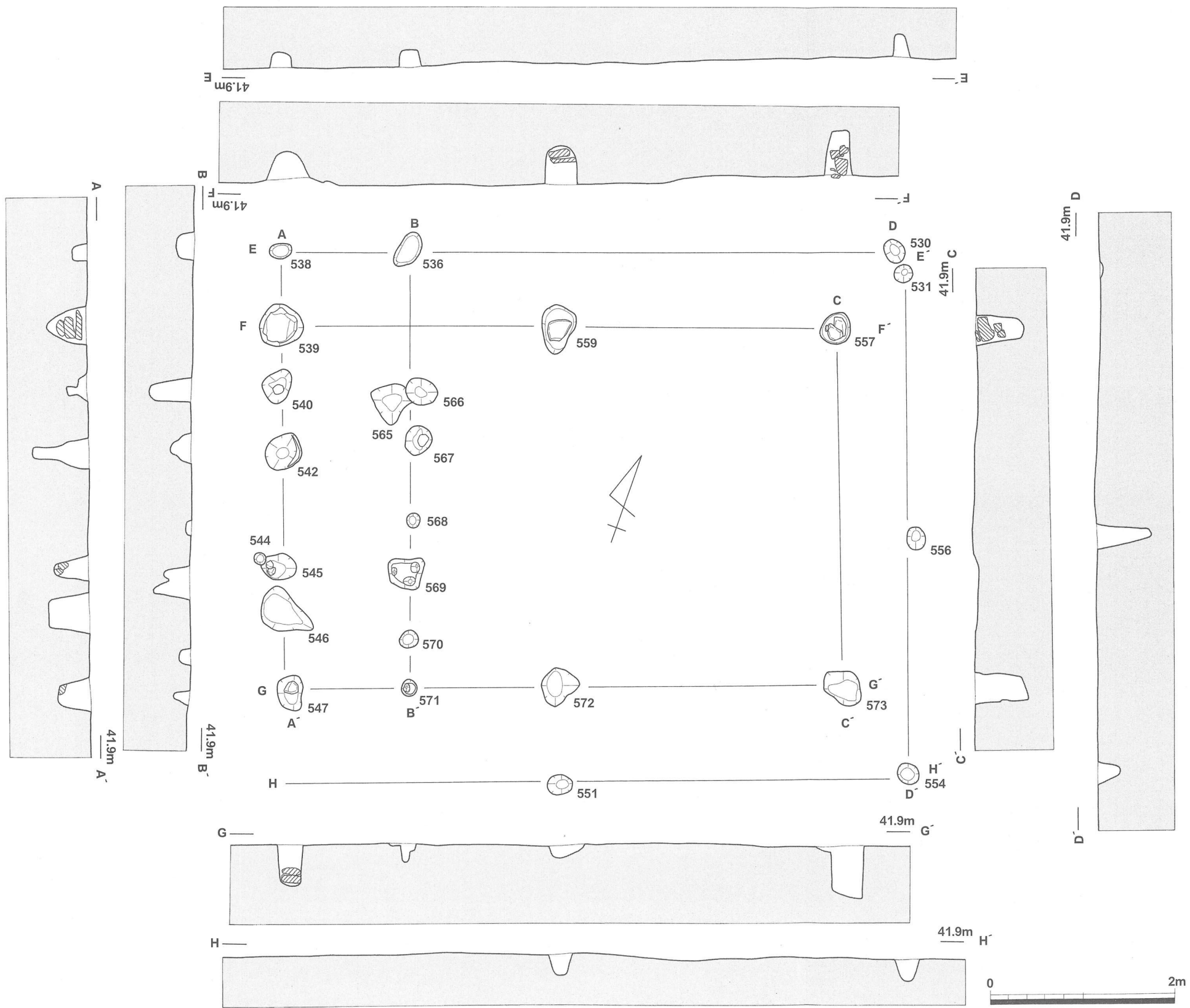
第19図 SB08出土遺物実測図 (1/3)

SB09 (第20・27図)

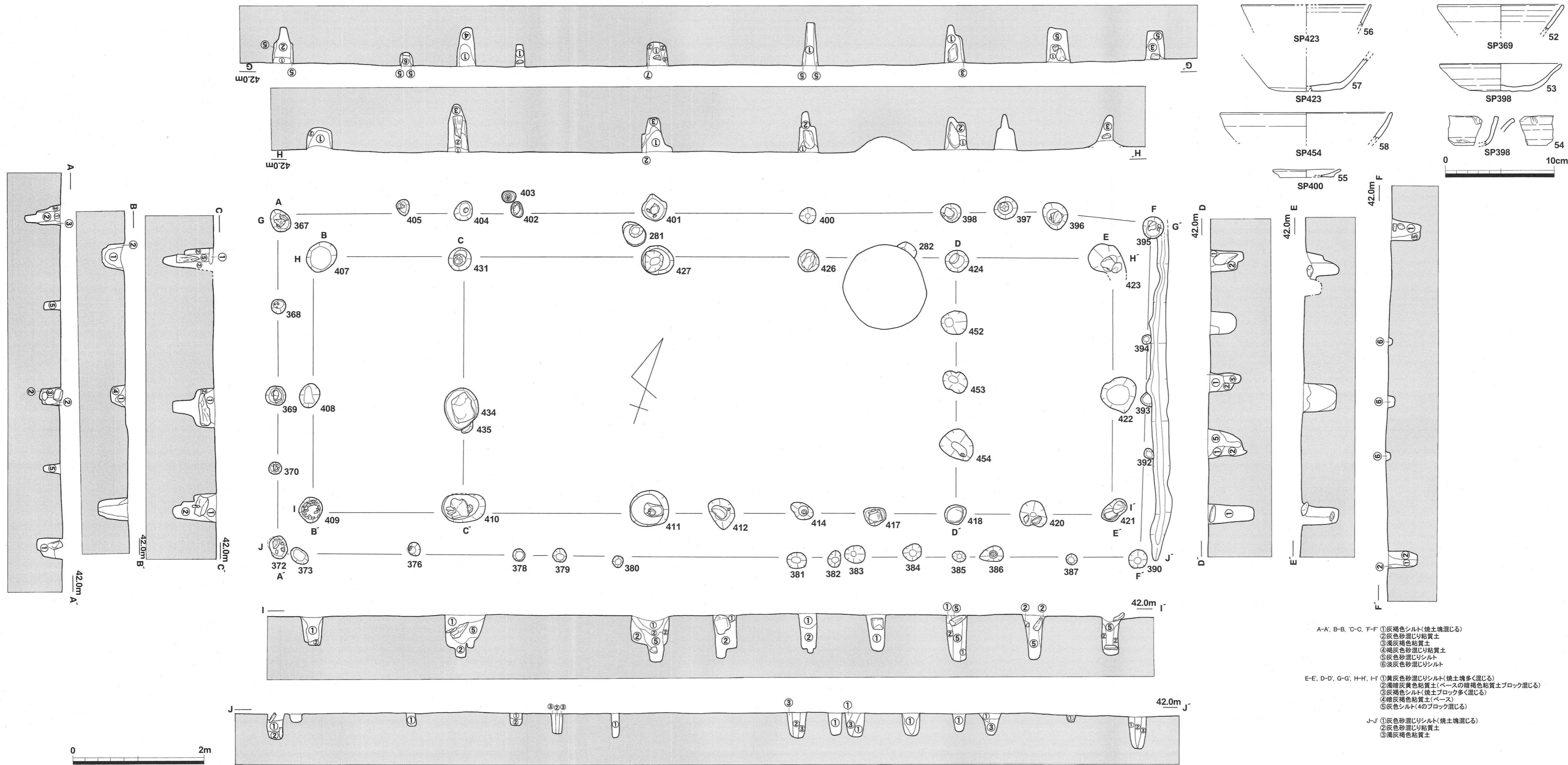
B 2・3 調査区で確認した 2 間× 5 間の東西棟である。四辺に庇が確認される。また、東辺には庇に接するように雨落ち溝がある。建物本体では、西辺から 1 間にあたる SP431・410 を結ぶ線上に SP434 があり、東辺から 1 間にあたる SP424・418 を結ぶ線上に SP452・453・454 がほぼ均等に配置されている。この東西の 1 間幅の空間は、中間の 3 間幅と区分された何らかの施設を想定することができる。

また、庇のうち南辺を構成する柱穴列は、他の三辺に比べて不揃いであり、この部分にも他とは異なる状態、例えば出入り口などを想定しうるかも知れない。第27図75は、SP431に残存していた柱材である。出土状態からすると、平坦な部分を下に設置しており、上部に向かって細くなる傾向がある。材質は、ヒノキである。

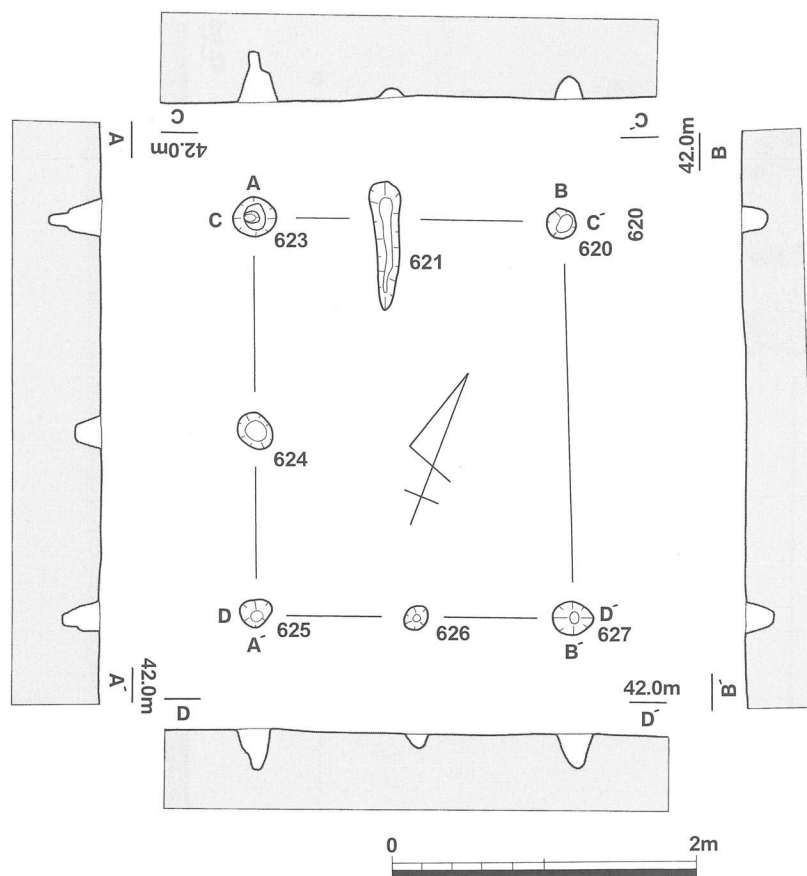
出土遺物は52～58で、このうち庇の柱穴から52～55、建物本体の柱穴から56～58が出土している。52・53は土師器杯で、53はヘラ切り底面に板目圧痕が見られる。54は古瀬戸の卸皿の片口部分で、内面に卸目が見られる。13世紀後半に位置づけられる。55は土師器小皿、ヘラ切りが見られる。56～58はいずれも土師器杯で、57はヘラ切りである。杯の形態が小型化し、器壁も薄くなる傾向にあることから、54の資料があるものの14世紀前半まで下ると考えられる。



第18图 SB08平·断面图 (1/50)



第20図 SB09平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/3)



第21図 SB10平・断面図 (1/50)

SB10 (第21図)

C 3 調査区で確認した 2 間×2 間の南北棟である。北辺中央の柱穴は溝状を呈しており、東辺の中央柱穴は確認できなかった。出土遺物はない。

SB11 (第22図)

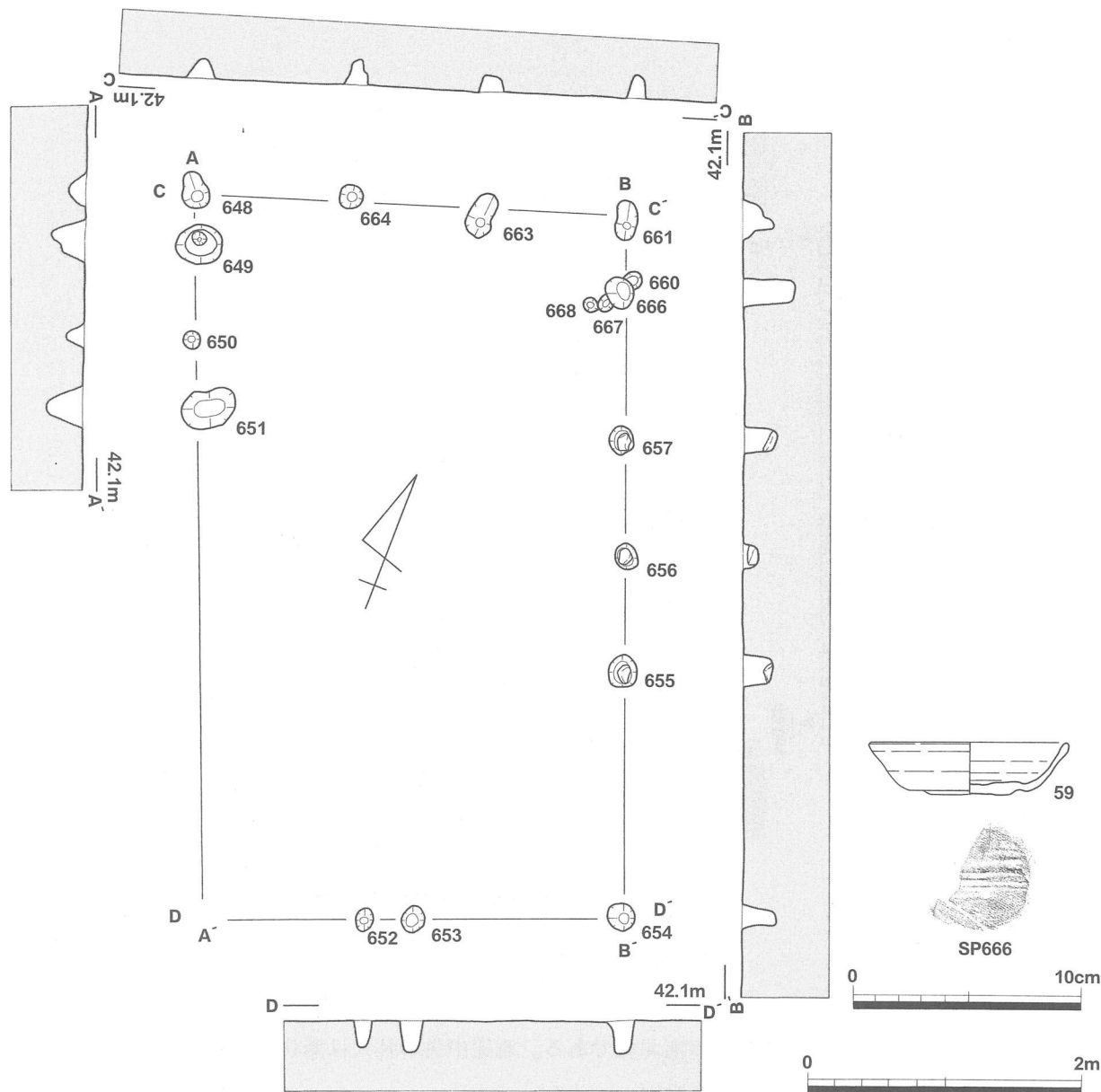
A 3・B 3 調査区で確認した 2 間×5 間の南北棟である。北辺では 3 間、西辺及び南西隅の柱穴を確認していないため、掘立柱建物跡かどうか不明な点もあるが、他の柱穴列を積極的に評価した。東辺においても、北側 1 間と南側 1 間の間隔が他と比べて不均衡である。

遺物は 59 一点であり、SP666 からの出土である。SP666 は、建物の主たる柱穴である SP660 に切られているが、先後関係は認められるものの、建物に伴う柱穴とも考えられるため、SB11 に伴うものか、もしくは先行する年代の資料となるかは明確ではない。

59 は、土師器杯で小型化している。底面には板目状圧痕が認められる。1 点のみの出土であり、年代を確定するには至っていないが、14 世紀前半頃と考えるのが妥当であろう。

SB12 (第23図)

B 4 調査区で確認した 1 間×3 間の東西棟である。この掘立柱建物跡もやや不規則な柱穴配置となっている。東辺から 1 間の間隔が狭く、何らかの施設を想定しうる。また北辺の西から 1 間を構成する柱



第22図 SB11平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/3)

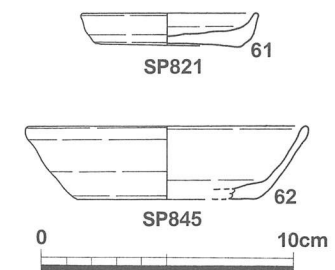
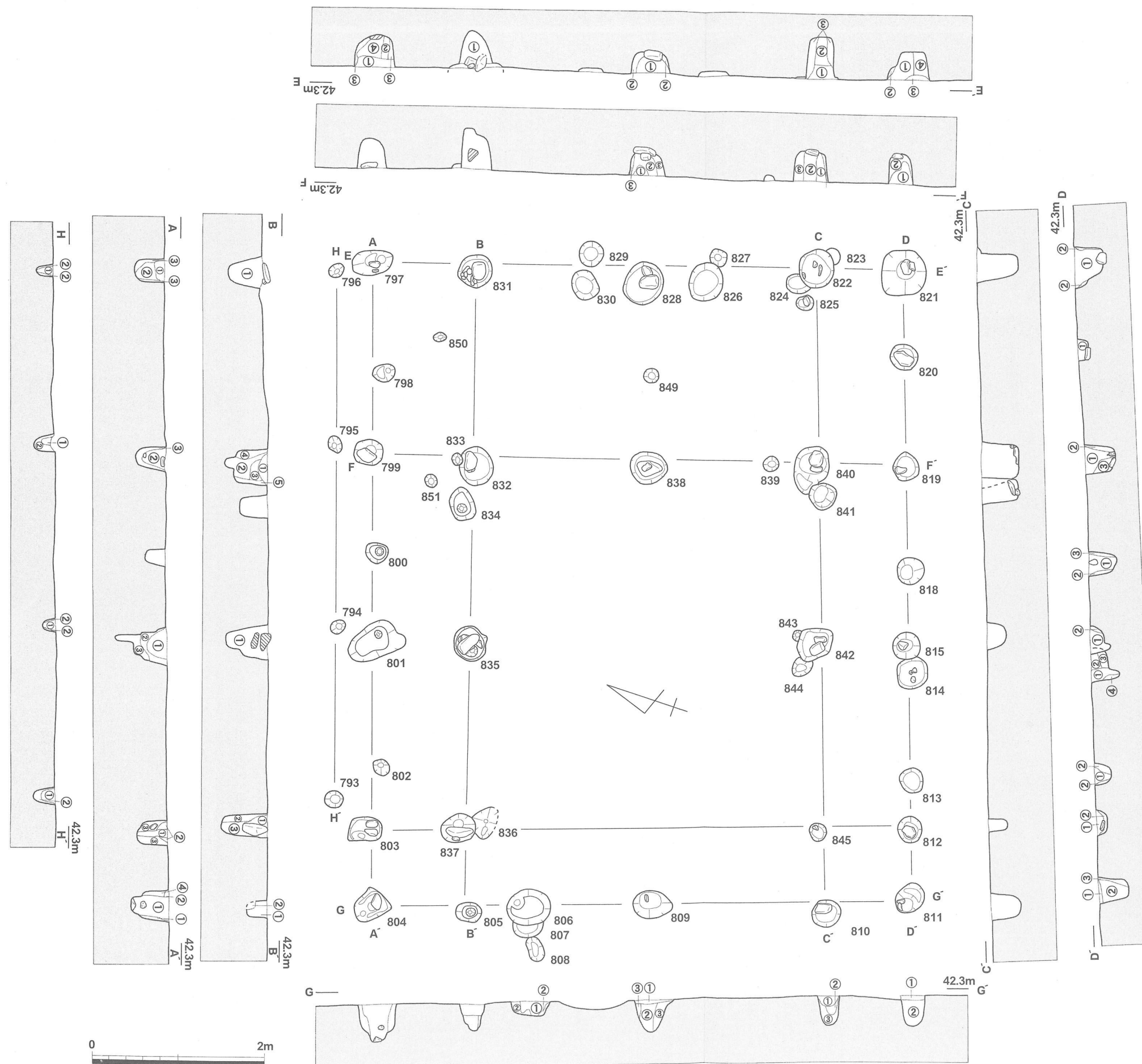
穴が3穴からなっており、主柱に対して添え柱的な役割をもつものか、本来細い3本の柱で構成されていたものかは判然としない。SP759は、主柱穴SP761と同758のほぼ中間にあり、想定ライン上に接することからSB12に伴うものとも考えることもできるが、対象位置に柱穴が確認できなかったため、一応除外している。

出土遺物は60のみで、弥生時代の石鏃である。他の掘立柱建物跡の時期から考えて、混入と考えられる。

SB13・SA04 (第24図)

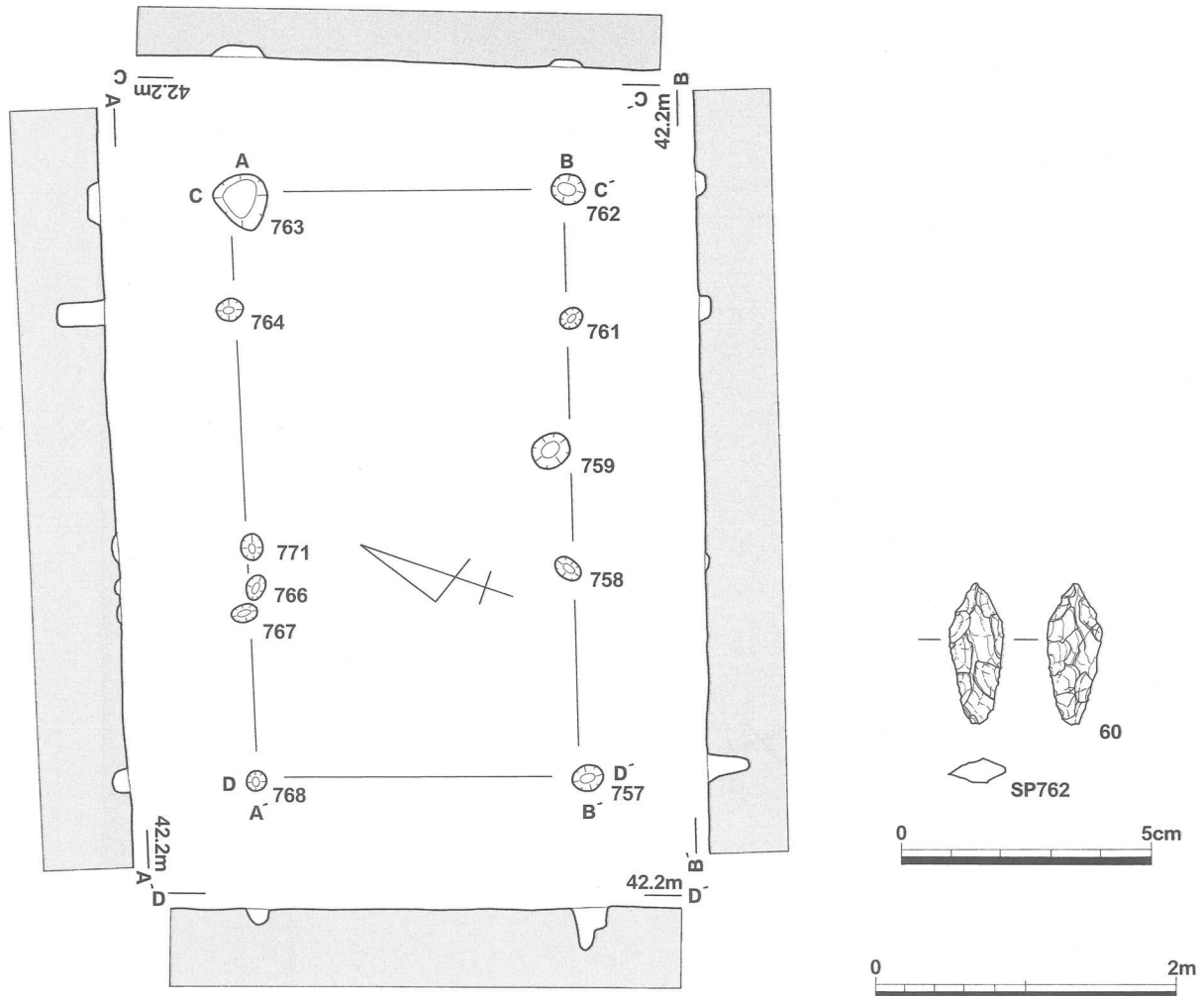
B 4 調査区で確認した4間×4間の東西棟である。この掘立柱建物跡は、2間×2間の中央部分を核として、南・北・西側に幅の狭い1間分の空間を持つ。中央部分の西辺には主柱穴が1穴欠落している。また、北辺に接するように柵列 (SA04) もしくは庇と考えられる小柱穴列が見られる。掘立柱建物跡を構成する柱穴は、整然とした状態ではなく複数の柱穴が重複したり集合したりしており、建て替えもしくは補強などの要因が考えられるが、いずれも確定するには至らない。

柱穴の土層堆積状況からは、最上層が皿状に堆積するものや、柱材の土壌化を想定できるような状況



- SP793, 794 ①黄灰色シルト
②暗黄灰色粘質土
- SP795, 796 ①灰色シルト
②暗灰色粘質土(暗褐色粘質土ブロックを含む)
- SP806 ①灰色シルト(やや砂質気味)
②濁灰褐色砂混じりシルト
- SP808 ①黄灰色シルト(Mn, ブロック, Fe含む)
②灰色砂質シルト
③濁灰黄色砂質シルト
- SP810 ①黄灰色シルト(Mn, Fe)
②暗褐色粘質土
③暗黄灰色粘質土
- SP811 ①濁灰黄色シルト(Mn)
②灰褐色シルト(やや粘質)
- SP812 ①黄灰色シルト
②暗灰色粘質土
- SP813 ①濁灰黄色シルト(やや粘質)
②暗黄灰色粘質土
- SP814 ①黄灰色シルト(やや粘質)
②黄灰色粘質土(小礫, 暗褐色粘質土ブロック混じり)
③灰色シルト
④濁灰灰色粘質土
- SP815 ①濁灰色粘質シルト
②黄灰色粘質土
- SP818 ①黄灰色シルト(Fe)
②灰色砂混じり粘質土
③黄灰色粘質土
- SP819 ①灰色シルト(Fe, Mn)
②灰黄色砂混じりシルト
③灰色粘質土
- SP820 ①灰黄色砂混じりシルト
- SP821 ①灰黄色シルト(やや粘質, 小礫混じり)
②濁暗黄灰色シルト
③淡黄灰色シルト
④暗灰色粘質土
- SP822 ①黄灰色シルト(小礫混じり, Fe)
②濁暗灰色シルト
③灰色粘質土
- SP828 ①灰黄色砂混じり
②灰褐色粘質土
- SP838 ①淡灰色シルト
②灰色シルト(やや粘質, Fe, Mn含む)
③濁灰黄色砂混じり粘質土
- SP840 ①淡灰色シルト(Fe)
②灰色砂混じりシルト
(Fe, Mn, 黄褐色粘質土ブロック含む)
③濁灰褐色砂混じり粘質土
- SP797, 799, 801~805 ①黄灰色細砂質土
831, 832, 835, 837 ②灰色粘質土
③暗灰色シルト
④暗灰褐色粗砂混じり粘質土

第24図 SB13・SA04平・断面図(1/50)、出土遺物実測図(1/3)



第23図 SB12平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (2/3)

もあり、一様ではなく柱の抜き取りや切り倒しなど必要に応じた柱材の再利用が考えられる。

出土土器は61・62の2点で、いずれも支柱穴から出土している。

61は、土師器小皿で底面はヘラ切りである。62は土師器杯で、これもヘラ切りである。62は、底径と口径の比率及び深さなどからⅡ-⑦~⑨期の範疇に入ると考えられ、61もこの時期と考えて矛盾がないため13世紀後半代の所産としておく。

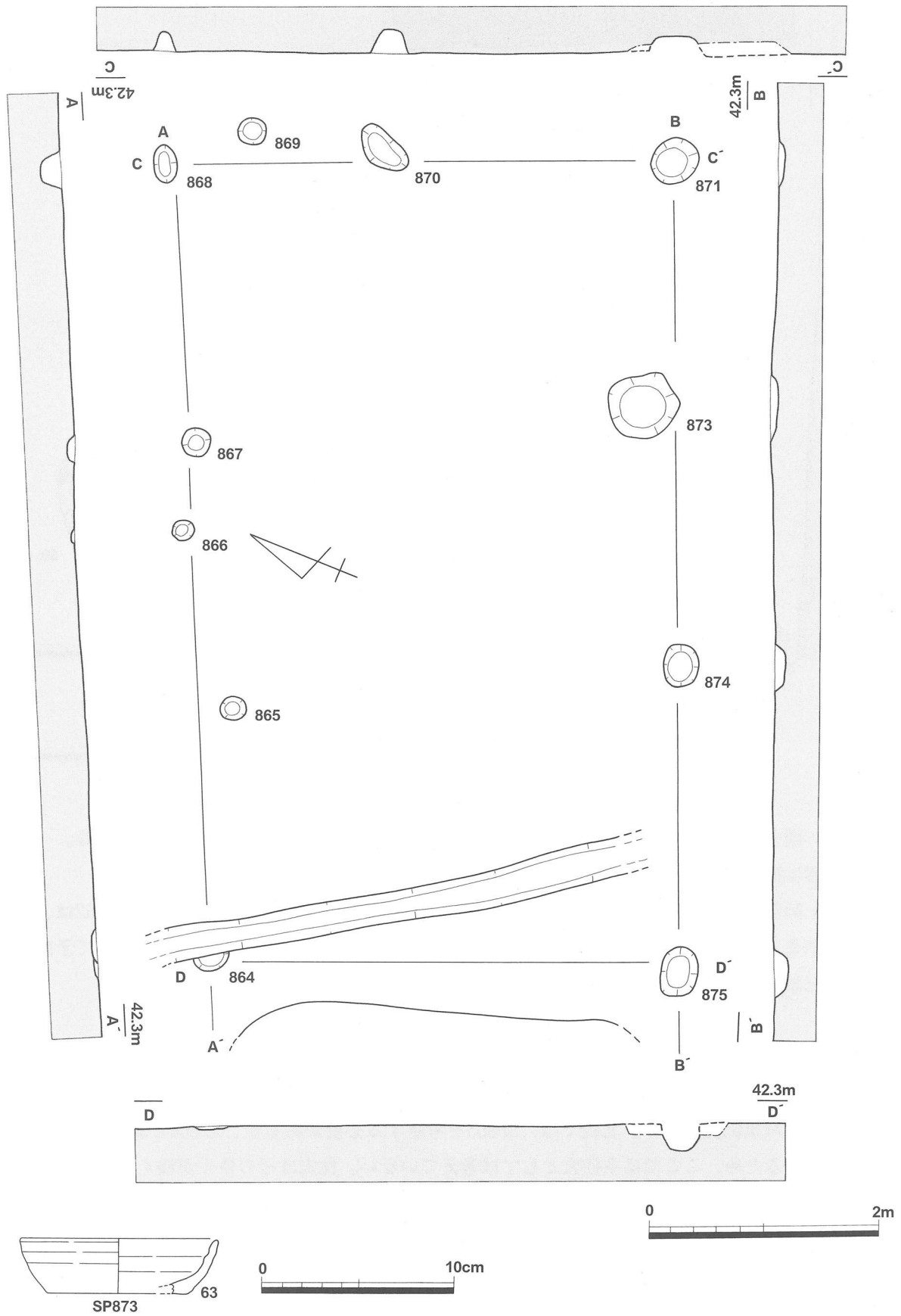
SB14 (第25図)

B 5 調査区で確認した2間×3間の東西棟である。西辺の中央柱穴が確認できず、北辺・南辺の支柱穴が必ずしも対象位置にない。北辺では、SP865を考慮する必要があるが、SP864とSP868の線上から大きく離れているため、ここでは支柱穴としては考えていない。柱穴はその多くが浅く、削平を受けたと考えられる。

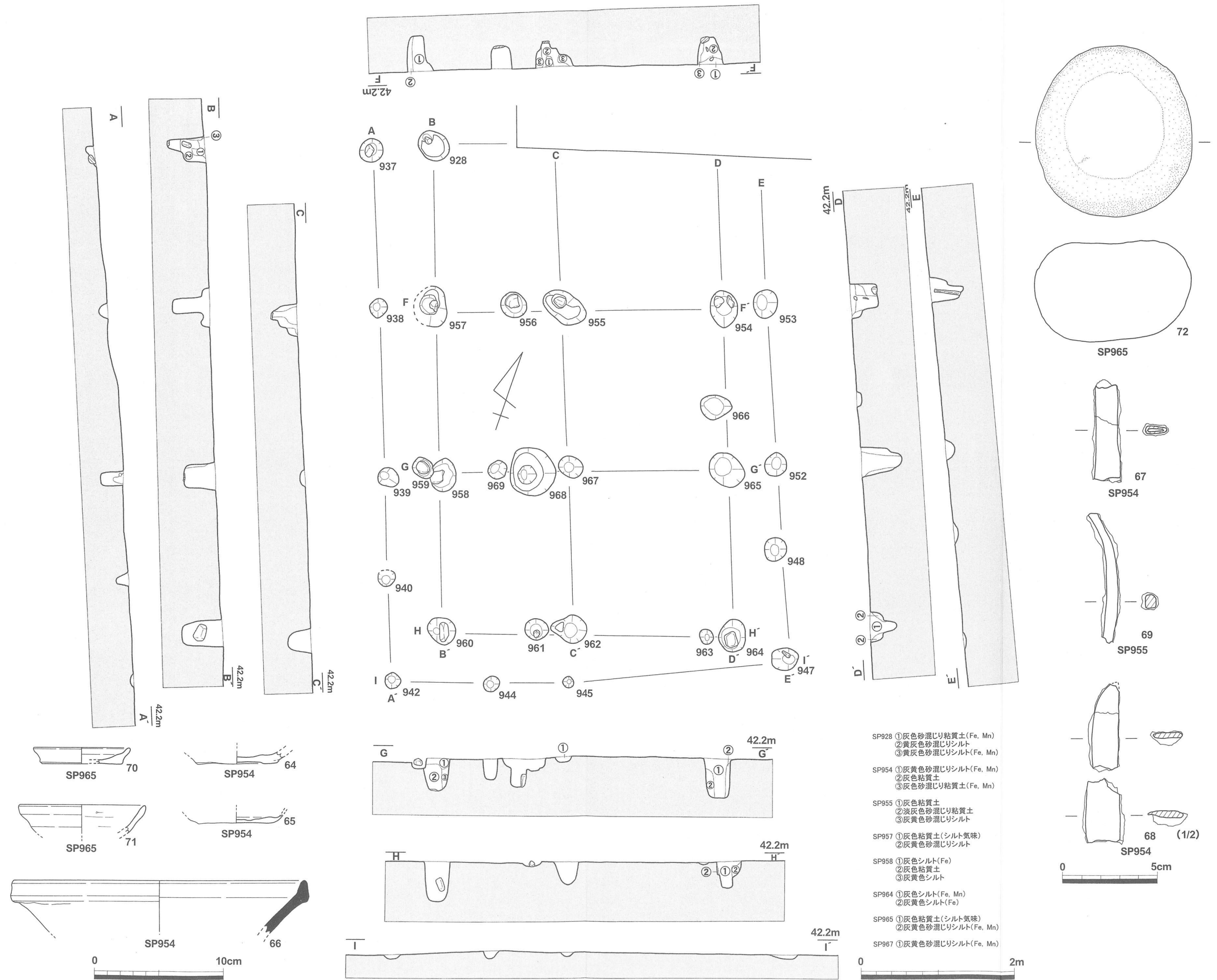
出土遺物は63のみで、土師器杯である。先の61とほぼ同時期、13世紀後半代と考えておく。

SB15 (第26・27図)

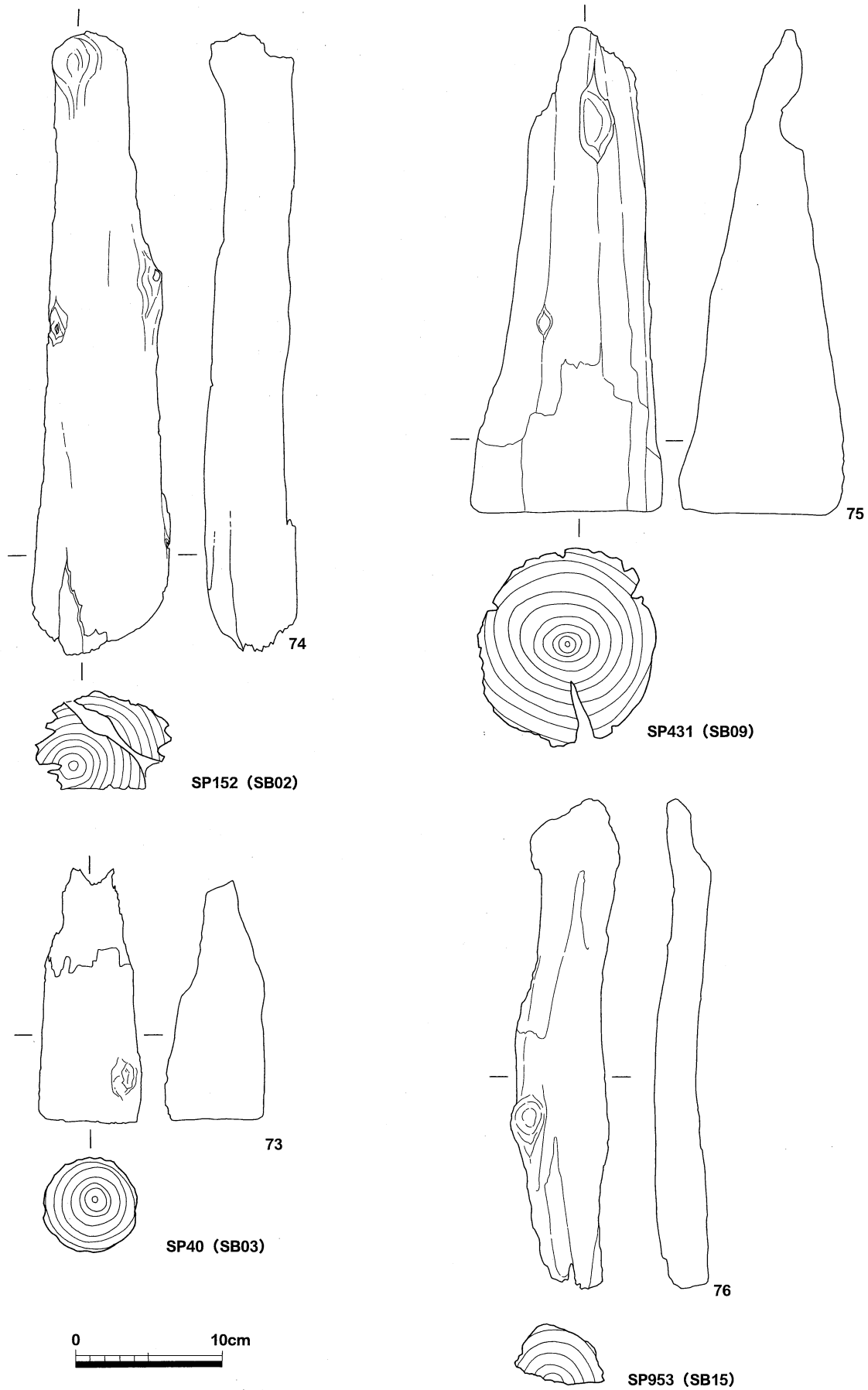
B 4・5 調査区で確認したが、北辺が調査区外に延びるため全体を明確にできない。現状では南北棟



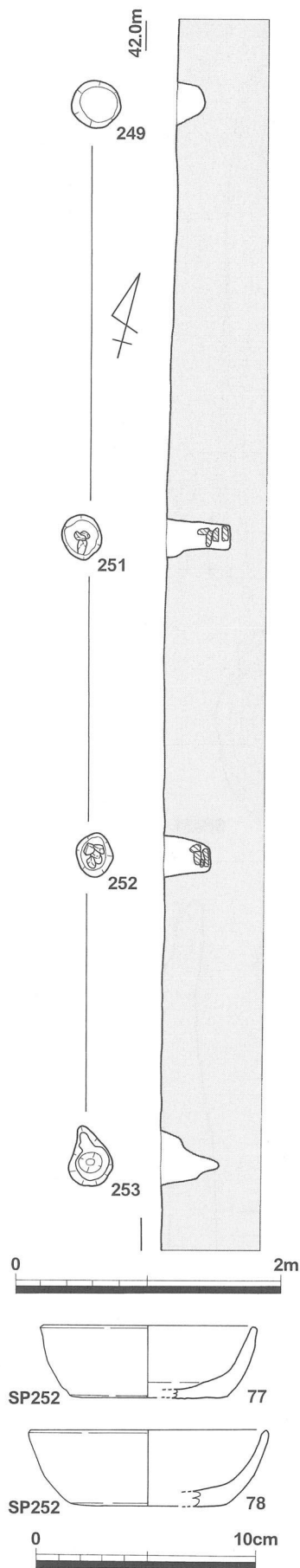
第25図 SB14平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/3)



第26図 SB15平・断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/3, 1/2)



第27図 掘立柱建物出土遺物実測図 (1/4)



第28図 SA02平・断面図 (1/50)
出土遺物実測図 (1/3)

で2間×3間の総柱建物である。北辺を除く三辺に庇が確認できる。SP958に対するSP959のような小柱穴が3穴確認される。また、SP956からSP961のラインが中軸線に並行して確認されるため、このラインにも何らかの意味を見出すことができる。図面ではSP967を支柱穴として考えているが、隣接するSP968がより支柱穴としてふさわしい。しかし、これを採用した場合、中軸線のずれと先の中軸線に並行する柱穴列の取り扱いに問題ができる。柱穴の土層序から、たびたび触れているように皿状の堆積が認められ、この状態は柱材の抜き取り後の堆積を示すものと考えている。庇も、南西隅では、SP940・944のようなコーナー用の補助柱があるのに対して、南東隅ではSP947のみで対応するなど、差が認められる。このことは、柱材の太さに起因するものか、屋根の構造に起因するものかは判断できない。

第27図76は、SP953に残存していた柱材である。材質は、スギである。

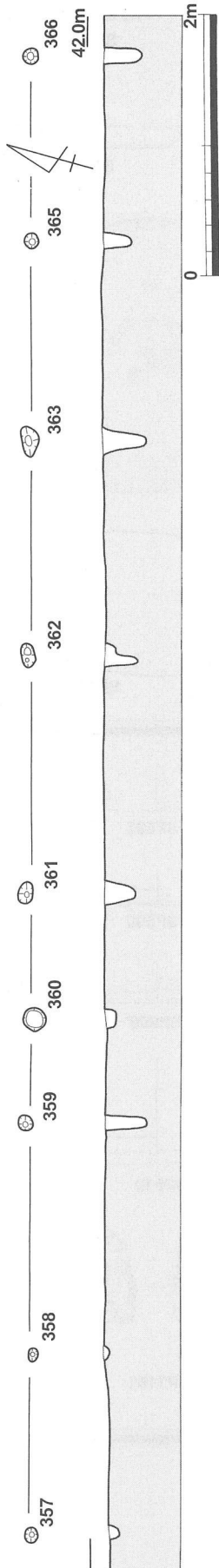
柱穴からは、64～72の資料が出土している。64・65は土師器杯で、両者とも板目圧痕が見られ、65はヘラ切り成形である。66は東播系こね鉢で、Ⅱ-⑦～⑨期に比定される。67～69は鉄器で、刀子及び針と考えている。70は土師器小皿で底面はヘラ切り、71は土師器杯で小型化している。72は、この遺跡の弥生時代に伴う円礫で、投弾としての使用を考える。年代は70・71の形態から14世紀前半代と考えている。

2 柵列跡

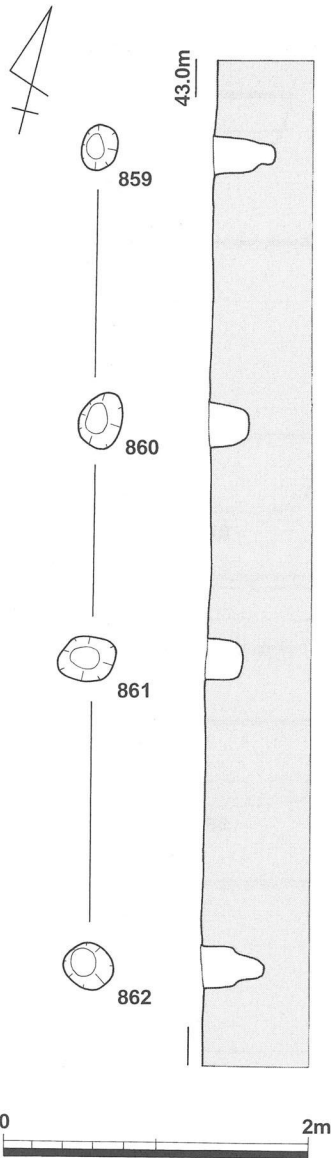
SA02 (第28図)

B2調査区で確認した。SB03・06の中間に設置されており、4穴が確認されている。断面形状からは、先に触れたSB09の残存柱材を設置するための柱穴底が平坦になるものや、先細りする形状が観察されるものなど、多様な柱材が用いられている。これは、掘立柱建物跡にも共通する事項である。また、庇や柵列の柱穴には、掘立柱建物跡と同様の柱穴を持つものと、小柱穴で構成されるものがあり、おのずと庇や柵の構造に差異があることが確認できる。

出土遺物は77・78の2点で、いずれもSP252から出土している。77・78とも土師器杯で、摩滅のため底面の状態は明らかでない。他の資料同様、底径・口径の差が少なく、深い点から見て同時期と考えられ、13世紀後半代に位置づけうる。



第29図 SA03平・断面図 (1/50)



第30図 SA05平・断面図 (1/50)

SA03 (第29図)

B 2 調査区で確認し、SB09の北辺に並行する形で検出されている。柱間などSB09と対称とはならないことから、柵列と判断した。ただし、SB09と並行することから同一年代に位置づけて問題なかろう。柱穴の形状は、先に述べた小柱穴にあたり、垣根程度の柵と考えている。出土遺物はない。

SA05 (第30図)

A 4・5 調査区で確認した。SB13の西側で検出されているが、方向や位置から、調査区内で検出された掘立柱建物跡に伴うものではない。現状では4穴確認されており、掘立柱建物跡と同様の柱穴を有する。出土遺物はない。

3 柱穴跡 (第31・32図)

ここでは、個々の柱穴は取り上げないが、柱穴から出土している遺物を紹介する。

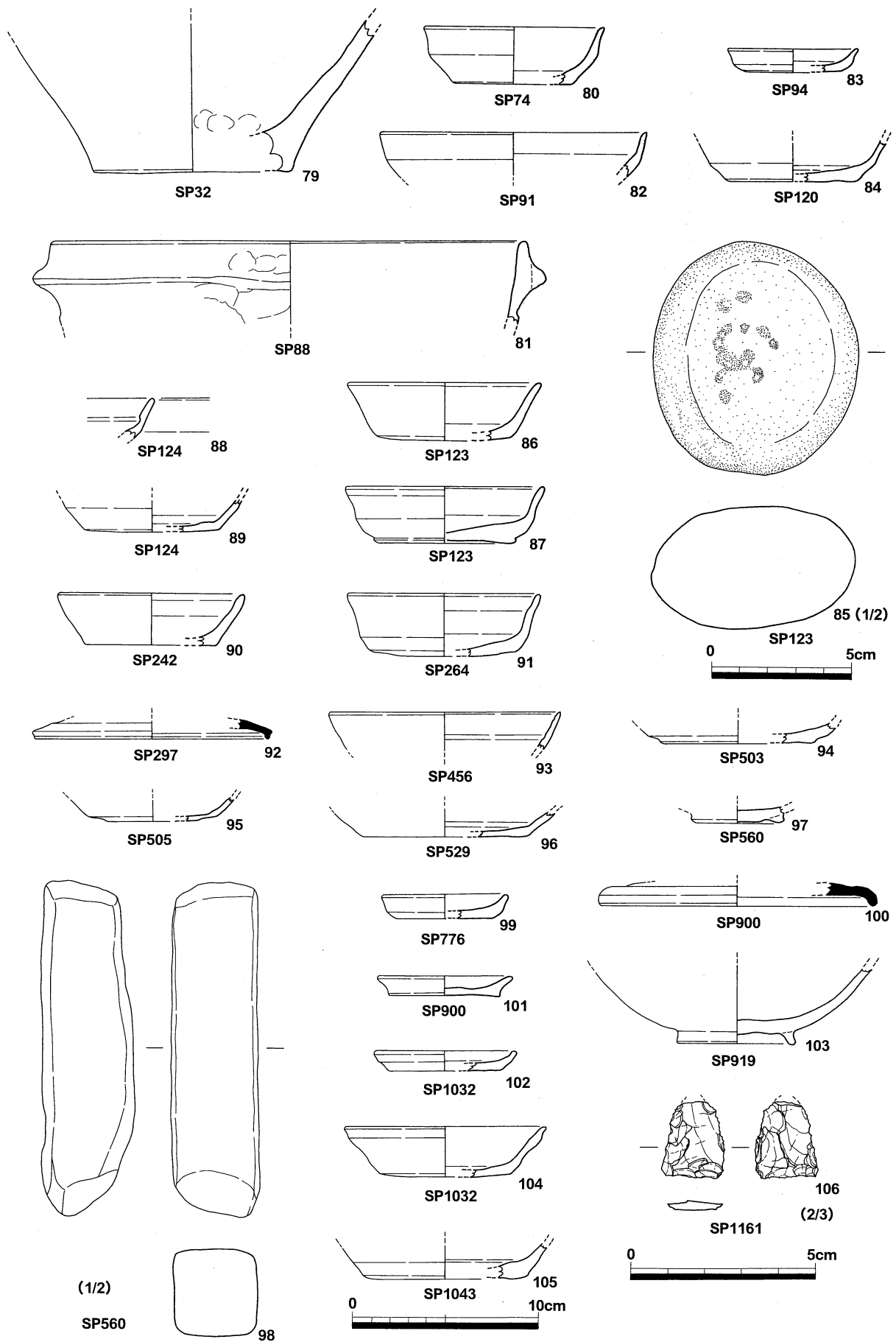
SP32 B 2 調査区で確認した。79は、平底の弥生土器壺底部片である。破片の状態からは、柱穴に伴うもの

とは認識しておらず、柱穴の年代は不詳である。

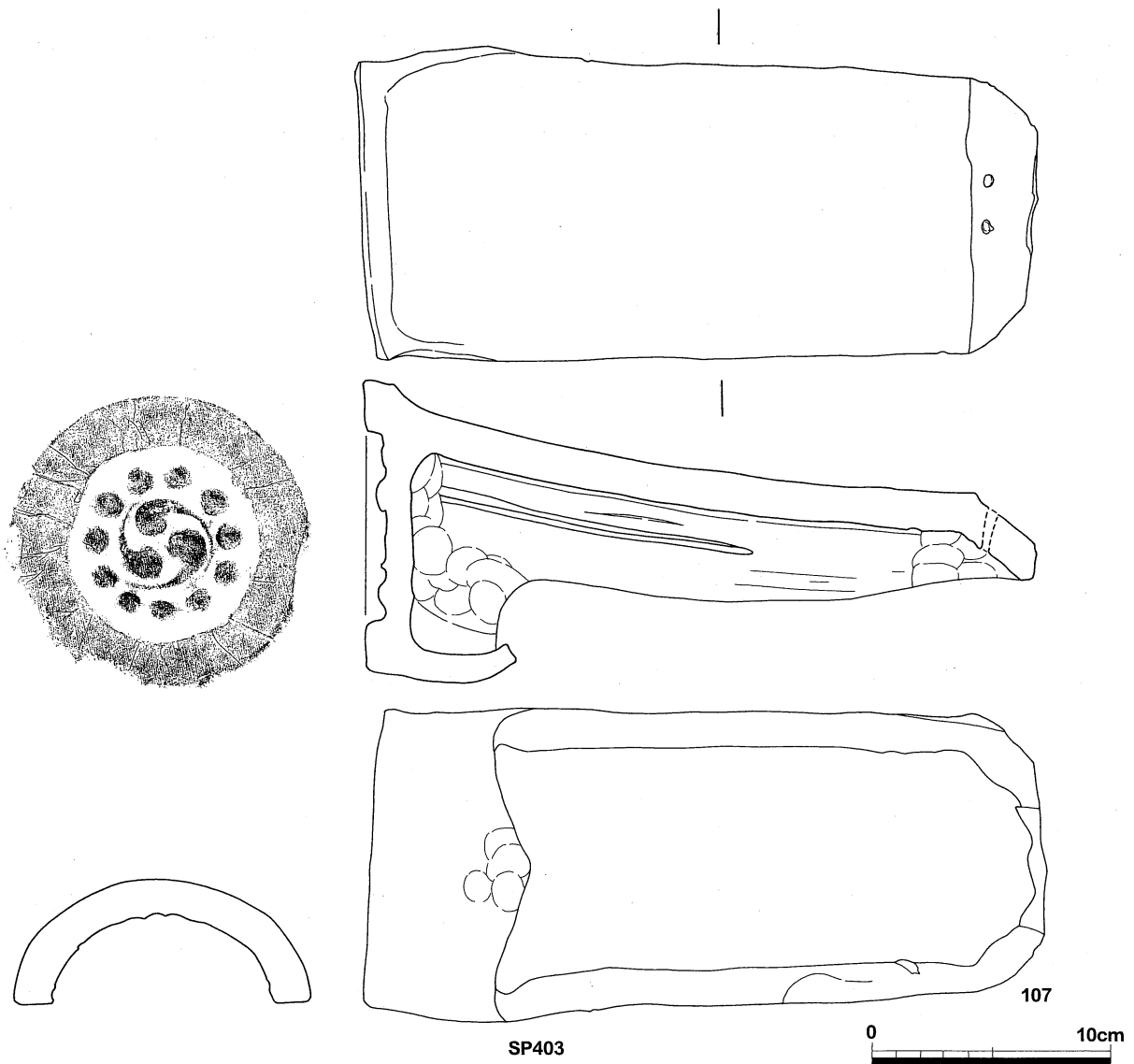
SP74 B 2 調査区で確認した。80は、土師器杯で、体部中央で明瞭に屈曲するタイプである。掘立柱建物跡からも出土しており、同様にII-⑦~⑨期、13世紀代と考えている。

SP88 C 2 調査区で確認した。81は、土師質土釜の口縁部で、短い鏝に短い口縁部が付く。短い鏝など後出する要素が多いが、口縁部が直立するなどII-⑦~⑨期の様相も見られるため、13世紀代としておく。

SP91 C 2 調査区で確認した。82は、土師器杯で、80同様、体部中央で屈



第31图 柱穴出土遺物実測図① (1/3)



第32図 柱穴出土遺物実測図② (1/3)

曲するタイプである。13世紀代と考えておく。

SP94 C 2 調査区で確認した。83は、土師器小皿で、82同様に体部中央で屈曲する。底面の成形が不明のため、年代は不詳である。

SP120 B 2 調査区で確認した。84は、土師器杯で、底面はヘラ切りである。年代は不詳である。

SP123 B 2 調査区で確認した。85は、砂岩製の円礫で、特に研磨痕などが見られないことから投弾と考えている資料で、弥生時代の所産であると考えている。86は、土師器杯で小型化している体部にあまり傾かない口縁部を有する点から、底面が磨滅のため観察不能であるが、II-⑧期前後を考えている。87も土師器杯で、底面には糸切りが観察できる。時期は不詳であるが、86同様の年代を考えても矛盾はない。86・87の資料から、推定も多分に含むが13世紀代としておく。

SP124 B 2 調査区で確認した。88は龍泉窯系青磁皿の口縁部片である。体部中位で屈曲し、口縁部は直線的に延び、端部は丸く終わる。12世紀中頃～末の標識資料と位置づけられている。89は土師器杯で、底面にはヘラ切りが観察される。体部中央に屈曲が見られ、80同様の時期と考えられる。88・89の資料から、13世紀代と考えて差し支えない。

SP242 B 2 調査区で確認した。90は、土師器杯で、底面には板目状圧痕が見られる。小型化が顕著で、多く見られる13世紀代の資料よりも後出するとも考えられる。

SP264 B 2 調査区で確認した。91は、土師器杯で、底面は板ナデ調整が施されている。口縁部があまり外傾しないもので、Ⅱ-⑦期頃、13世紀代と考えておく。

SP297 B 2 調査区で確認した。92は、須恵器杯蓋で、径が小さいことから平城宮土器Ⅳ～Ⅶ、8世紀第4四半期～9世紀第1四半期頃と考えるが、破片が小さいため推測でしかない。

SP403 B 2 調査区で確認した。107は、瓦当に巴文を持つ軒丸瓦である。近世以降の所産と考えられる。

SP456 B 2 調査区で確認した。93は、土師器杯の口縁部である。時期は不詳である。

SP503 B 2 調査区で確認した。94は、土師器杯の底部で、板目状圧痕が見られる。時期は不詳である。

SP505 B 2 調査区で確認した。95は、土師器杯の底部で、底面は磨滅のため観察不能、時期は不詳である。

SP529 C 2 調査区で確認した。96は、土師器杯の底部で、底面はヘラ切りである。時期は不詳である。

SP560 B 2 調査区で確認した。97は、土師器碗の底部で、低い貼り付け高台を持つ。年代は不詳である。98は、磨製柱状片刃石斧に近似する形態を持つが、明瞭な刃部をもたず、性格は不明である。

SP776 B 4 調査区で確認した。99は、底面に糸切りが確認できる土師器小皿である。

SP900 B 5 調査区で確認した。100は、須恵器杯蓋で、92同様の時期が想定されるが、口縁端部が丸みを帯び、より後出する観がある。101は、土師器小皿で、ヘラ切り底部から外反する短い口縁部を持つ。時期は14世紀代と考えられる。

SP919 B 5 調査区で確認した。103は、土師器碗で、口縁部を欠損している。底面にはヘラ切り痕が見られるが、体部内外面は磨滅のため調整が不明である。高台部のみに注目すれば、低くなっておりⅡ-⑦～⑨期、13世紀代の所産と考えて差し支えない。

SP1032 C 5 調査区で確認した。102は、土師器小皿で底面の成形は不明である。104は、土師器杯で底面は不明、体部内外面はナデ調整である。年代は不詳である。

SP1043 C 5 調査区で確認した。105は、土師器杯で、内外面とも摩滅しており調整は不明。年代も不詳である。

SP1161 D 6 調査区で確認した。106は、平基式の石鏃で先端を欠損している。弥生時代の所産である。

以上のように、この遺跡が営まれていた弥生時代・古代～中世・近世の遺物が断続的に出土している。弥生時代の遺物については、単独で良好な出土資料が見られないことから混入と考えて差し支えない。また、近世資料についても数量的に少なく、近世段階では集落等の遺跡としては他の遺構から見ても考えがたい。やはり主体は古代～中世であるが、柱穴の数量に比して掘立柱建物跡等の遺構が復元されにくく、建物の建て替えや形式的な掘立柱建物跡像では解決できない状況がある。中世資料の年代についても、片桐編年に当てはまらない形態の資料が多々あり、今後の課題となる。

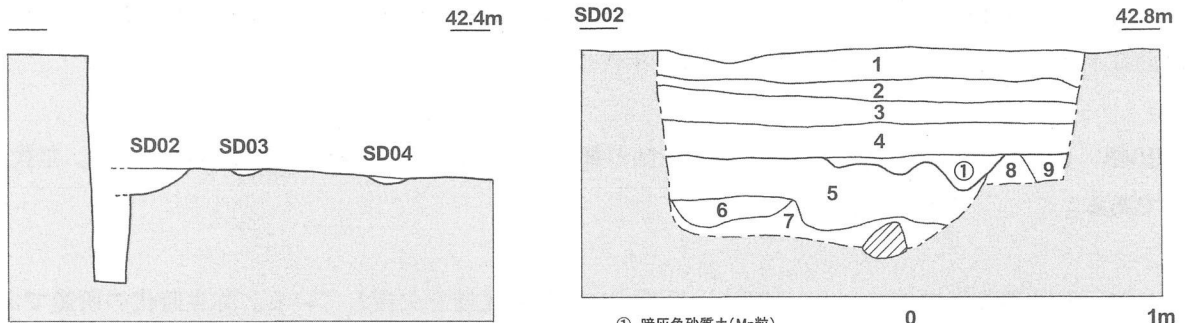
4 溝状遺構

この項目では、遺物が出土している溝状遺構を中心に、主な遺構について記述する。

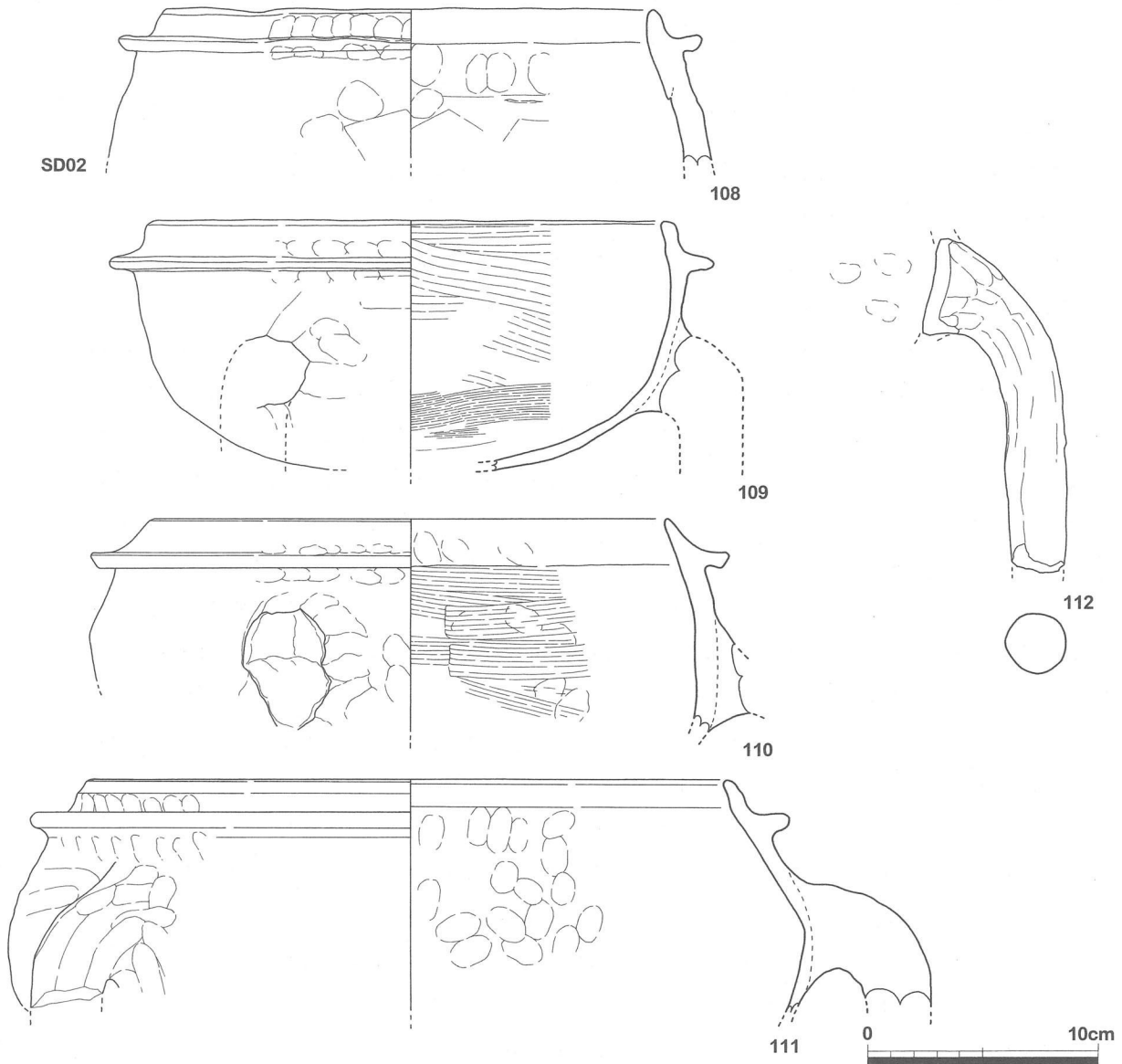
SD02・03・04（第33・34図）

SD02・03・04は、A 1～A 6 調査区の西端を南北に延びる溝で、交差することがないため、同時期に機能していたと考えられる。埋土は各1層で、埋没状況は不明である。

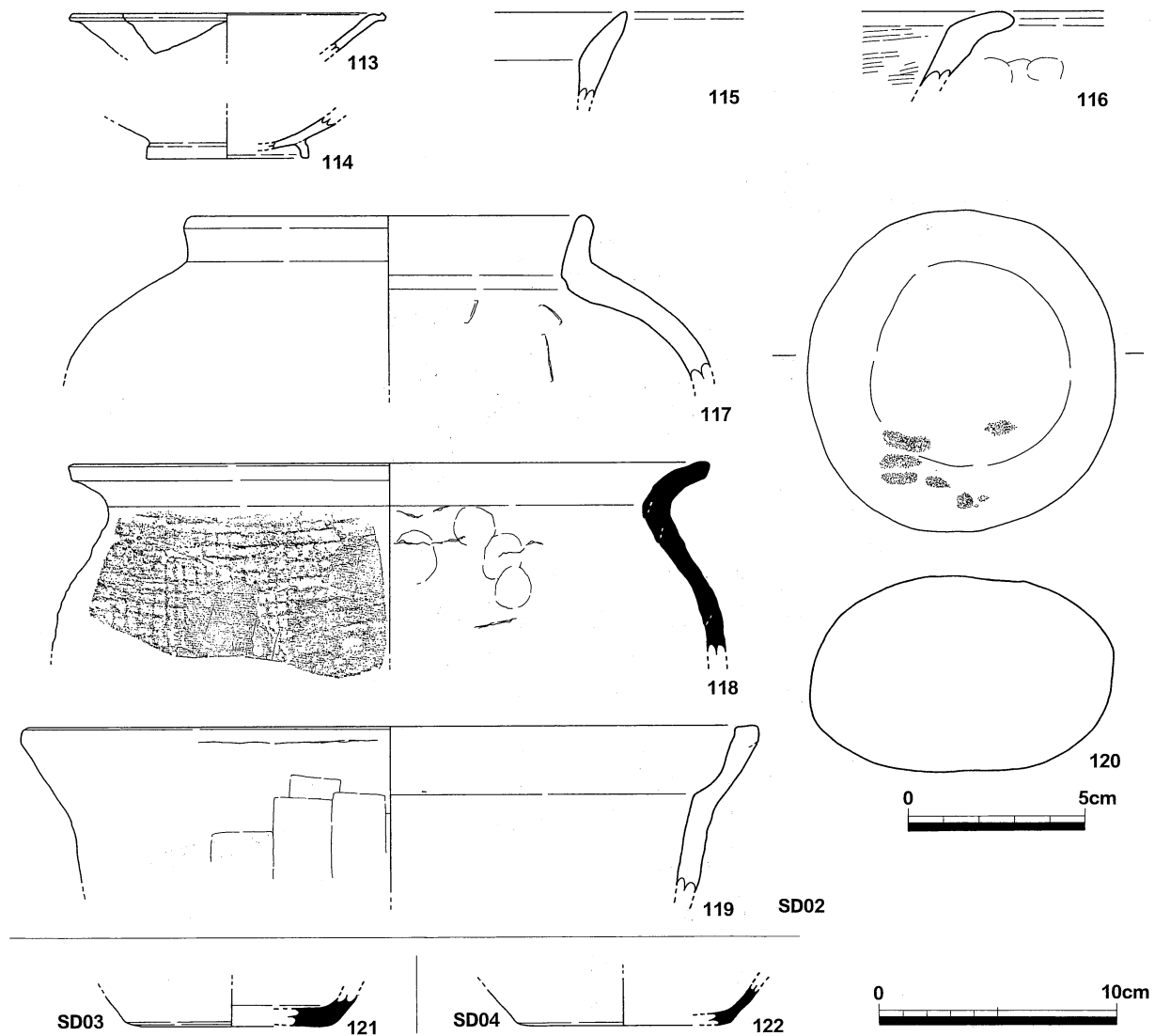
108～120は、SD02出土資料である。108は、土師質土釜の体部で、内外面に指頭圧痕が顕著である。内面下部は板ナデ調整が施されている。体部上半の出土であるが、他の資料との関係から土釜であると考えている。109も土師質土釜である。脚部は欠損している。口縁端部にやや丸みを持った面を持ち、外面は丁寧なナデが行われている。内面はハケ調整である。110も土師質土釜で、体部下半を欠損している。口縁部は、やや内傾し端部は細く終わる。鏝は水平方向に延び、端部は面を持つ。外面は指頭圧痕、内面はハケ調整が見られる。111も土師質土釜で、体部中央で屈曲するタイプである。口縁部は内傾し、端部は丸く終わる。鏝は水平方向に短く延び、端部は丸く終わる。口縁端部内面は、強い横ナデにより凹面になる。体部内外面とも指頭圧痕及び指ナデが顕著である。112は土師質土釜の脚である。113は肥前系陶器溝縁皿で、1640～1650年代と考えられる。114は土師器椀である。内面は摩滅、外面はナデ調整である。115・116は土師質土鍋の口縁部で、115は直線的に外傾し、端部は細く終わる。116は口縁端部で水平方向に屈曲し、端部は丸く終わる。内面調整はハケである。117は土師器壺で、球形の体部に短く直立する口縁部を有する。体部内面は板ナデ、他は横ナデ調整である。118は須恵器甕で、砲弾形の体部から外反する口縁部を有し、端部には面を持つ。外面には格子状タタキが見られる。119は土師質土鍋の口縁部で、やや外傾しながらのびる体部から、やや内湾ぎみに上方にのびる口縁部を有する。口縁部内面は、やや凹面に仕上げられており、体部との境に明瞭な段を形成する。体部外面は板ナデ調整である。120は砂岩製の円礫で、投弾と考えている資料である。以上、SD02から出土した資料を概観したが、土師質土釜については、鏝が未だ形骸化しておらず、111を除いて体部に明瞭な屈曲が認められないことなどから、これらの資料を一括として捉えた場合、Ⅱ-⑦～Ⅲ-③期の範疇に含まれると考えられ、幅はあるが13～14世紀の所産と理解できる。118の資料からは、13世紀の範囲で考える



- ① 暗灰色砂質土(Mn粒)
 1. 暗灰色砂混じり粘質土(耕作土)
 2. 暗灰色砂混じり粘質土(耕作土)
 (1よりやや砂が多くシルト気味)
 3. 灰茶褐色砂混じりシルト(Fe, Mn)
 4. 灰褐色砂混じりシルト(Mn粒, Fe)
 5. 淡灰色砂質土(Fe, Mn)
 6. 灰色粗砂
 7. 灰褐色砂(Mn)
 8. 灰褐色シルト(Mn粒)-ベース
 9. 暗灰色シルト(Mn)-ピット?



第33図 SD02~04断面図(1/30)、出土遺物実測図①(1/3)



第34図 SD02~04 出土遺物実測図② (1/3)

ことも可能である。しかし、113は明らかに後出する資料と理解でき、混入と考える。

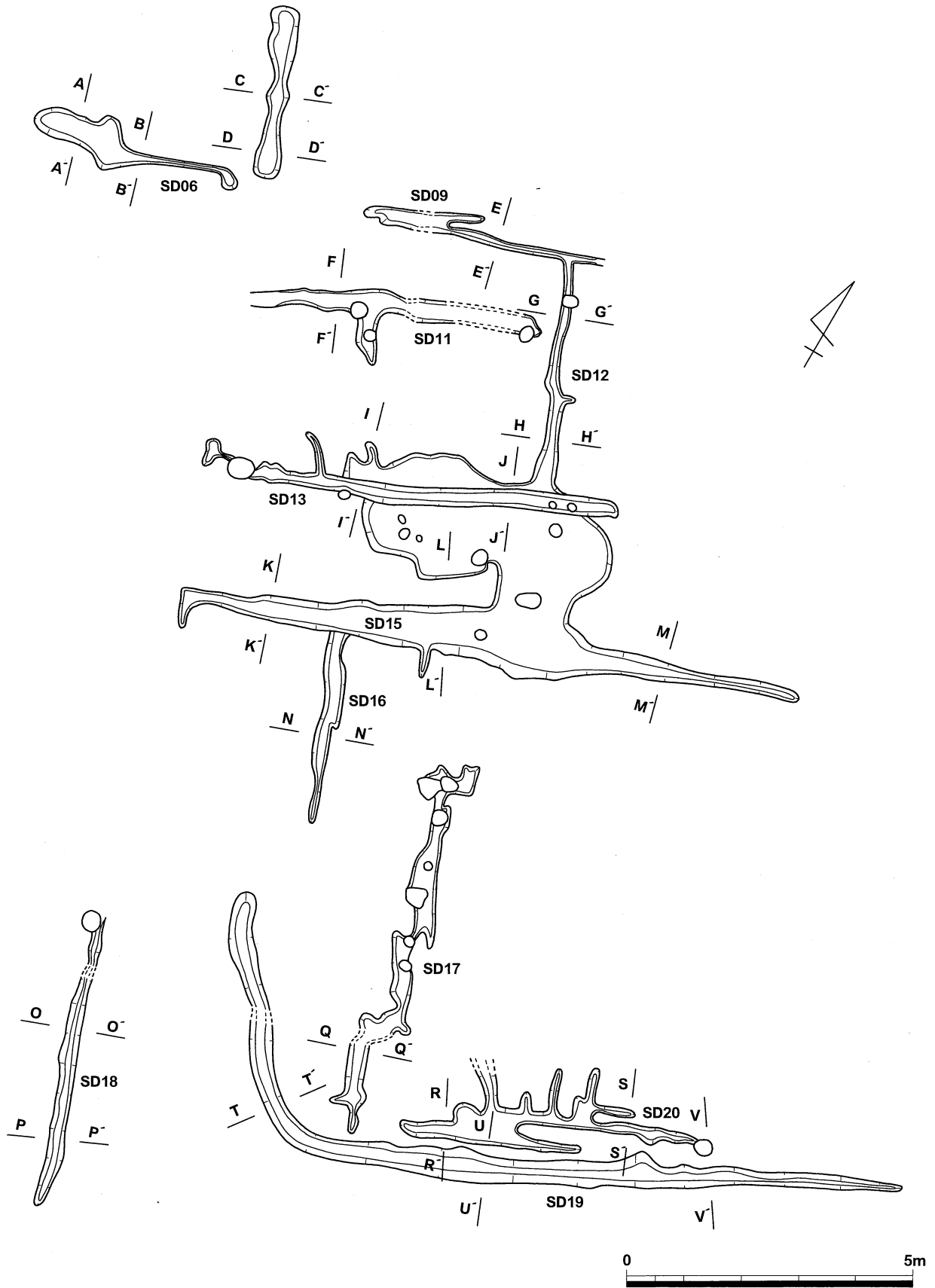
121は、SD03出土資料である。須恵器杯の底部で、ヘラ切りが認められる。

122は、SD04出土資料である。これも須恵器杯で、摩滅した小破片である。

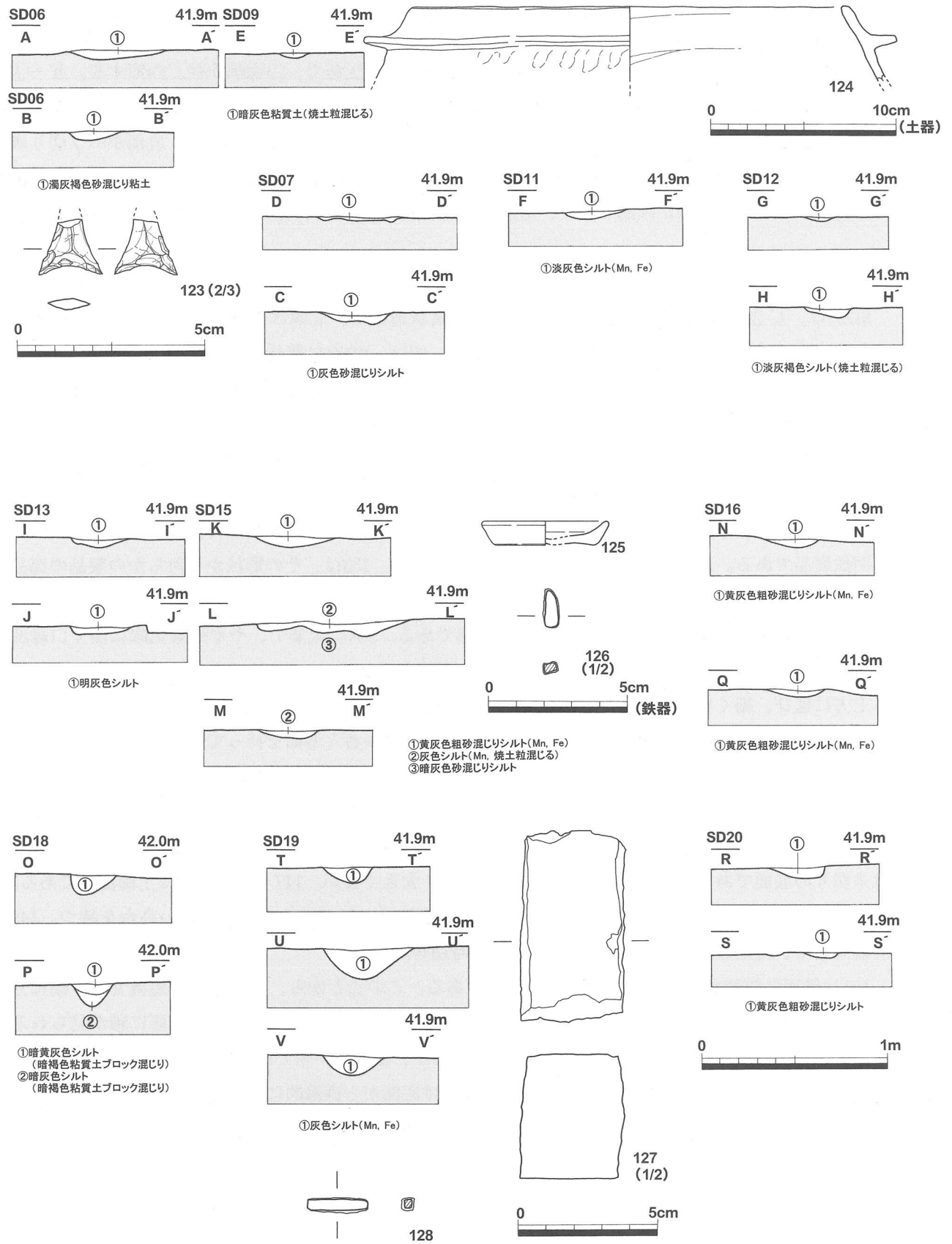
以上の資料から、SD02・03・04が同時期に機能していたと考えた場合、埋没年代は13世紀の範囲に収まると考えられる。

SD06・07・09・11~13・15~20 (第35・36図)

B 2・3、C 2・3 調査区、掘立柱建物跡群に重複する位置で検出されている。SD09・12・15は、一連の溝状遺構である。また、SD16も同様であると考えられる。これに重複する形でSD13が検出されており、検出状況から先の溝状遺構群に後出する。他の溝状遺構は切りあい関係が認められないため、先後関係は明確ではない。全体の配置からは、ほぼ同一時期に機能していた可能性が高い。堆積土もほぼ同様で、複数層になっているのはSD18のみである。相対的に長期間での埋没ではなく、短時間での



第35图 SD06·07·09·11~13·15~20平面图 (1/100)



第36図 SD06・07・09・11~13・15~20断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/3)

埋没を想定することができる。

出土遺物は、123～128である。123はSD06出土の凹基式石鏃で先端部が欠損している。剥離は雑である。弥生時代の石鏃と考えられる。124はSD09出土の土師質土釜で、口縁部が長く内傾する。Ⅱ-⑦～⑨期、13世紀に位置づけられる。125・126はSD15出土の土師質小皿と不明鉄器片である。不明鉄器は小片のため製品を特定することができないが針ではないかと考えている。小皿は、底面がヘラ切り成形である。127・128はSD19出土の棒状石と不明鉄器片である。棒状石は四角柱の形状を持ち、一見砥石と考えられたが、研磨面が確認できず、用途は不明である。128は、先の126同様針の可能性が高い。

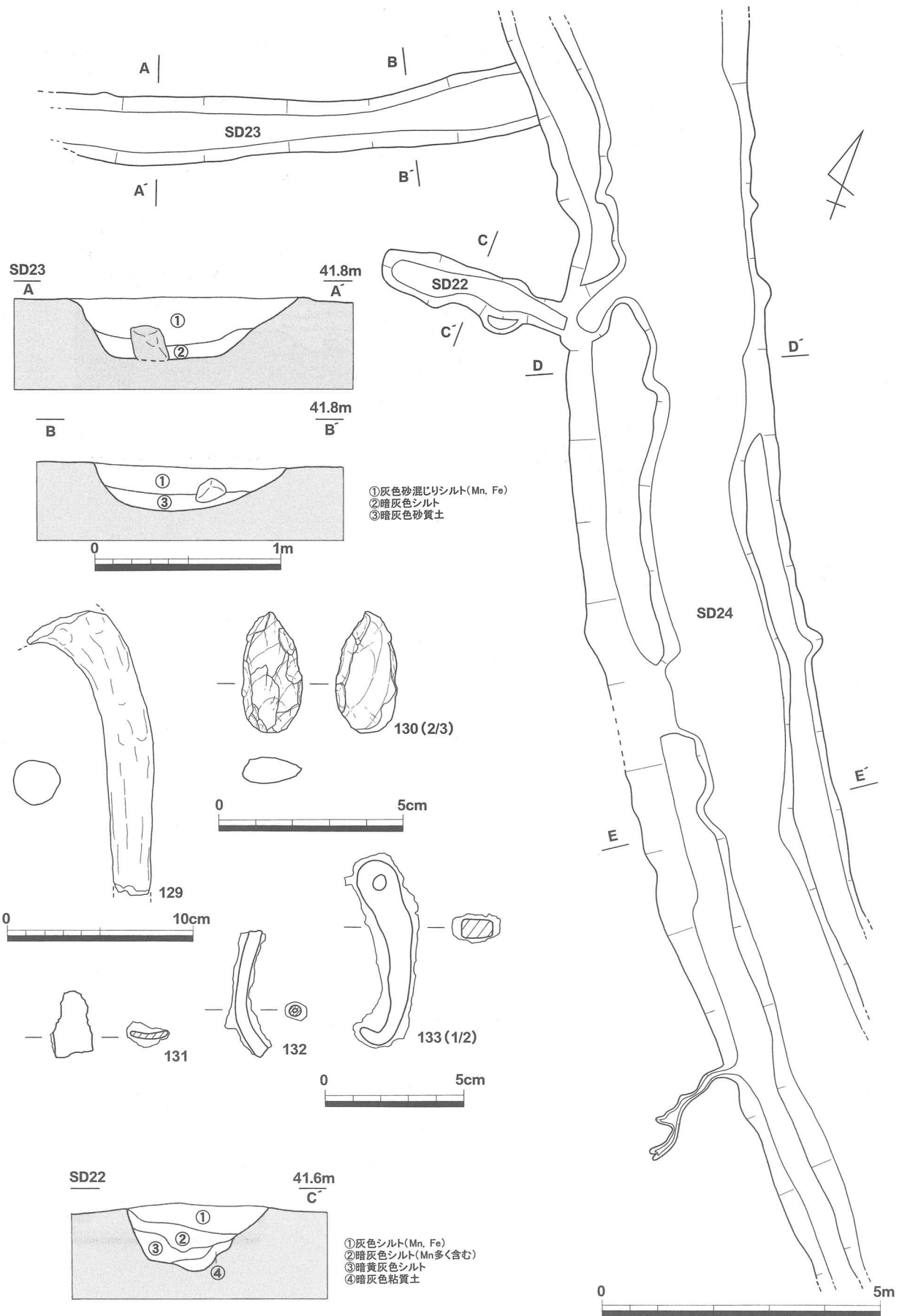
SD22～24（第37～40図）

SD24は、C 2・3 調査区を南北に延びる広めの溝状遺構で、北端は調査区外に延びるが、位置関係から南はSD30～32につながると想定できる。SD22・23は、SD24に関係する溝状遺構である。ただし、SD23は切りあいを持つ溝状遺構の可能性も若干残される。SD22・23の堆積状況は、徐々に埋没する傾向を示す。SD24も同様の傾向を示し、最下層に砂がたまっていることから、常に一定の水量があったことがわかる。この溝状遺構が前述した掘立柱建物跡群の東限の可能性が高い。出土遺物は129～163で、この内129～133がSD23、134～163がSD24の出土である。

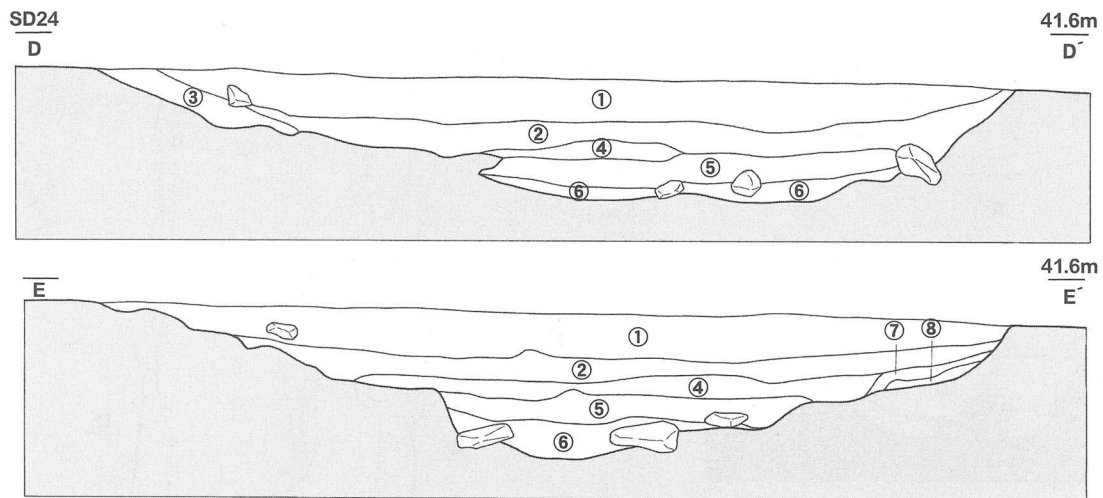
129は、土師質土釜の脚で、先端が欠損している。130は石鏃で、未製品の可能性もある。131～133は不明鉄製品である。132は棒状を呈し、針の可能性もある。133は、その形状から何らかの製品の部品であると考えうるが、製品の特定はできなかった。

134～137は土師質土釜・土鍋の口縁部及び体部である。134は土釜で、やや外傾気味に開く口縁部を有する。口縁部に対して鏝はやや短く、後出する要素かもしれない。135は土鍋で、体部から直線的に外上方に延び、細くなって終わる。136は弥生時代中期後半の鉢の口縁部で、混入と考えられる。137は土釜であるが、浅い体部に短い口縁部や鏝を持ち、端部は両者とも面を持って終わる。他の資料と比べて分厚い。年代は不詳である。138～141は土師器円盤状高台小皿で、138が糸切り、140・141がヘラ切りの底面を持つ。141はやや大形で、焼成前穿孔が見られ、他の器種の可能性もある。片桐編年では、Ⅱ-⑥～⑨期、12世紀後半～13世紀に位置づけられる。142～145は土師器杯である。142は糸切り、145は糸切りの底面である。底部径に対して口径があまり大きくない。147・148・152は土師器碗である。148は高台が低い。152は、深い体部を持つ。146は須恵器系土器碗である。短く低い高台を持つ。149は陶器高台で、時期等不詳。150は須恵器高台で、時期等不詳。

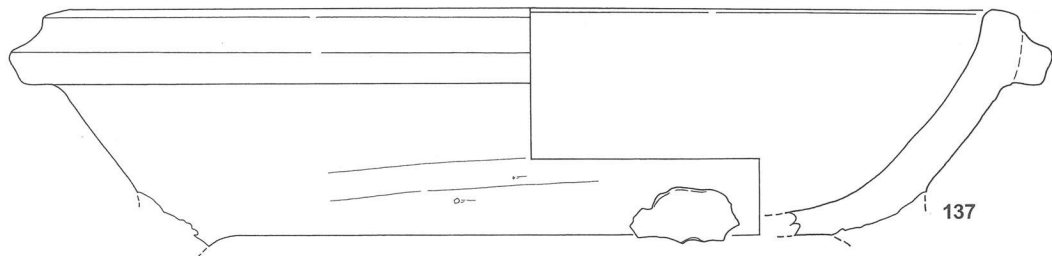
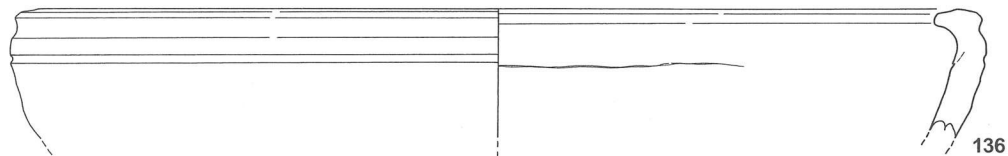
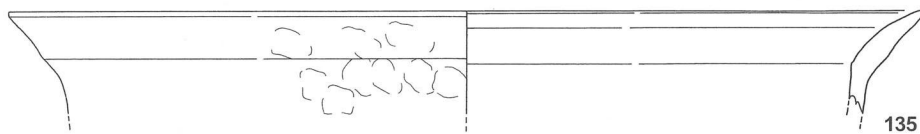
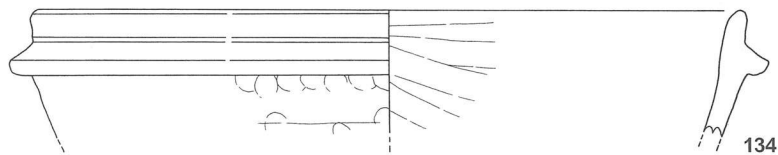
151は外面に鎬連弁が見られ、高台は角高台である。このことから、龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類に分類され、13世紀前後～前半の年代が与えられている。153は、十瓶山窯壺底部で、外面に釉が見られる。底面はヘラ切りである。154は、須恵器の底部であるが、器種は不明である。底面は糸切りである。155は十瓶山窯こね鉢で、底面はヘラ切りである。体部は底部から直線的にのびることからⅡ-⑦～⑨期、13世紀代と考えて大過ない。156は瓦質の片口こね鉢で、体部下半はヘラ削り、上半は板ナデが顕著である。内面下部はヘラ削り、上部はナデ調整である。口縁端部に明瞭な面を持たないこと、体部が丸みを持つことから、13世紀代と考えている。157・158は土師質土釜の脚である。159はサヌカイト製のスクレイパーもしくは打製石庖丁の未製品と考えられる。石庖丁を想定した場合、やや小形である。160～163は砥石である。石材の長辺方向に研磨痕が認められる。また、写真図版36に掲載した「開元通寶」も出土している。



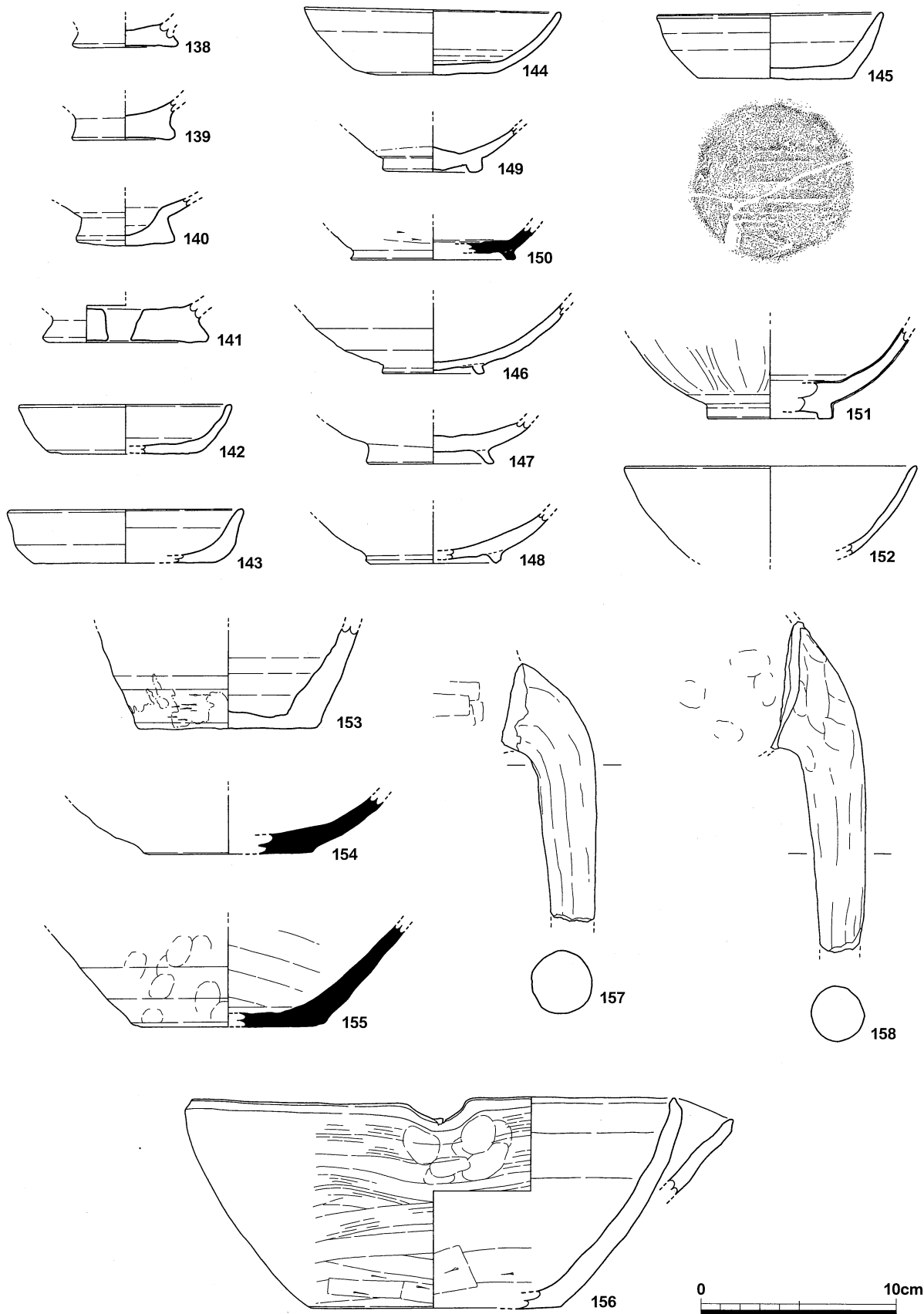
第37図 SD22~24平面図 (1/100) ・SD22・23断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/3)



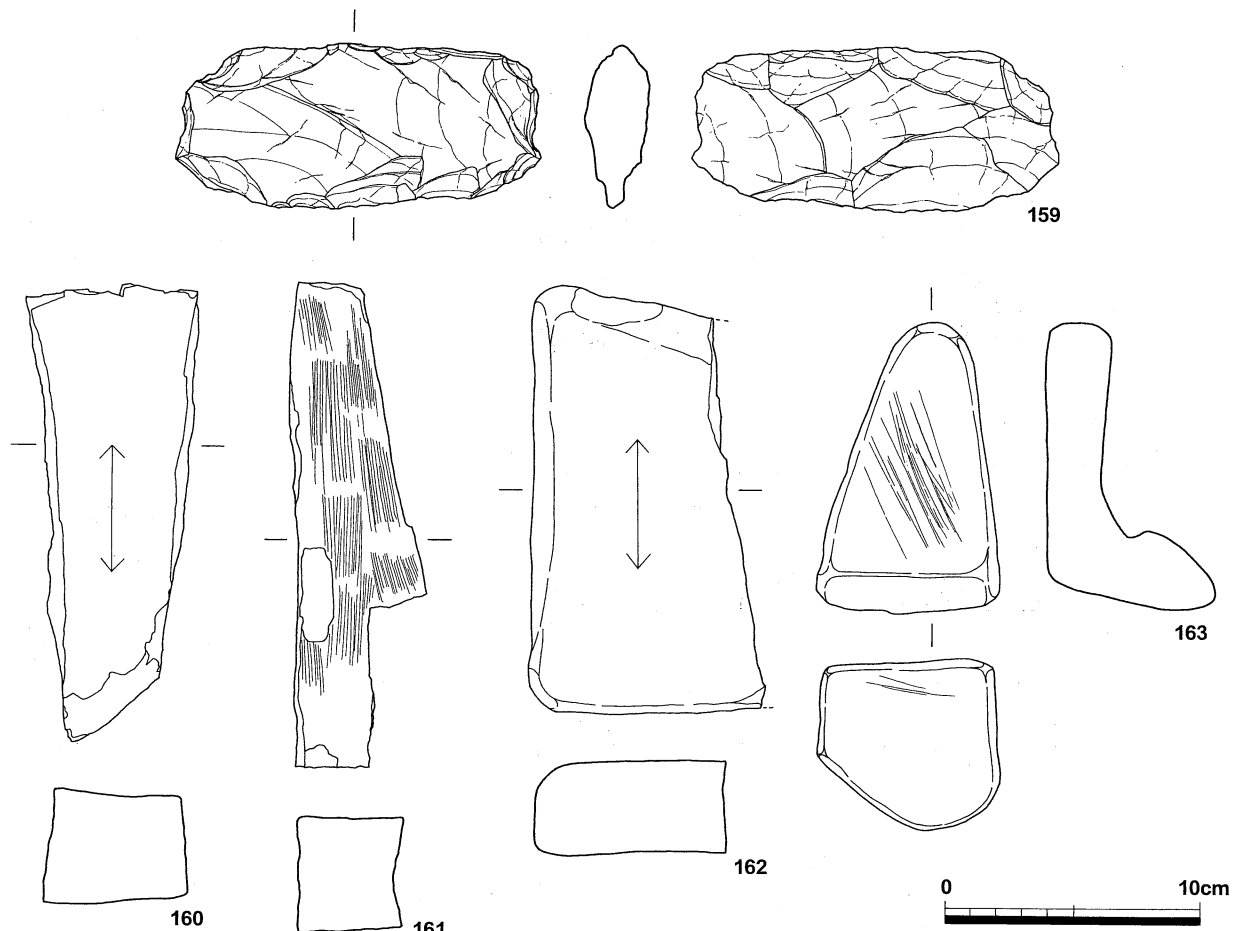
- ① 灰色シルト(Mn, Fe)
- ② 灰色シルト
(Mn, Fe, やや①より暗く粘性を持つ)
- ③ 灰色シルト(やや砂質気味)
- ④ 褐灰色砂質土(Mn, Fe)
- ⑤ 暗灰色細砂
- ⑥ 暗灰色中砂
- ⑦ 灰色細砂質土
- ⑧ 暗灰褐色シルト(Mn, Fe)



第38図 SD24断面図 (1/30)、出土遺物実測図① (1/3)



第39图 SD24出土遺物実測図② (1/3)



第40図 SD24出土遺物実測図③ (1/3)

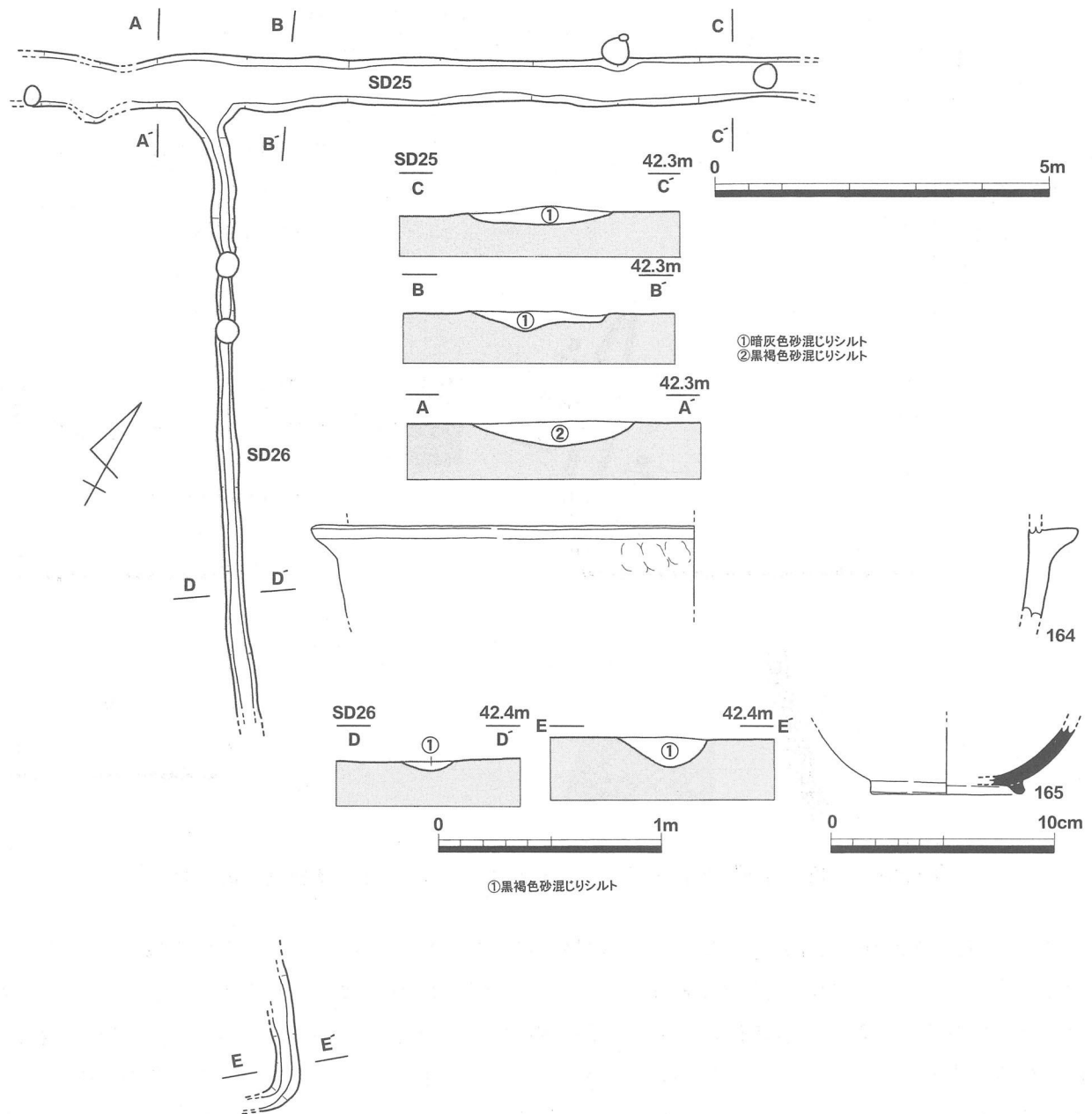
以上の資料から、混入資料はあるもののSD24は13世紀前半代の埋没と考えると差し支えない。SD23はこれに先行する溝状遺構ではあるが、出土遺物からは明確にできない。

SD25・26 (第41図)

A 4、B 4・5 調査区に位置し、東・西・南側は調査区外で全体の形状は不明である。東西に延びるSD25が幅広く、これから直角に分岐する形でSD26が南に延びる。南端ではほぼ直角で西側に折れる。埋土は砂混じりの暗色系で、一定の水量で流水があった後、ヘドロ状の堆積が重なって形成されたものと考えられる。埋土中からは164・165が出土している。164は、SD25から出土した土師質土釜で、口縁部及び体部の大半を欠損している。165は、SD26出土の須恵器椀で、低い高台を持つ。12世紀後半代の所産カ。

SD28・29 (第42図)

C 4・C 5 調査区で確認した。SD28はSB15の東側に存在し、SB15と同一時期の所産である可能性が高い。SD28は南北に延びる溝状遺構で、北端は調査区外に延びる。SD29は同一方向に延びるものの短く、周辺部で確認された所謂「鋤溝」の可能性が高いが、遺物が出土しているため掲載した。両者とも単層の埋土で、自然堆積と考えられる。出土遺物は166・167で、166は須恵器甕の体部片と考えられ、外面に格子状タキ、内面にハケ目が認められる。167は土師器椀の体部と考えられる。2点とも年代は不詳である。

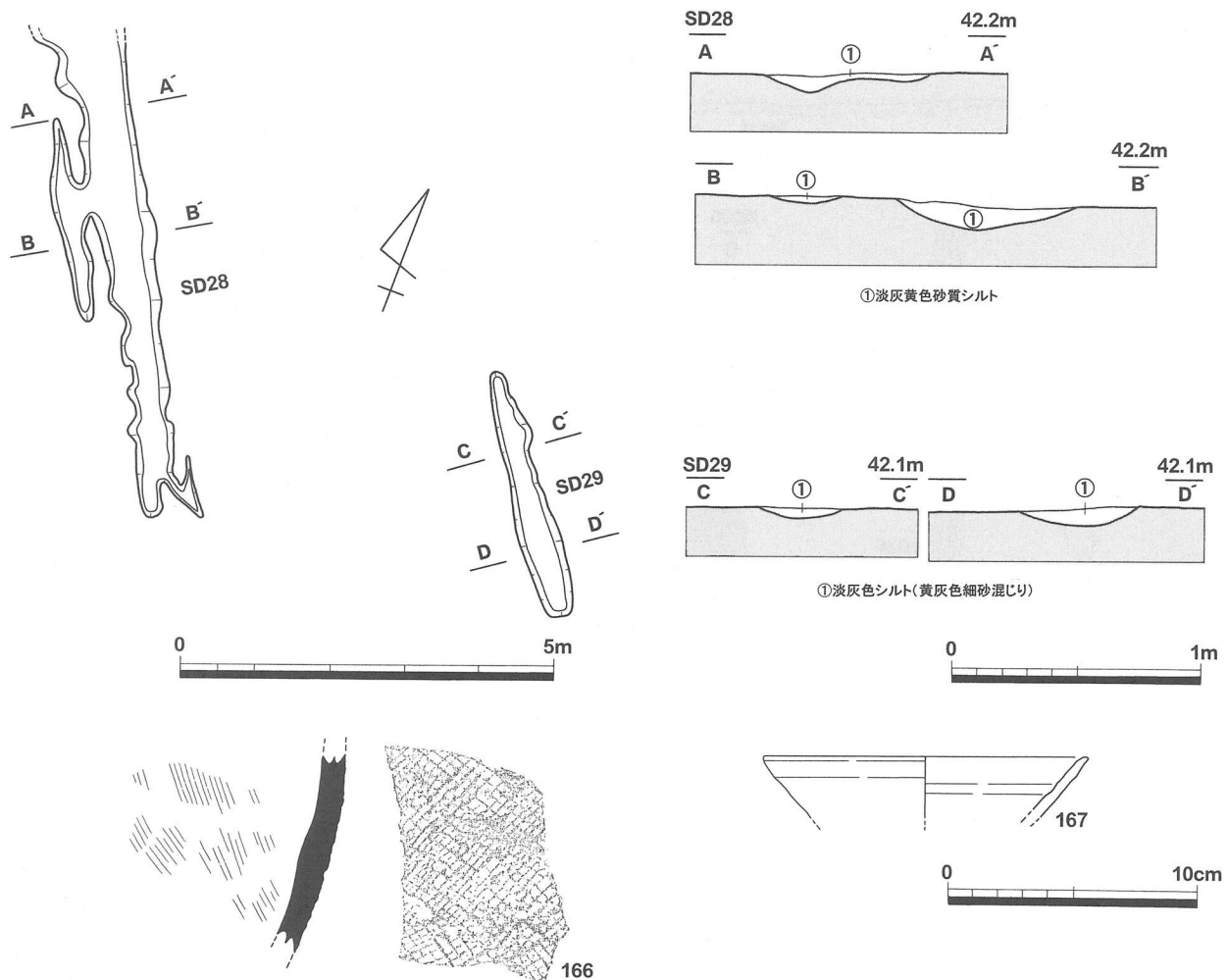


第41図 SD25・26平面図 (1/100) ・断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/3)

SD30～32 (第43～46図)

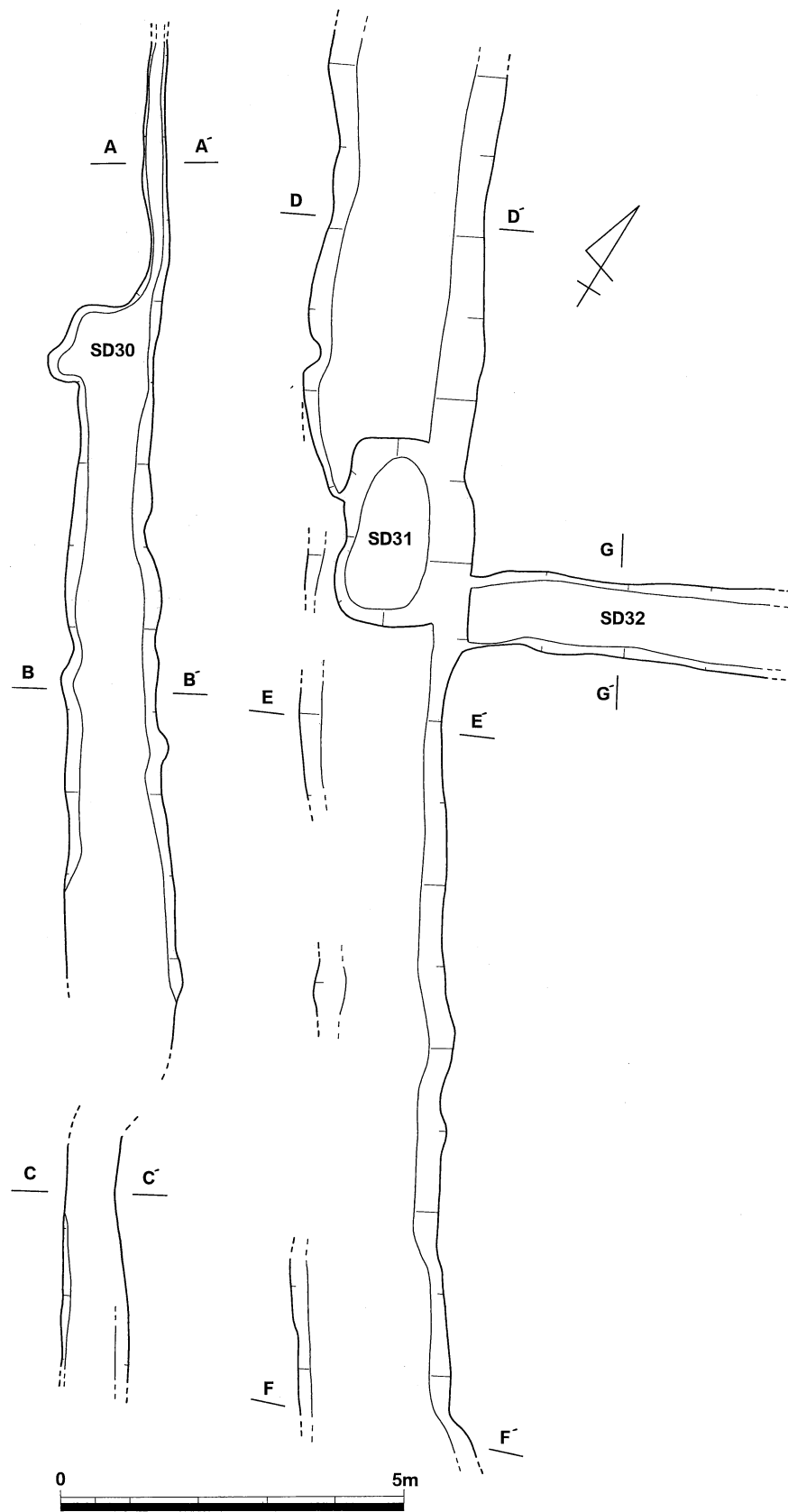
D 4・5 調査区で確認した。SD30～31は、先に述べたように、SD24に連続すると考えられる溝状遺構で、SD31が本流、SD30はこれから分かれた溝状遺構と考えられる。SD31がもっともしっかりしており、逆台形状の掘り方を持つ。埋土から見た埋没状況は、ヘドロ状の堆積が認められず、主として砂を中心とした堆積土の状況から、一定の水量での流れが推測されるもので、最終的には流水に伴う短期間での埋没と考えられる。こうした状況が、この集落の廃絶の原因とも考えられる。これに対して、SD30は徐々に埋没したと考えられ、SD30との先後関係や役割の差など不明な点が多い。出土遺物から時代差を明確にすることはできない。SD32は、SD31から直角に分岐する溝状遺構であり、後述する資料からはSD31に先行するものと考えられる。埋没状況は不明である。

168～184はSD31の、185・186はSD30、187～191はSD32の出土遺物である



第42図 SD28・29平面図 (1/100) ・断面図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/3)

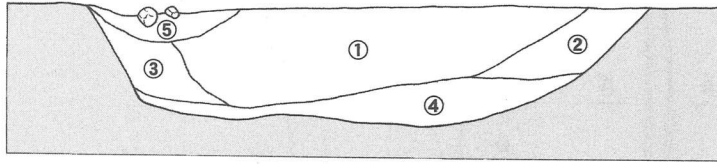
168は、亀山焼甕の体部片と考えられ、外面に格子状のタタキ目を有する。169は土師器碗の高台部で、全体に摩滅している。170は肥前系磁器皿（青磁）で、底部が無釉、蛇の目釉剥ぎの可能性がある。17世紀後半の波佐見窯系の土器である。171は土師器壺の口縁部で、球形の体部からやや開く短い口縁部がのびる。内外面とも摩滅している。172・173は土師質すり鉢で、172は4から5条の条線を持ち、口縁端部は内傾して丸く終わる。173は7条程度の条線を持つ底部である。172の形態からⅢ-①~③期、14世紀代の年代が与えられる。174は、土師質土釜の体部である。体部から口縁部は直線的に延び、口縁部も比較的長い。175は、土師質土釜の体部である。体部から口縁部は直線的に延び、口縁部も比較的長い。176は土師質土釜の脚である。177は土師質土釜の体部で、底部・脚を欠損している。口縁部は短く内傾し、形骸化した鋳を持つ。Ⅲ-①~③期、14世紀代の年代が与えられる。178は、175同様の土師質土鍋で、底部付近にヘラ削り、内面にハケ目調整が見られる。形態から前者同様の年代が与えられる。179・180は土師質土鍋である。179は浅い体部がやや外湾気味に延びて口縁端部に至る。180は浅く丸みを帯びた体部から外上方に屈曲して口縁部を形成する。2点とも内面は板ナデ調整である。181・182は不明鉄製品である。181は断面が四角形を呈する棒状で、両端が欠損している。182は筒状のものである。183はサヌカイト製の石庖丁片と考えられる。側面の挟りはないが、刃部の調整が認められる。184は砂岩の円礫で、投弾と考えている。185は、ミニチュアの鉢で、底面をヘラ削りしている。186は土師器小皿で、底面はヘラ切りである。



第43図 SD30~32平面図 (1/100)

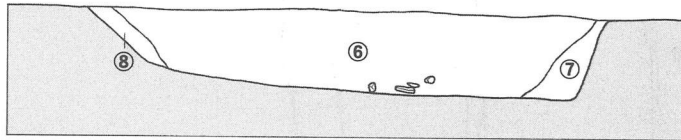
SD31
D

42.1m
D'



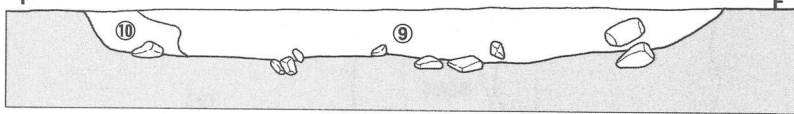
E

42.1m
E'



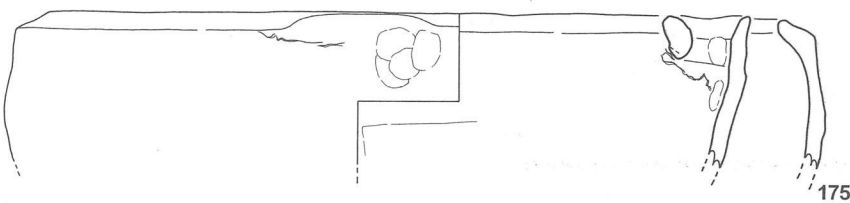
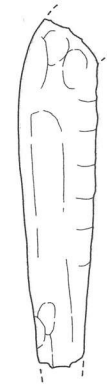
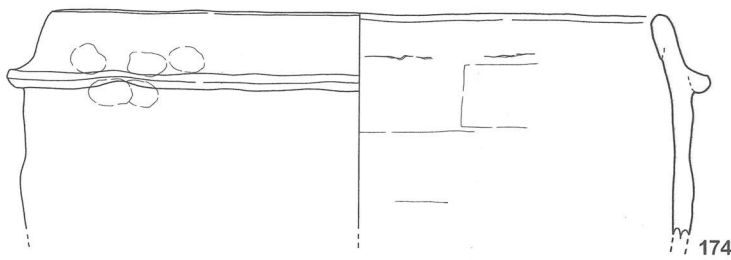
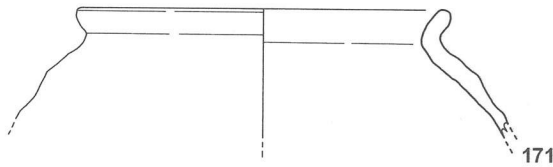
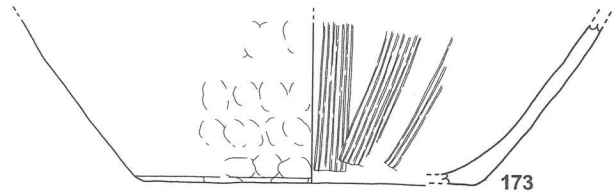
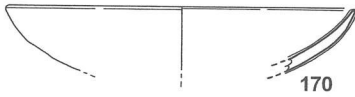
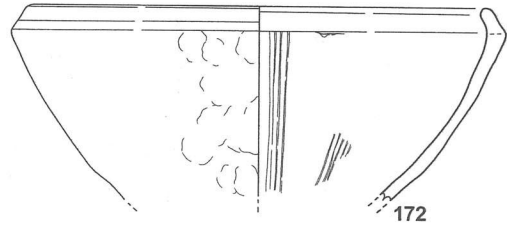
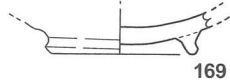
F

42.1m
F'



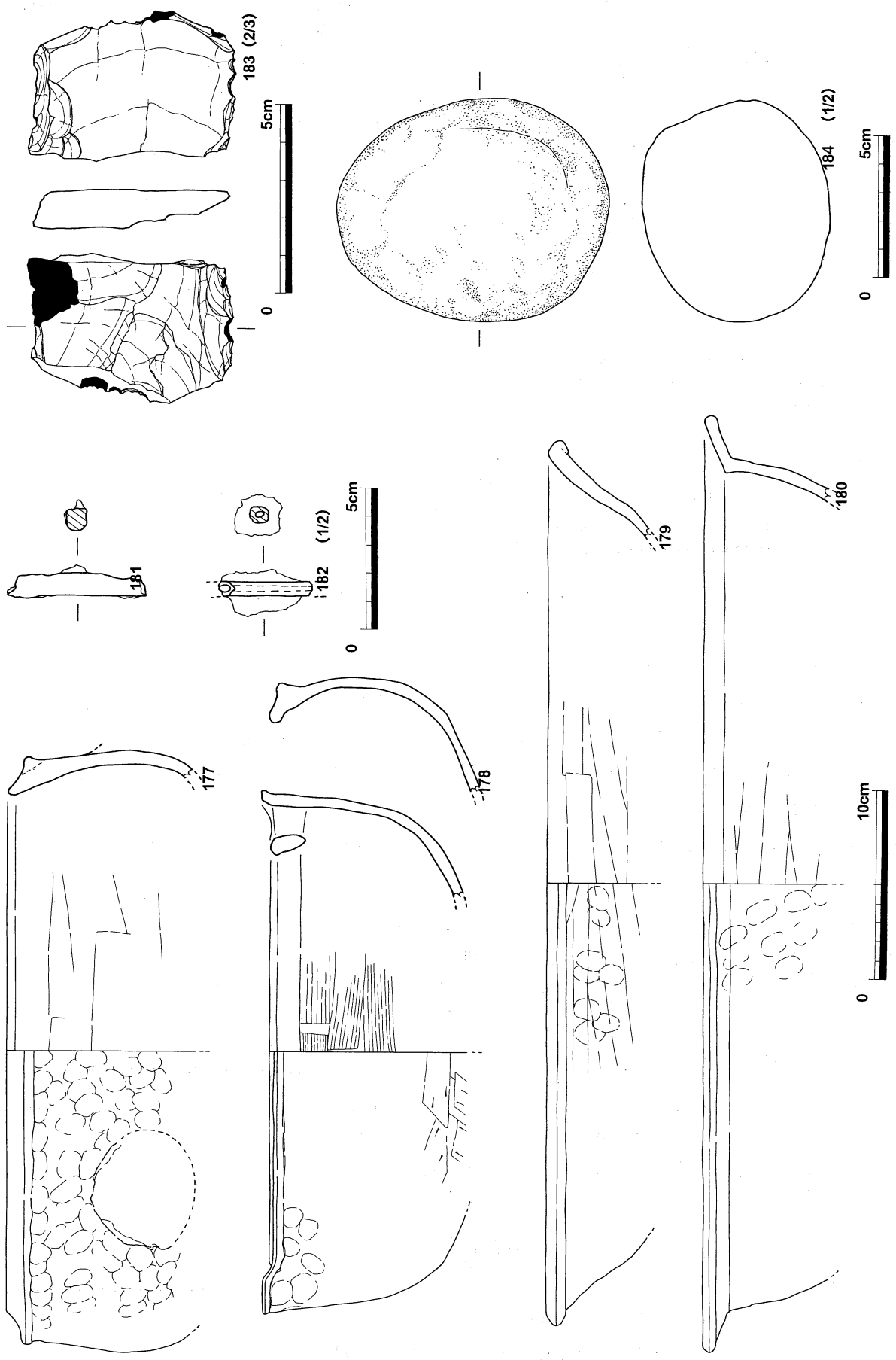
0 1m

- ①茶褐色細砂質土(Fe)
- ②黄褐色細砂
- ③灰茶褐色細砂質土
- ④灰茶褐色細砂
- ⑤濁灰色細砂質土
- ⑥暗灰茶褐色細砂(礫混じり)
- ⑦濁黄褐色細砂質土
- ⑧灰褐色砂質シルト
- ⑨濁暗灰茶褐色細砂質土
- ⑩暗灰色細砂

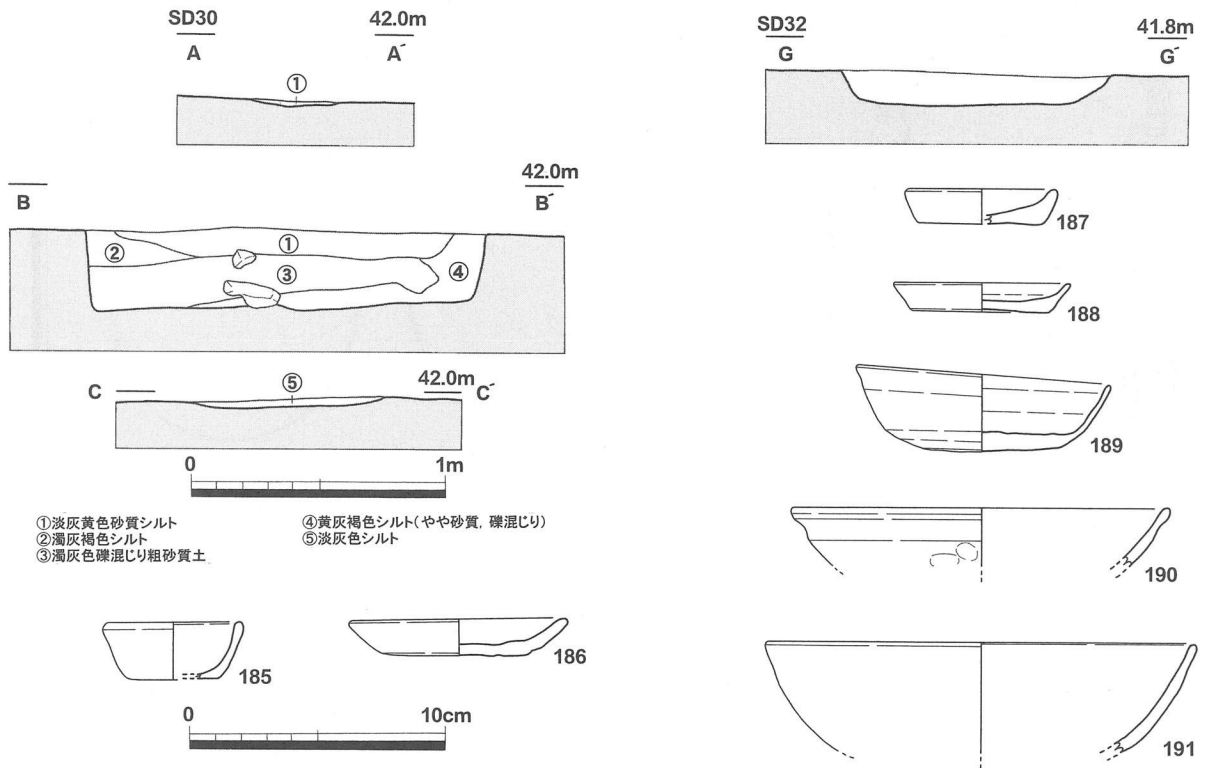


0 10cm

第44図 SD31断面図 (1/30)、出土遺物実測図① (1/3)



第45図 SD31出土遺物実測図② (1/3)

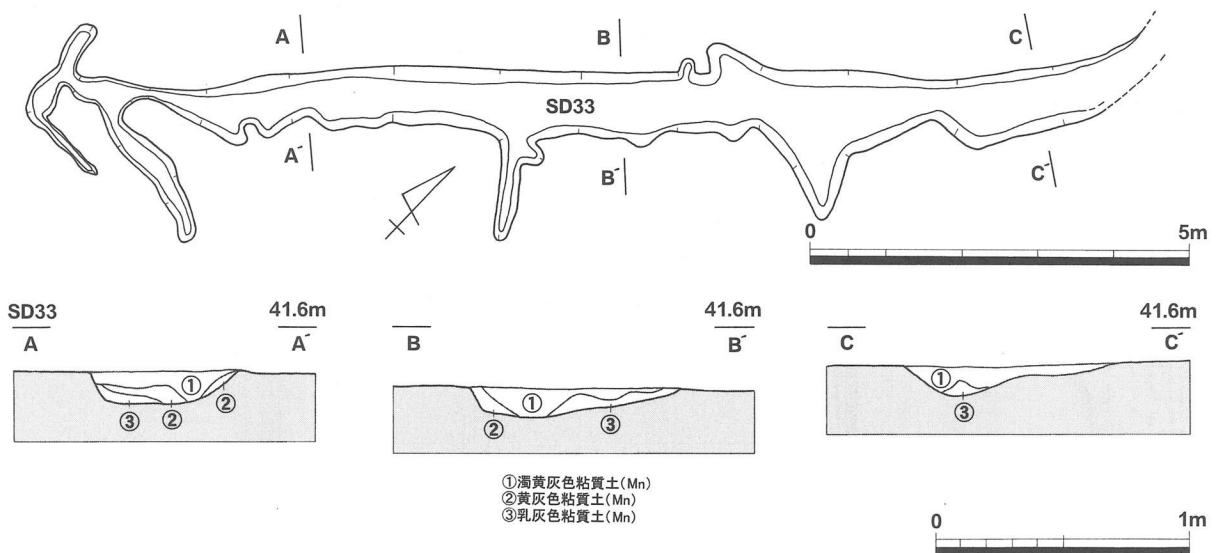


第46図 SD30・32断面図 (1/30)、出土遺物実測図① (1/3)

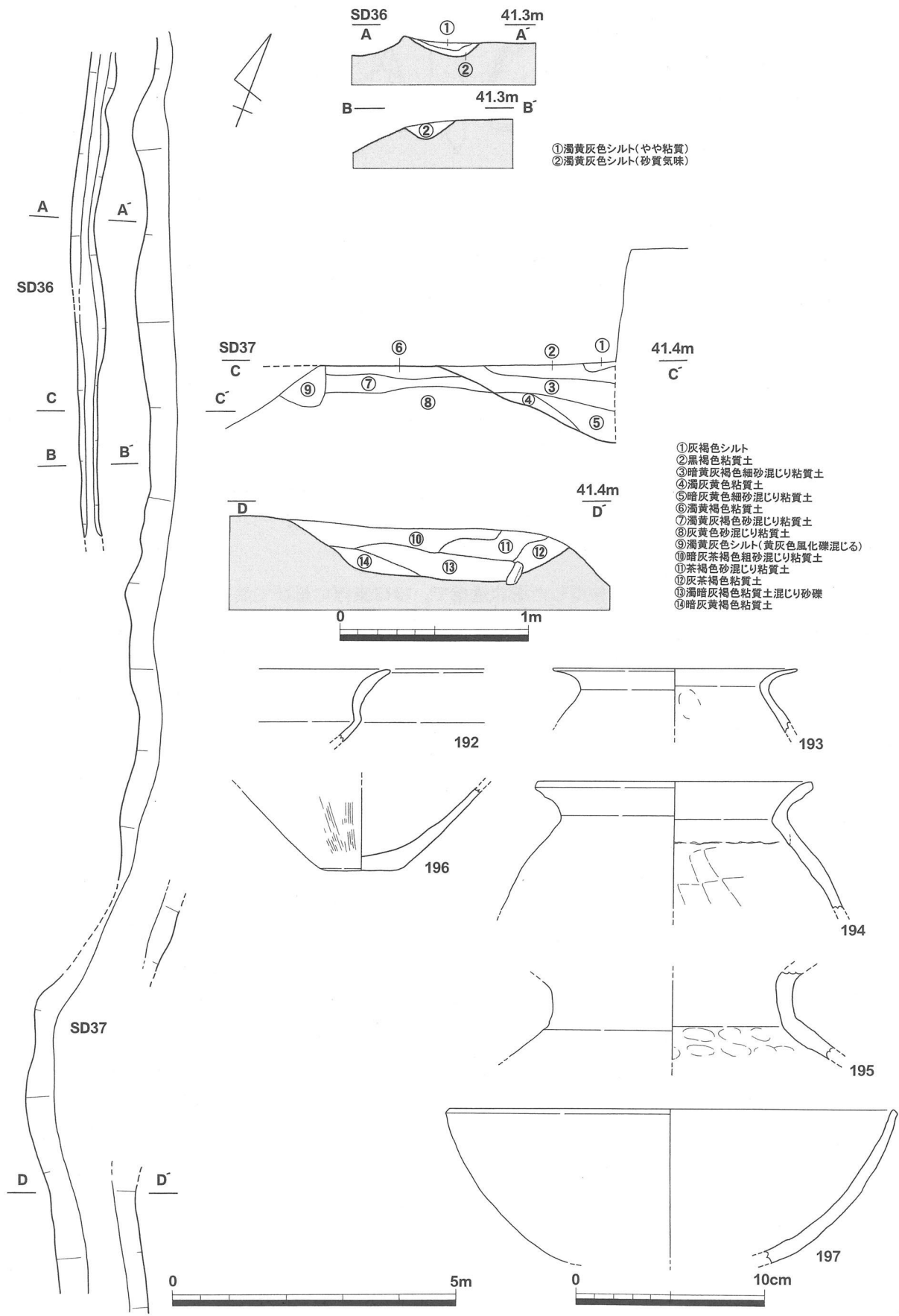
12世紀後半代に遡る可能性がある。

187・188は土師器小皿で、底面はヘラ切り。189は土師器杯で、底面はヘラ切り。190は瓦器椀で、内外面ともナデ調整である。口縁端部に凹面が認められる。191は土師器椀と考えられるが内外面とも摩滅しており詳細は不明である。個々の資料からは難しいが、他の資料との比較からは、II-⑦~⑨期、13世紀後半代に位置づけても問題ない。

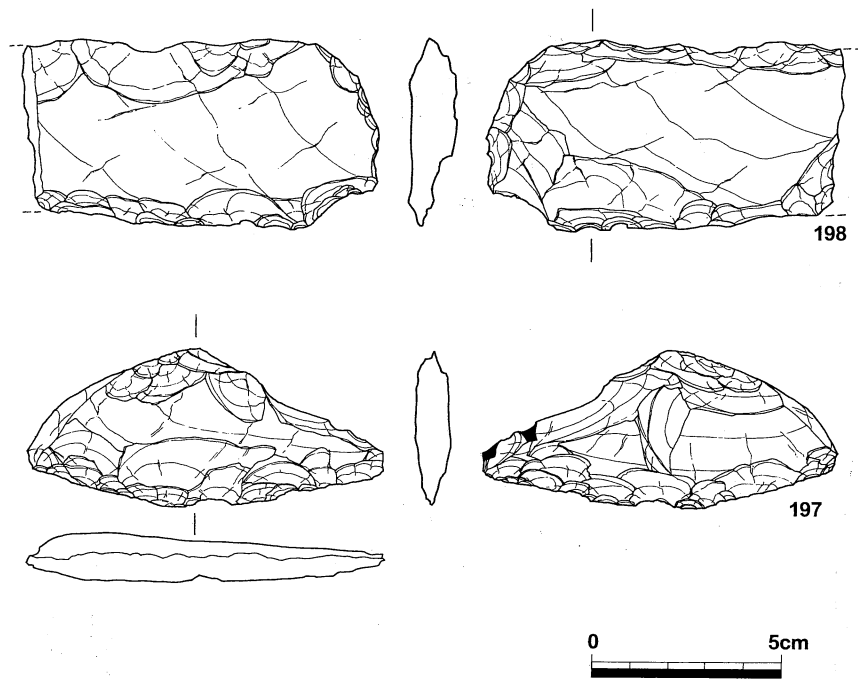
以上の資料から、SD30が12世紀後半、SD32が13世紀後半、SD31が14世紀代の年代が与えられよう。



第47図 SD33平面図 (1/100)、断面図 (1/30)



第48図 SD36・37平面図 (1/100) 断面図 (1/30)、出土遺物実測図① (1/3)



第49図 SD37出土遺物実測図② (1/2)

SD33 (第47図)

A 2・B 2 調査区の第2 遺構面で検出した溝状遺構で、ほぼ東西に延びており、東端は検出できなかった。自然埋没と考えられる。遺物の出土はない。この北側には概報段階で不明遺構とした河川のオーバーフロー状態の堆積土が広がり、弥生時代前期の土器などが出土していることから、この溝も同様の時期と考えられ、平面形態から溝としての機能を考えることは難しい。この溝状遺構が弥生時代前期の北限と考えられる。

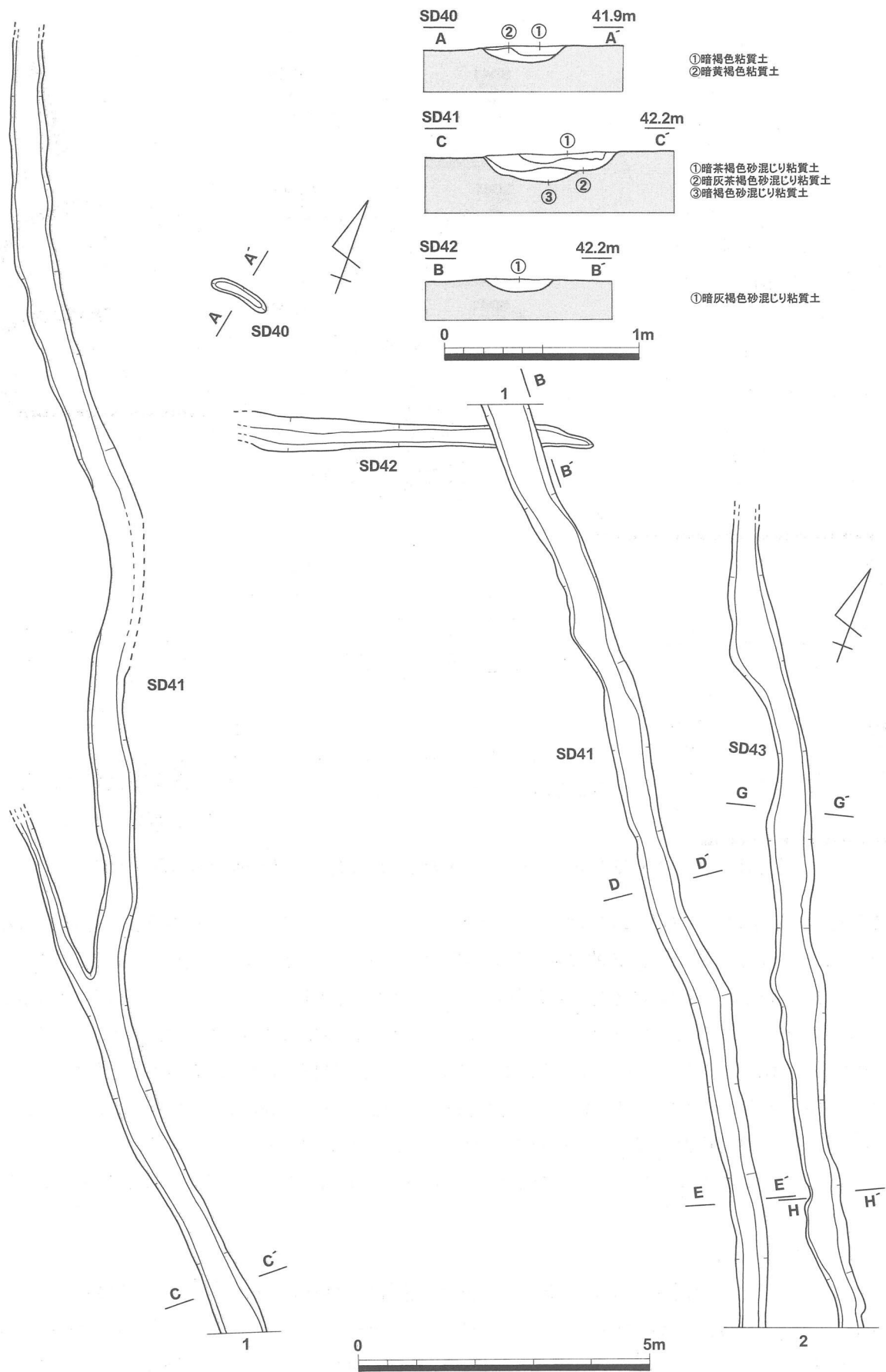
SD36・37 (第48・49図)

C 2 調査区で検出され、SD37の東肩の一部、北端・南端は調査範囲外で明確ではない。しかし、位置的には調査区南部で検出しているSD48につながるものと考えられる。SD36は、SD37に平行して延びる溝で、北端はSD37同様調査範囲外に延び、南端は自然消滅している。SD36はその埋土から、自然埋没を考えられ、SD37もほぼ同様の状態で埋没する。位置関係から見て、両者が並存していたことは疑いない。

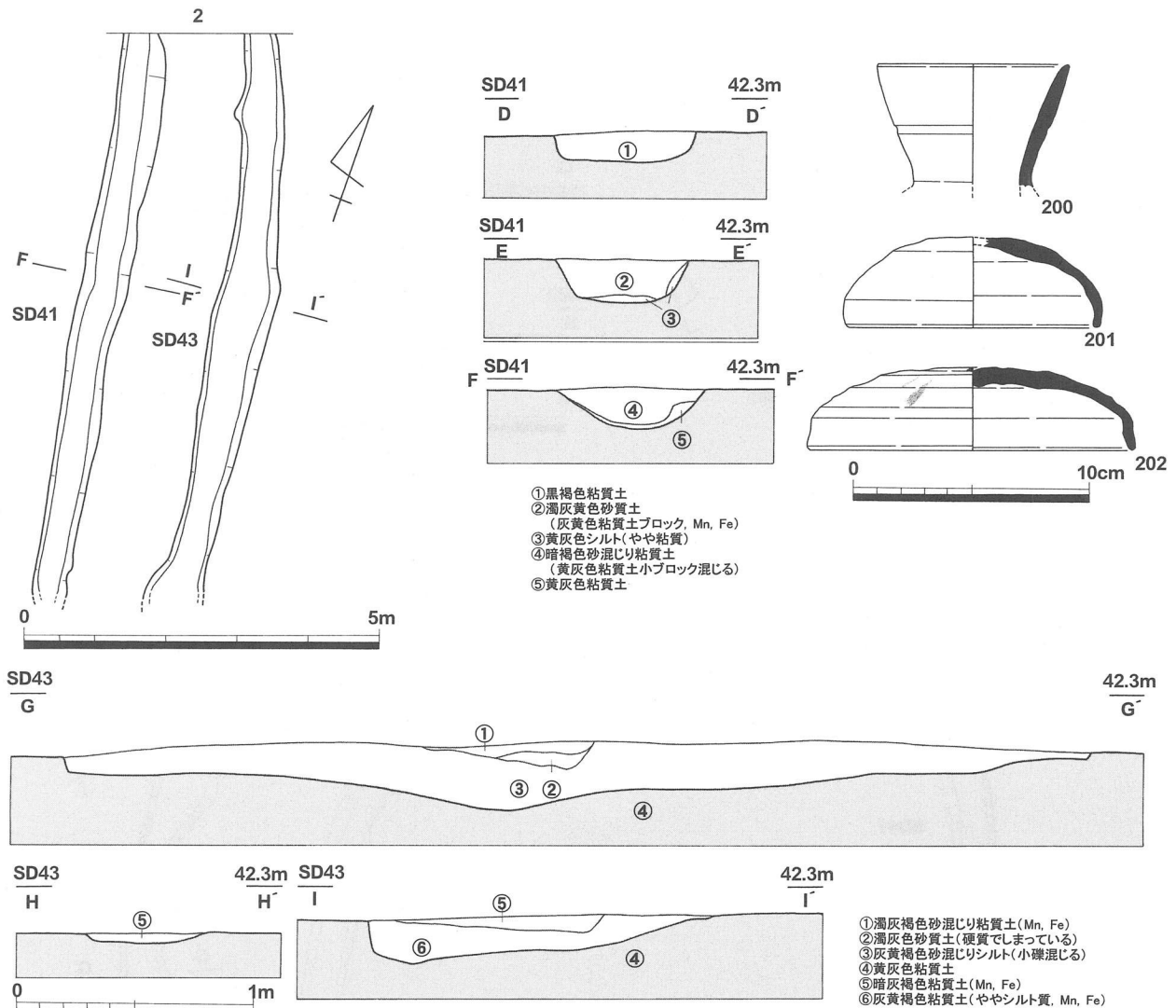
192～199は、SD37出土の遺物である。すべて弥生時代に属する資料である。192は、高杯の口縁部で、短く外反して端部は細くなり終わる。193・194は甕で、193は口縁部が「く」の字で外湾気味に延びて細く終わる。194は「く」の字に直線的に延び、端部には明瞭ではないが面を持つ。内面はヘラナデ、外面はナデ調整が行われている。195は広口壺Bの頸部で、体部内面には指頭圧痕が顕著である。他はナデ調整が行われている。196は甕底部で、やや小さくなりながらも平底を維持しており、外面にはハケ目調整がなされている。197は鉢で、半球状を呈し、内外面ナデ調整である。198・199はサヌカイト製スクレイパーで、丁寧な刃部調整が施されている。土器資料については、摩滅が著しく調整が明確ではない。形態からは、192の高杯口縁部と196の甕底部の2点からV-6・7様式と考えておく。

SD40～43 (第50・51図)

A 3・4、B 4・5 調査区の西辺を南北に延びる溝状遺構群である。SD40は、この一群の中でやや



第50図 SD40~43平面図 (1/100) ・断面図 (1/30)



第51図 SD41・43平面図(1/100)・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/3)

性格を異にするもので、鋤溝に該当するものと考えられる。埋土は二層で、自然埋没と考えられる。SD41が最も長く延びる溝で、部分的に逆台形状の断面を有するが、おおむね皿状の断面で、自然埋没と考えられる。SD42は、SD41に先行する溝状遺構で、埋没状況は他とおおむね同様である。SD43は、SD41にほぼ平行して延びる溝状遺構で、交差しないことから同時期に並存していたと考えられる。

遺物の出土はSD41に限られており、本調査区で他にない古墳時代後期の須恵器が出土している。

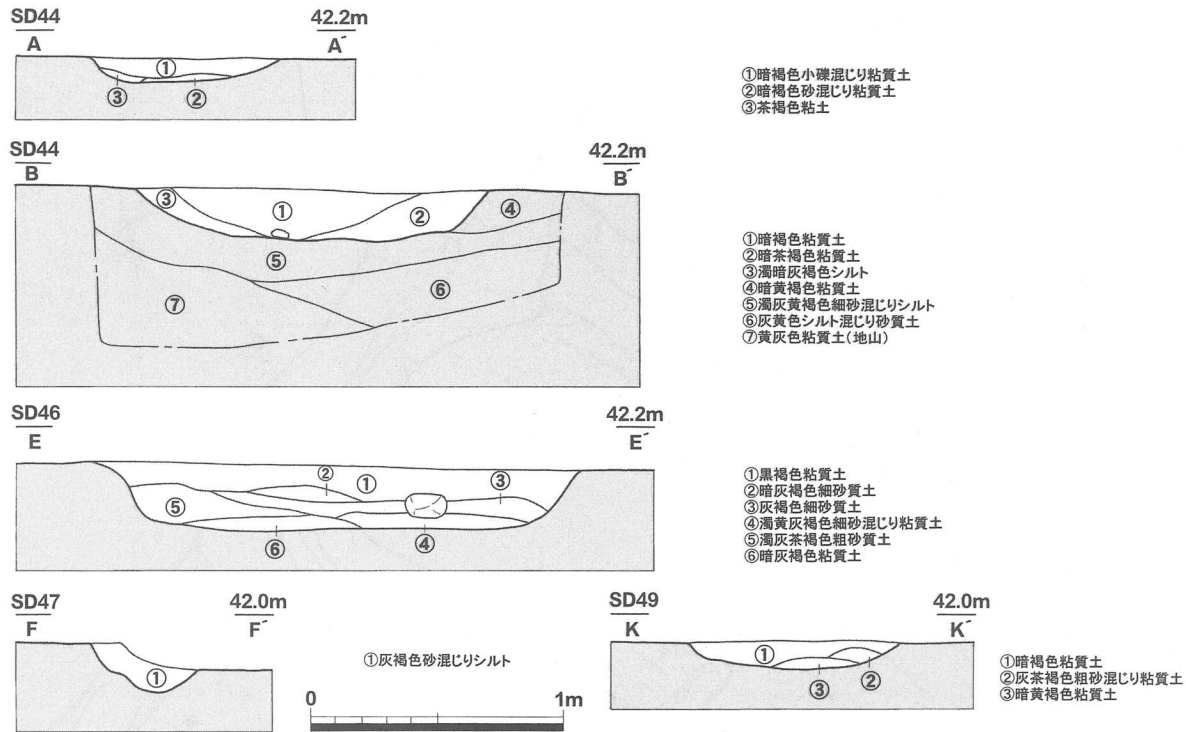
200は、提瓶もしくは平瓶の口縁部で外上方に直線的に延び口縁端部は細く終わる。201・202は杯蓋で、201は天井部から口縁端部まで丸みを持って移行し、202は屈曲して口縁端部に至る。201が小形であるのに対して、202はやや大形であることなどからMT85・TK43併行期、6世紀後半に位置づけられる。

SD44～49 (第52～61図)

C4・5調査区で検出された溝状遺構群で、第2遺構面での検出である。切り合い関係からは、SD45=SD49→SD44=SD46=SD48=SD47と大きくは二つに分離することができる。SD45はSD48に切られるが、北端部が明らかではなく、SD48に重複する可能性が高い。南端でも同様のことが言えるが、それぞれ調査区外に延びるため断定はできない。SD49も、SD45から派生した溝状遺構と考えられるが、



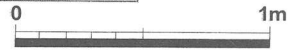
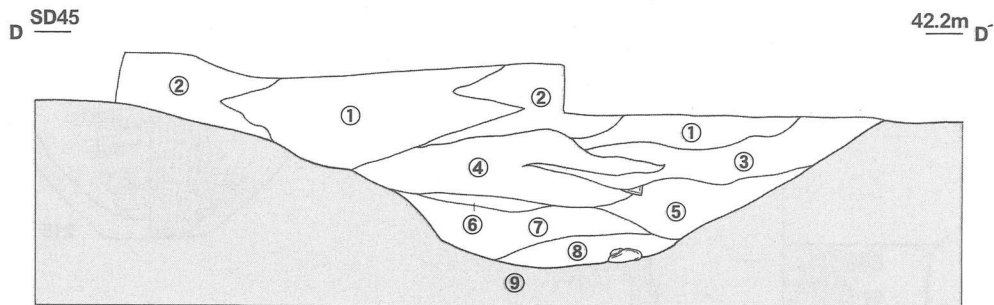
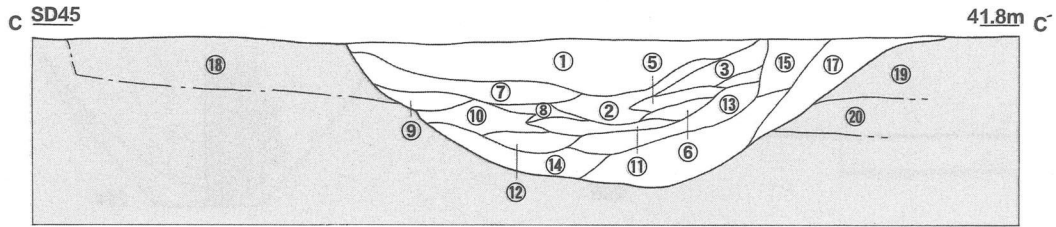
第52図 SD44~49平面図 (1/100)



第53図 SD44・46・47・49断面図 (1/30)

SD48と重複するため定かではない。SD46・47は、SD48から派生した溝状遺構で不整形な形からオーバーフローとも考えられたが、SD46のE断面に見るように逆台形状の断面を持つ明確な遺構である。機能面から考えると、SD46等すべてを溝状遺構として取り扱うには疑問もあるが、明確な答えが見出せないため、ここでは、溝状遺構として取り扱う。埋土の状況から見て、徐々に埋没していったことが考えられる。

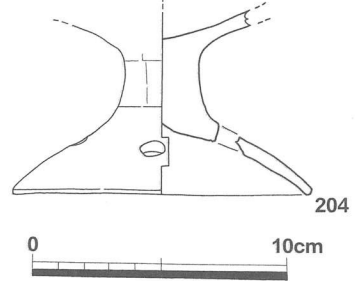
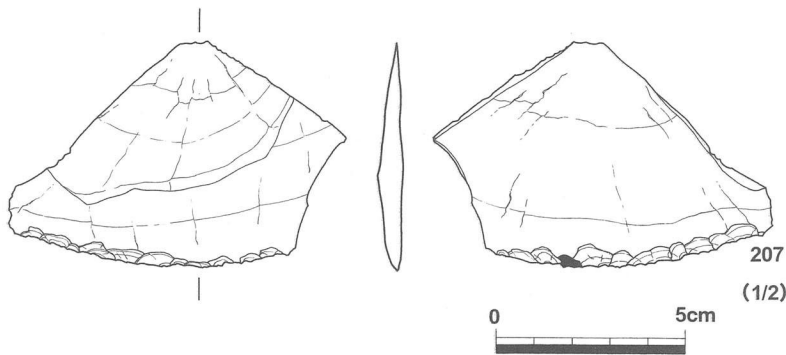
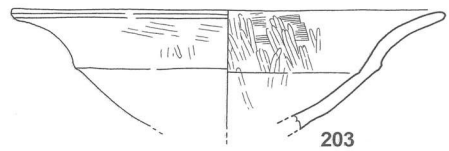
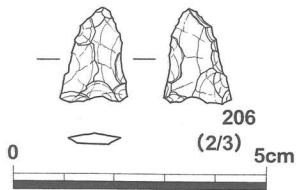
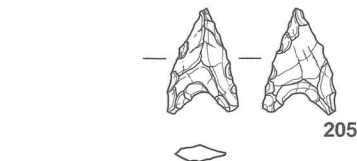
遺物は、SD45・48から出土している。203～241がSD45、242～253がSD48出土遺物である。203・204は高杯の杯部と脚部である。203は半球状の体部から大きく外反して端部を丸く終わらせる口縁部を有し、摩滅している体部外面を除いてヘラ磨きが行われている。204は中実の筒部から内湾気味に脚端部に至り、端部は丸く終わる。円孔が4孔見られる。内外面とも摩滅しており調整は不明である。V-5・6様式頃と想定される。205・206は石鏃である。共に凹基式と考えられる。207は横長剥片に刃部を加えたスクレイパーである。208～212は壺、213～226は甕、227～241は鉢である。208～211は広口壺の口縁部で、208は端部を上下に拡張し、内面屈曲部に半裁竹管文を施している。外面に一部ハケ目が見られる。209は口縁端部に面を持ち、櫛描波状文を施している。内面にヘラ磨き、外面にハケ目が部分的に観察できる。210は体部から短く頸部が立ち上がり屈曲して外上方にのびる口縁部を有する。頸部外面に一部ハケ目が認められるが、体部内面の指頭圧痕を除いてナデ調整が行われている。211は口縁部が欠損している。体部も肩部で接合していない。やや球形気味ではあるが肩部に最大径部を持つ資料で、肩部から頸部にかけてハケ目が断片的に観察できる。体部下下部は、内外面とも板ナデ調整である。底部は平底を残すが、やや丸みを持ち、底部と体部の境は不明瞭になりつつある。212はやや横広の体部を持ち、底部は211同様である。体部外面は、下部がヘラ磨き、上部がハケ目調整である。内面は最大径部分に横方向のヘラ削りがある他は指ナデである。213～217の底部は、体部との境が明瞭で、おおよそ砲弾型の体部を持つ。外面はハケ目調整が多く、215・217にはタタキ目も観察される。内面はヘラ削りもしくは板ナデで調整されている。218～226は甕の口縁部で、226のみほぼ完形である。口縁部は「く」



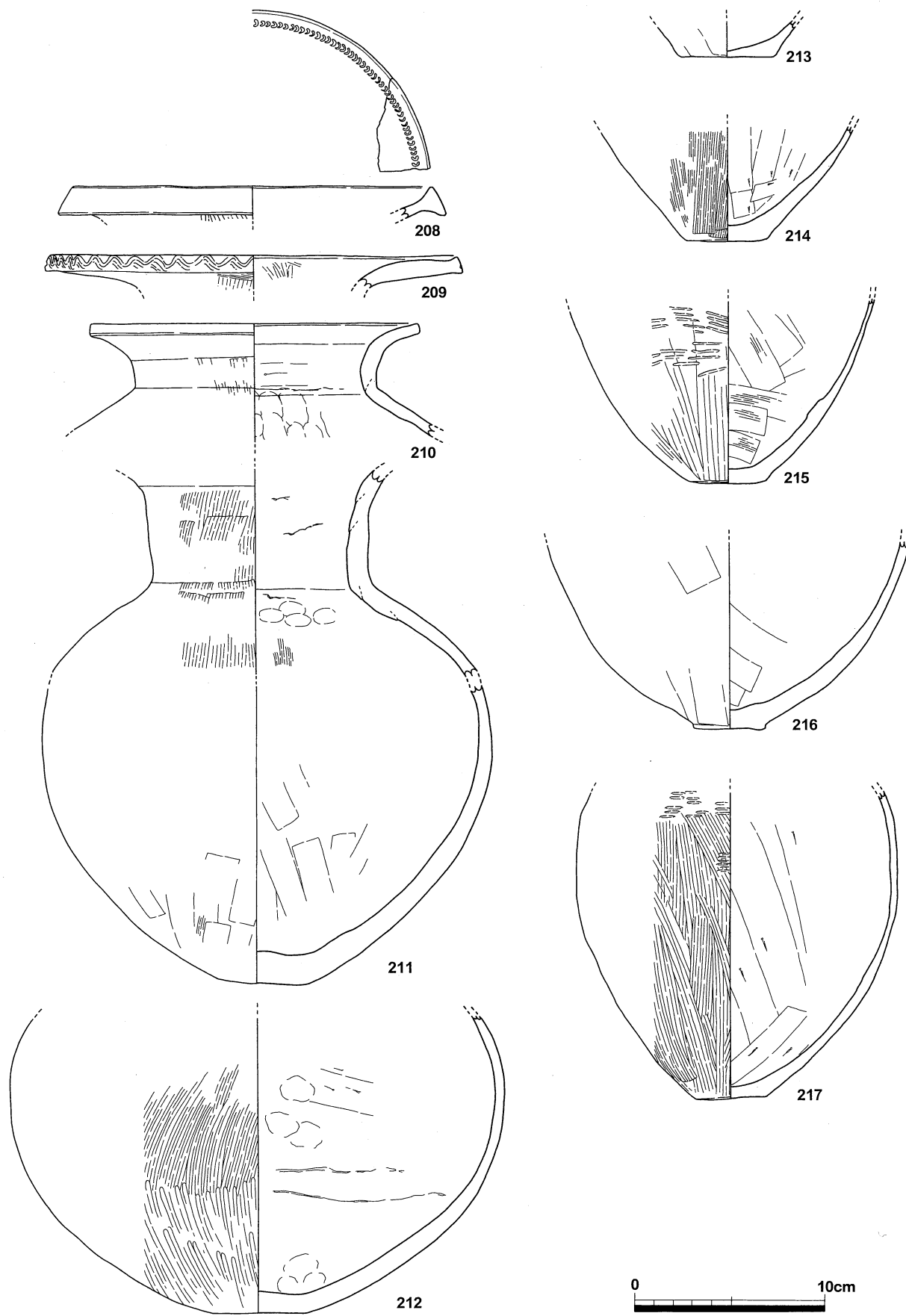
- ① 濁灰黄褐色粗砂質土(硬質, Fe)
- ② 暗黄灰色砂混じり粘質土(Fe)
- ③ 暗黄灰色シルト
- ④ 灰褐色粘質土(Fe)
- ⑤ 淡灰色砂質土
- ⑥ 灰褐色粘質土(④よりやや暗い)
- ⑦ 暗黄灰色粘質土(Fe)
- ⑧ 灰色砂質土(中砂)
- ⑨ 灰色砂質土(⑧と同じ)
- ⑩ 暗灰色粘質土(Fe)

- ⑪ 黒灰色粘質土
- ⑫ 濁灰黄色砂質土(暗灰色粘質土混じり)
- ⑬ 灰茶色細砂質土(Fe)
- ⑭ 淡黄灰色細砂質土
- ⑮ 灰褐色粘質土(Fe, Mn)
- ⑯ 灰褐色シルト
- (Fe 黒灰色粘質土ブロック混じる)
- ⑰ 暗灰色粘質土
- ⑱ 黄灰色砂混じり粘質土
- ⑲ 黄灰褐色砂混じり粘質土(Mn, Fe少々含む)
- ⑳ 灰褐色砂混じり粘質土
- (Mn, 粘質土ブロック多く含む)

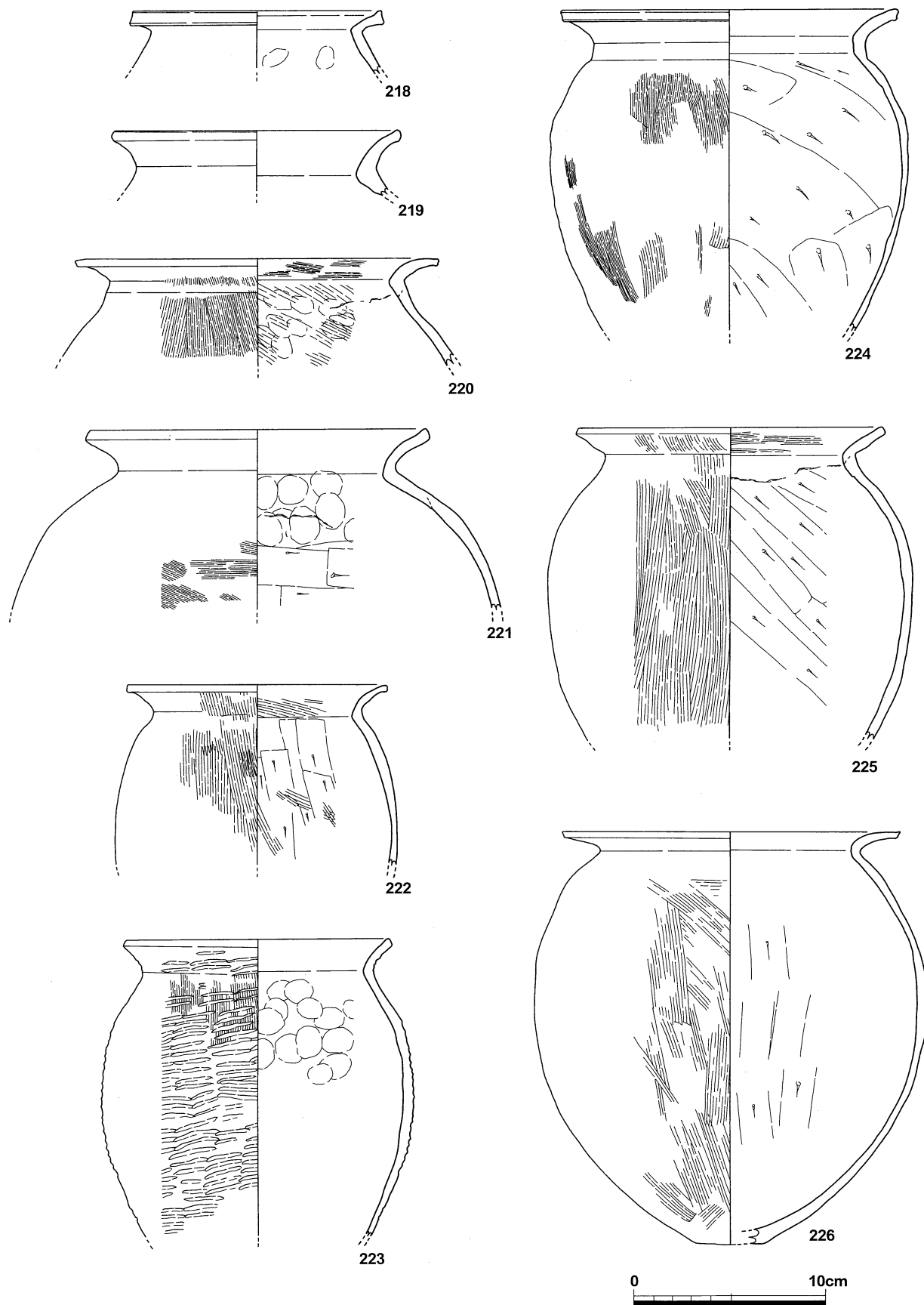
- ① 濁灰黄褐色粗砂質土
- ② 濁灰黄色砂混じり粘質土
- ③ 暗灰褐色粘質土(ややシルト気味, Fe, Mn含む)
- ④ 濁淡灰黄色細砂質土
- ⑤ 淡灰色細砂質土
- ⑥ 灰色粘質土(Fe)
- ⑦ 灰黄色細砂質土
- ⑧ 淡黄灰色細砂質土
- ⑨ 灰黄色シルト(Fe, Mn)



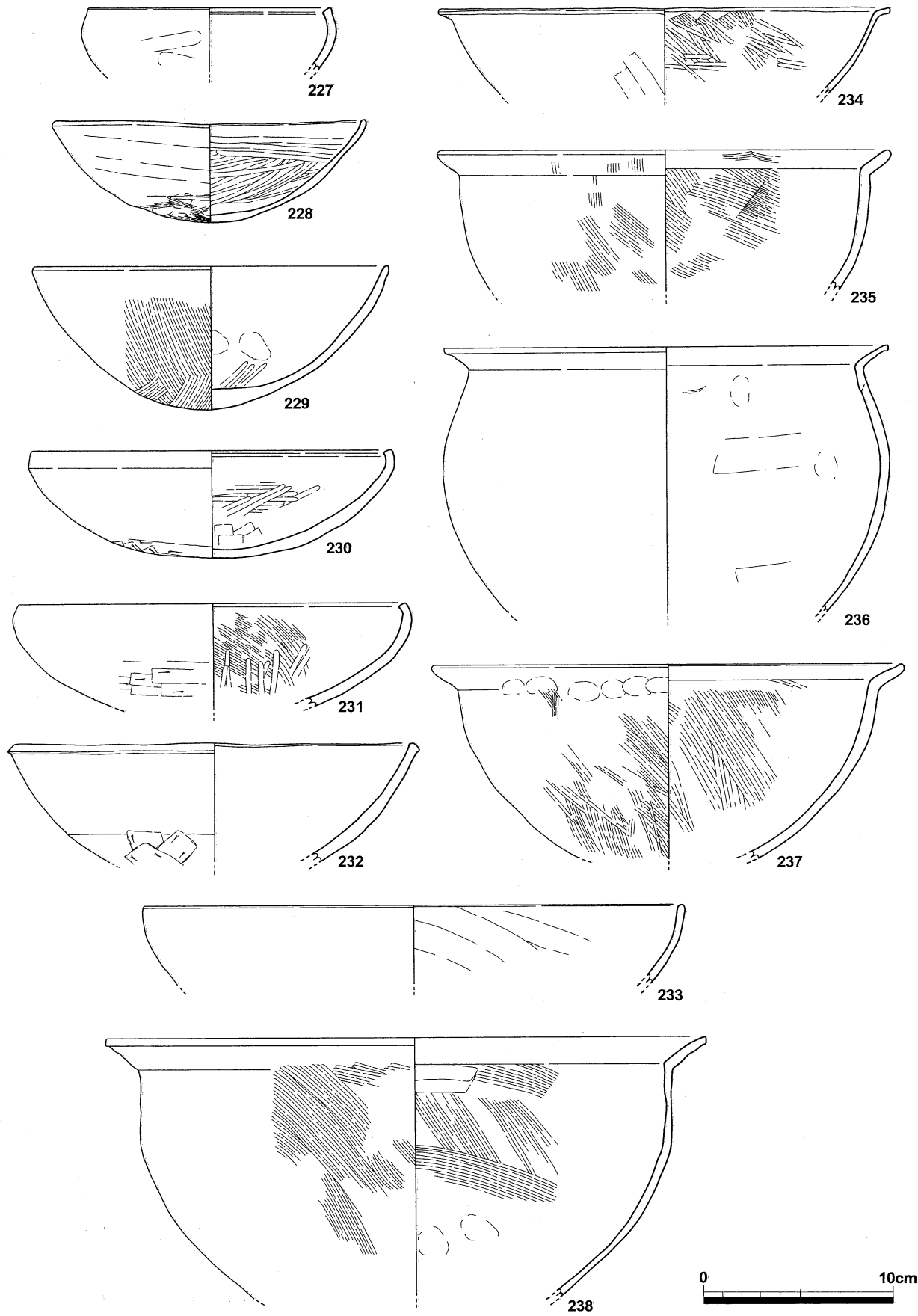
第54図 SD45断面図(1/30)、出土遺物実測図①(1/3)



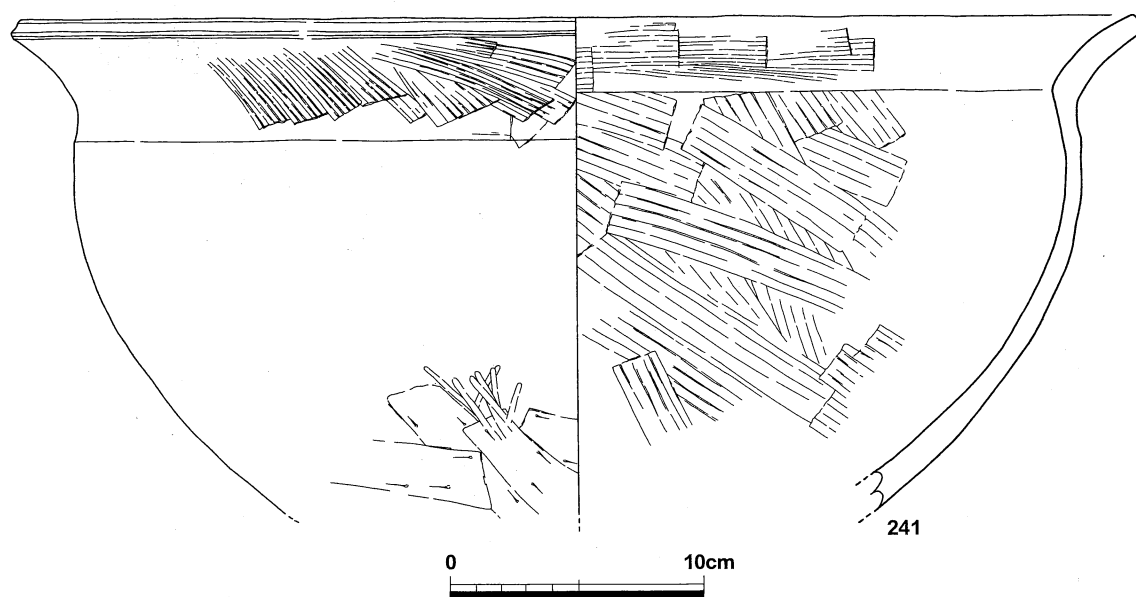
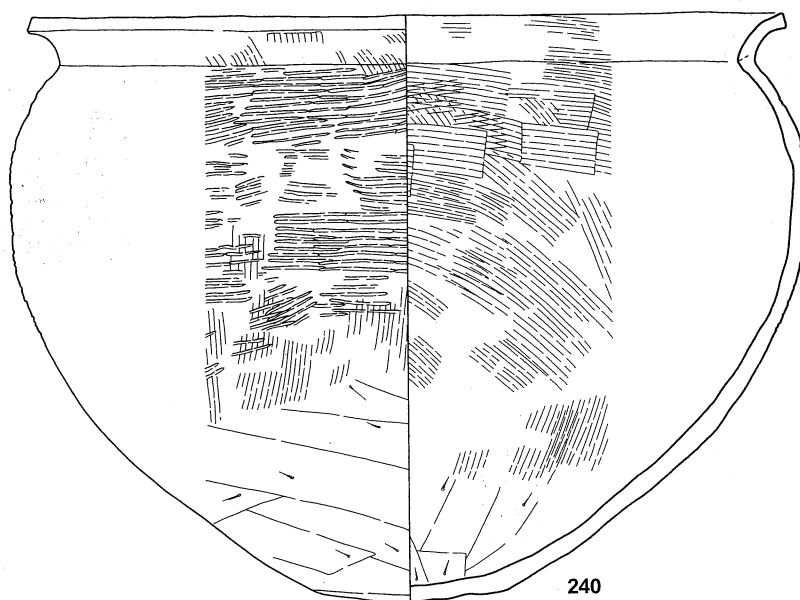
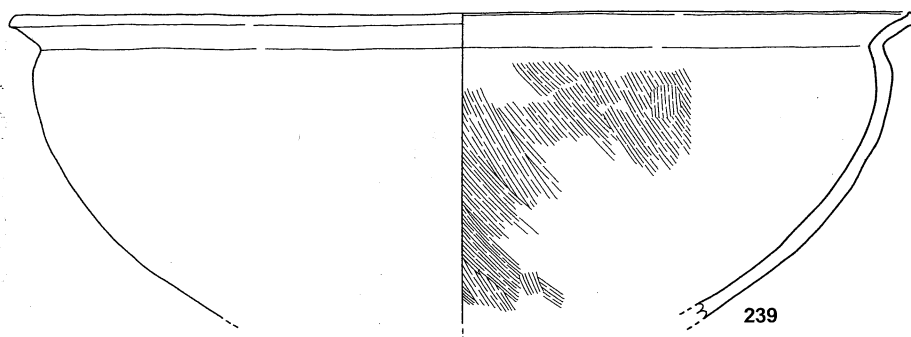
第55図 SD45出土遺物実測図② (1/3)



第56図 SD45出土遺物実測図③ (1/3)



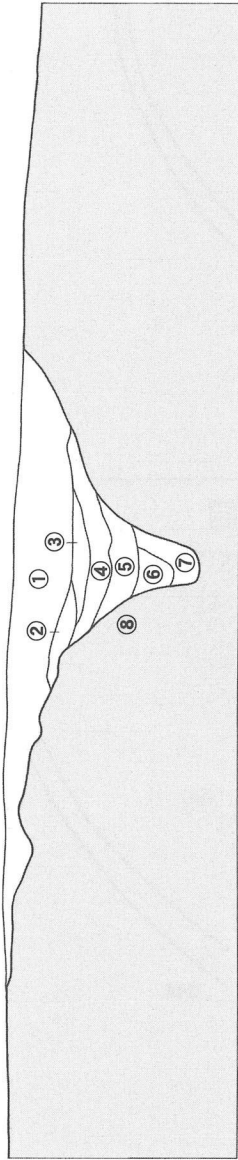
第57図 SD45出土遺物実測図④ (1/3)



第58図 SD45出土遺物実測図⑤ (1/3)

SD48
G

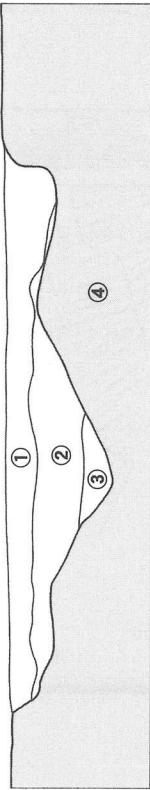
42.1m
G



- ①暗褐色粘質土
- ②暗灰黄色粘砂混じり粘質土
- ③暗灰黄色粘質土
- ④暗灰褐色粘砂混じり粘質土
- ⑤灰色砂 (Fe)
- ⑥暗灰色粘砂混じり粘質土
- ⑦濃灰黄色粘質土 (Mn)
- ⑧灰黄色粘砂混じりシルト (Fe, Mn)

SD48
H

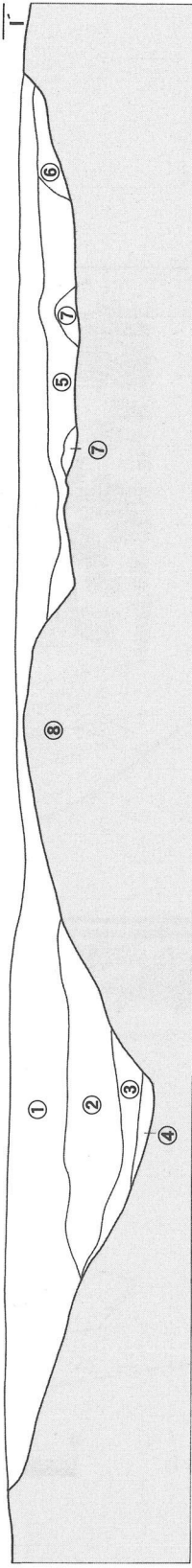
42.1m
H



- ①暗褐色粘質土
- ②暗褐色粘砂混じり粘質土
- ③濃暗灰黄色砂
- ④黄灰色粘質土

SD48
I

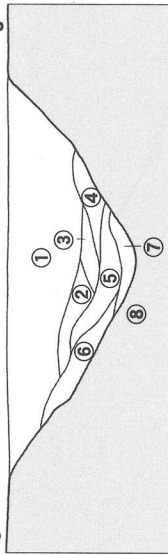
42.1m
I



- ①暗茶褐色粘質土 (重水分はやや黒褐色気味)
- ②暗茶褐色粘砂混じり粘質土
- ③暗灰褐色粘砂混じり粘質土 (2が混じる)
- ④灰褐色粘質土
- ⑤灰褐色粘砂混じりシルト
- ⑥暗灰褐色粘質土
- ⑦暗灰褐色粘砂混じり粘質土 (やや硬質)
- ⑧黄灰色シルト

SD48
J

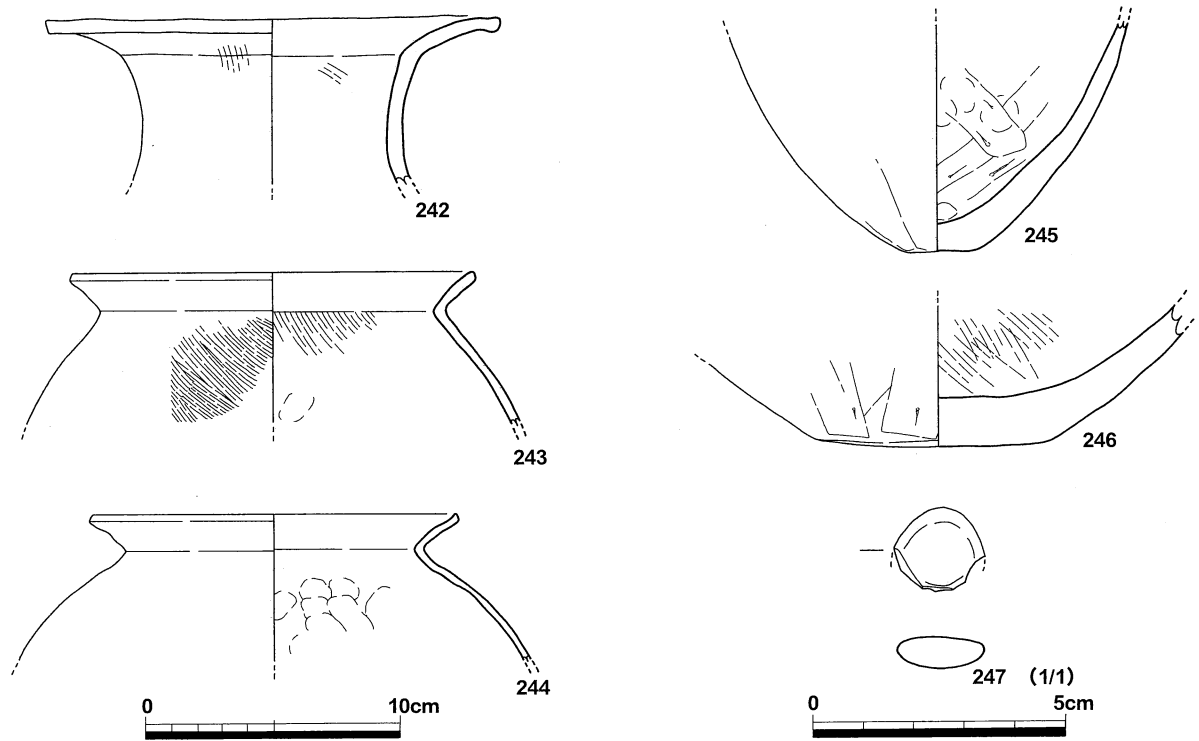
42.2m
J



- ①暗褐色粘質土
- ②暗褐色シルト混じり粘質土
- ③暗褐色粘砂混じり粘質土
- ④暗灰色シルト混じり粘質土
- ⑤暗灰色粘砂混じり粘質土
- ⑥暗灰色粘質土
- ⑦灰黄色粘質土
- ⑧灰褐色粘質土



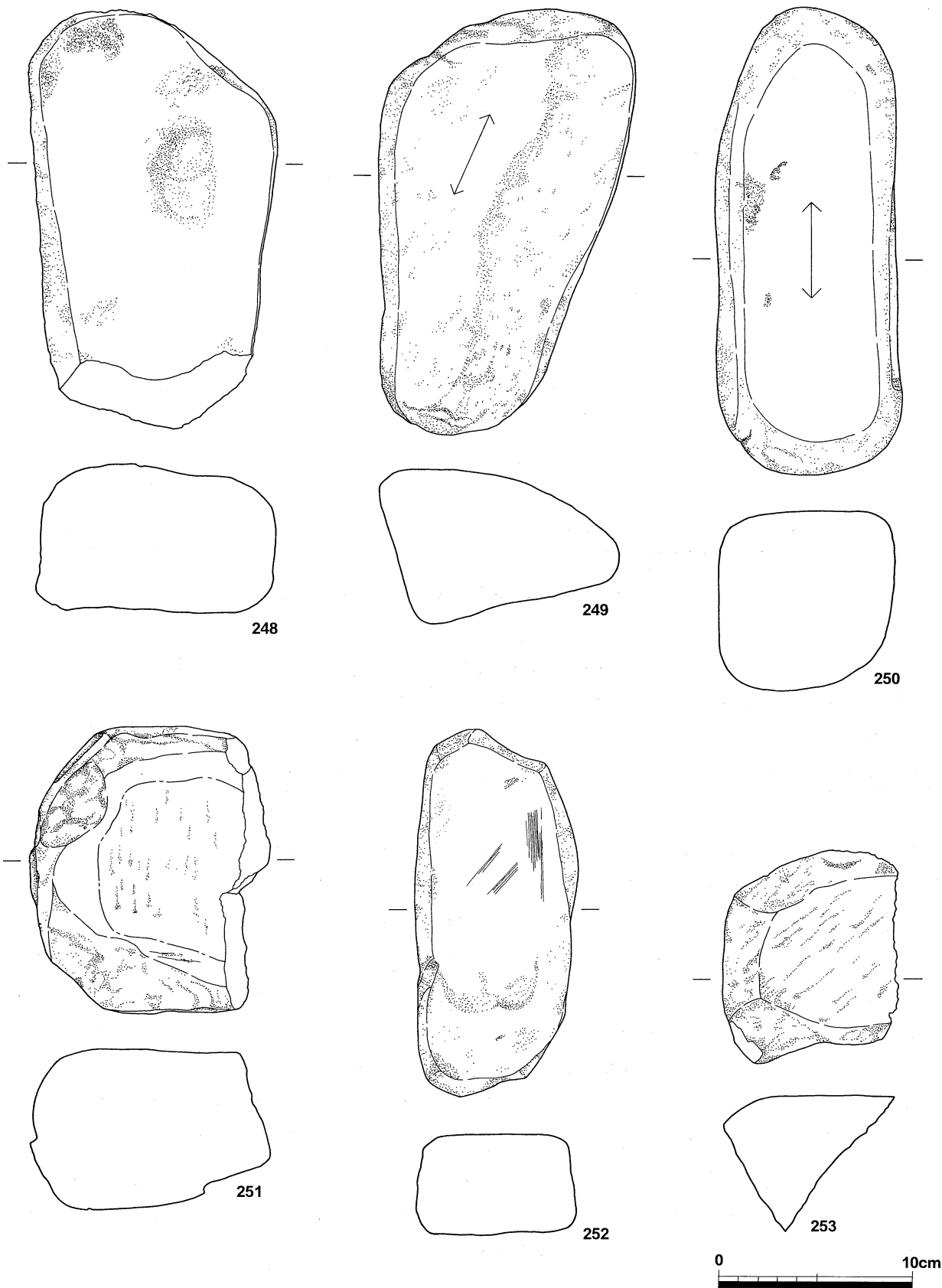
第59図 SD48断面図 (1/30)



第60図 SD48出土遺物実測図① (1/3)

の字に外反するが、内面屈曲部が明瞭な218～223と、不明瞭な224～226に分けられる。また、体部も砲弾型ではあるが、細長いものや球形を呈するものなどバリエーションが多い。底部は226のみで、やや不明瞭な境をもつものの平底を有する。調整は、外面がハケ目（223はタタキ目が顕著である）、内面がヘラ削りのものが多い。鉢は、227・230・231のように口縁端部が内湾するもの、228・229・232・233のように半球状を呈するもの、234～238のように屈曲して口縁部を形成するものがある。227は、内外面ともナデ調整である。228は丸底で、外面底部付近を指頭圧痕後ハケ調整、内面をヘラ磨きしている。229は丸底で、外面をハケ調整、内面をナデ調整している。内面底部分に、部分的なヘラ磨きが見られる。230も丸底で、外面底部付近はヘラ削り、内面はヘラ磨きである。231は底部付近をヘラ削り、内面をヘラ磨き後ハケ調整している。232は内外面とも摩滅しているが、底部付近にヘラ削りが見られる。233は内外面ともナデ調整である。外面は板ナデの痕跡が認められる。234は短く屈曲させて水平に口縁部を作るもので、内面をヘラ磨き、外面を板ナデ調整している。235は屈曲させて短く外上方にのびる口縁部を有し、内外面ともハケ調整を施している。236は深い体部を有し、235同様短く外上方にのびる口縁部を持つもので、内外面とも摩滅のため一部の痕跡を除き調整は不明である。237は235同様の器形をし、内外面ともハケ調整が見られる。238も同様の器形で、内外面ともハケ調整である。239も同様の器形で、外面を磨き、内面をハケ調整している。外面のミガキについてはヘラ等、道具を特定できない状態である。240はやや平底気味の底部を持ち、口縁部が外反する。口縁端部には面を持つ。底部内外面ともヘラ削りが見られ、外面上半はタタキ後ハケ調整、内面はハケ調整である。241は底部付近をヘラ削りしており、そのほかはハケ調整である。

以上、SD45出土遺物について概観したが、壺・甕・鉢等の底部形状が、平底から丸底への過渡期にあたること、鉢の底部にヘラ削りが多用されていることなどからV-8様式に位置づけられる。

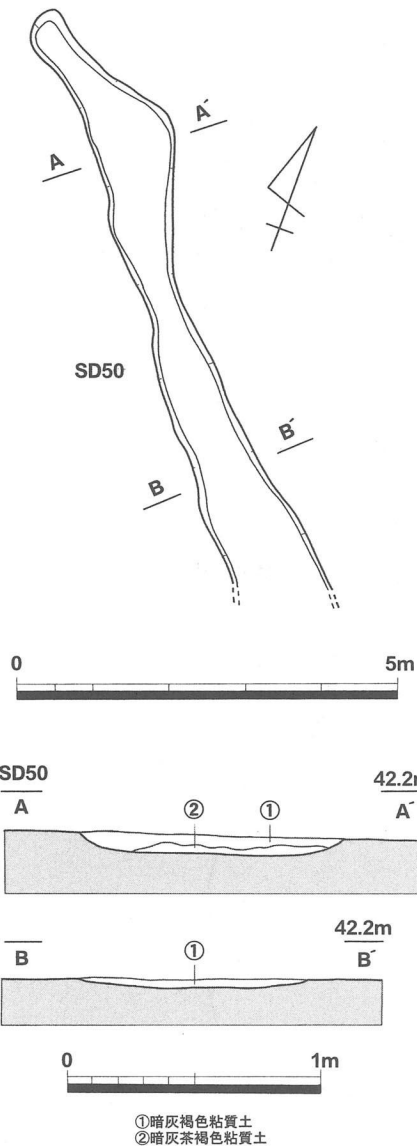


第61図 SD48出土遺物実測図② (1/3)

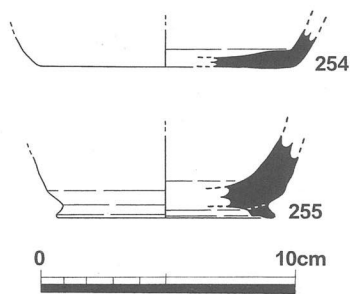
242は広口壺の口頸部で、部分的にハケ目が見られるが、全体的には摩滅しており調整は不明である。243・244は甕口縁部で、肩部より上が出土している。243は体部内外面にハケ調整、244は体部内面に指頭圧痕が見られる。245は甕底部で、やや小さいながらも平底を有し、内面にヘラ削りが見られる。246は鉢底部と考えられ、外面にヘラ削り、内面にハケ調整が見られる。247は石製で平たい円形を呈しており、基石の可能性がある。248～253は砂岩製の砥石と考えられる。

以上、SD48出土遺物について見たが、断片的な資料でしかなく、SD45に後出する資料としてVI-1様式に位置づけても大過ないが、やや資料数に問題があり保留しておく。

出土遺物の状態と南側での善通寺市教育委員会調査の成果から、SD45・48が、弥生時代後期の山南遺跡のほぼ北端部に位置する遺構であると考えられる。



第62図 SD50平面図 (1/100) 断面図 (1/30)



第63図 SD53出土遺物実測図 (1/3)

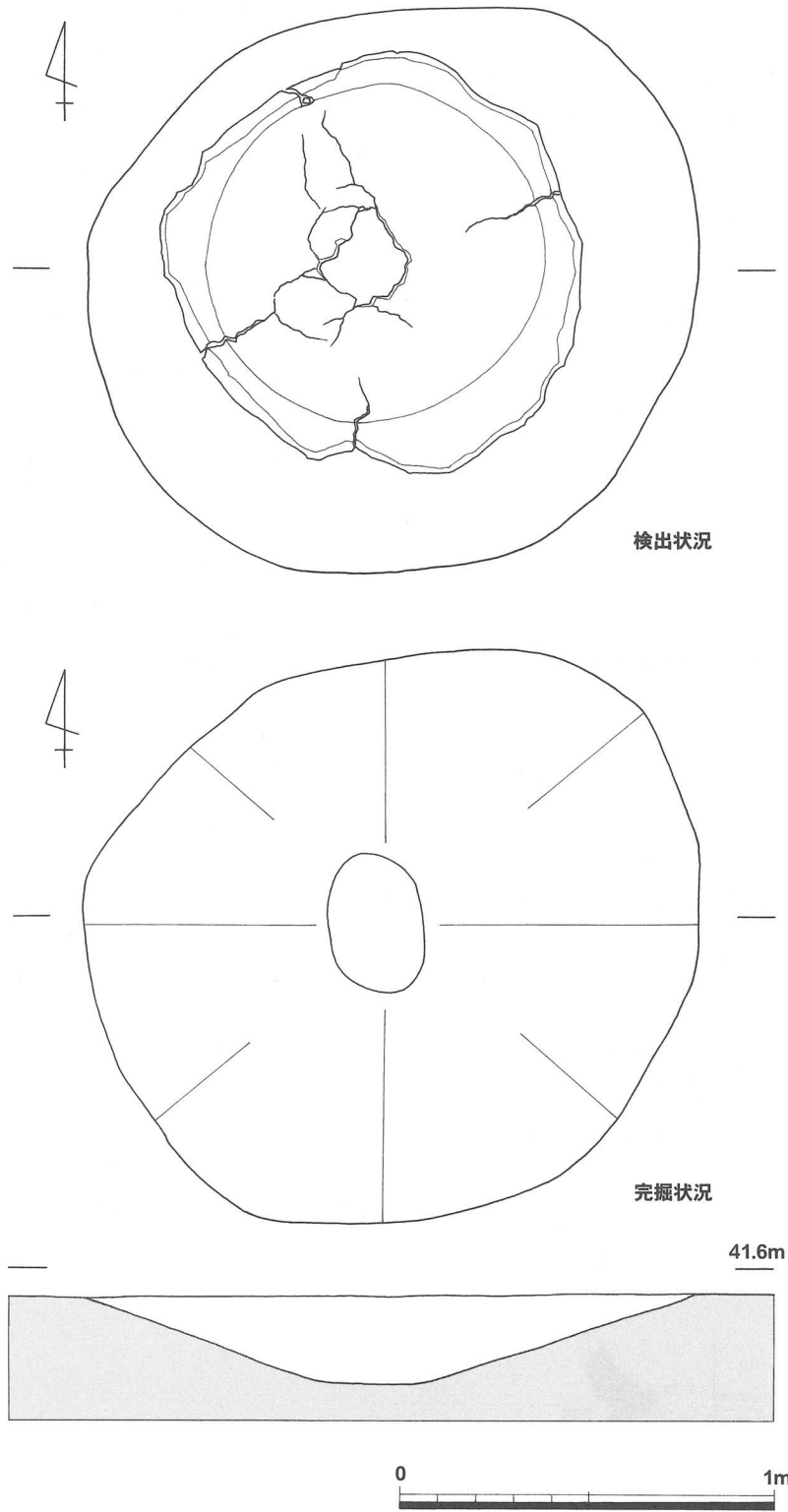
SD50 (第62図)

C5・D6調査区で確認した。前述のSD44～49の南東部に位置し、北西から南東方向へ延びる溝状遺構である。断面は浅い皿状を呈しており、自然埋没と考えられる。全体図からは、SD49につながる可能性が考えられる。

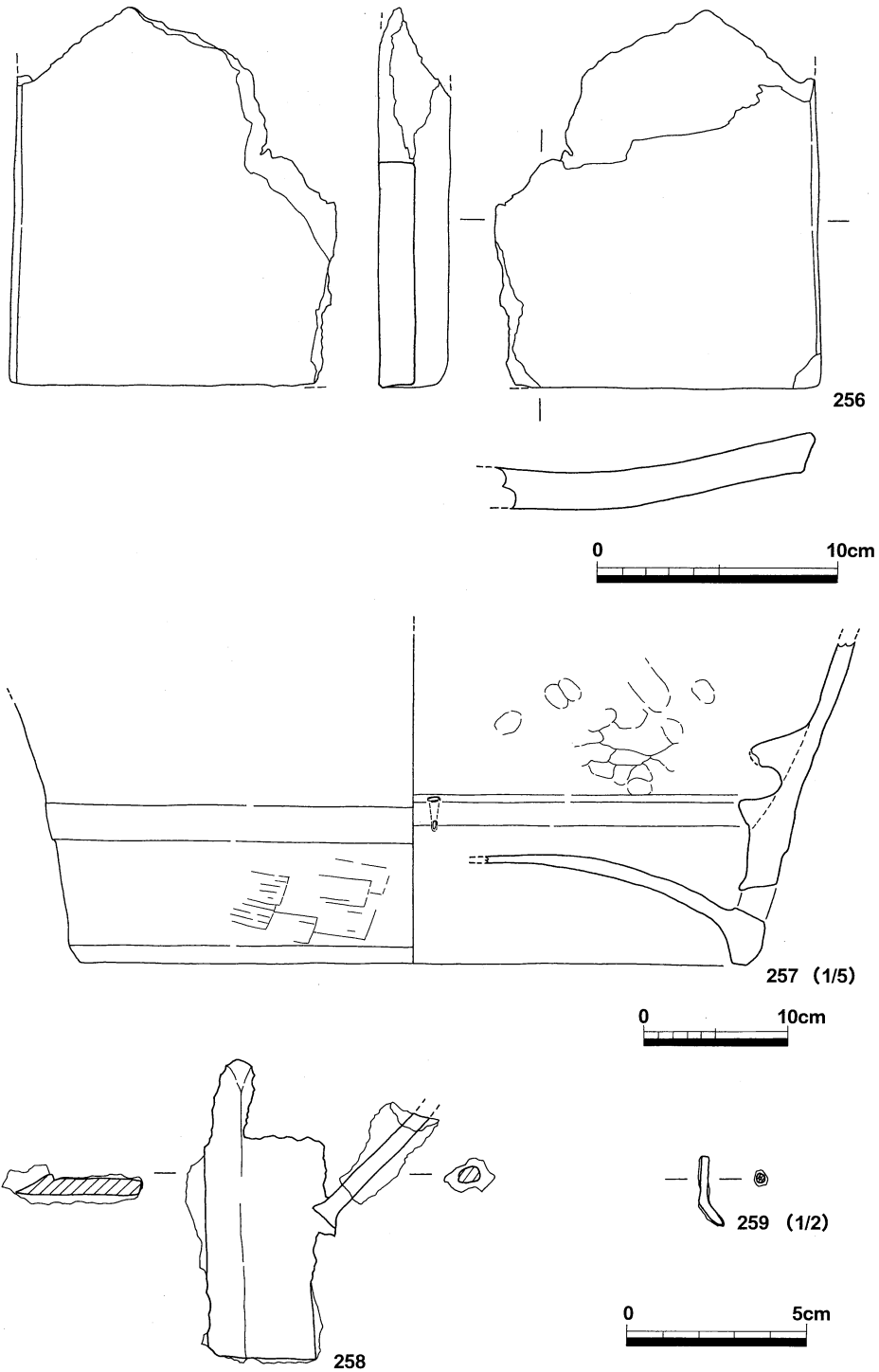
SD53 (63図)

出土遺物は254・255で、254は須恵器杯の底部、255は高台付壺の底部と考えられ、口縁部が欠損しており詳細は不明であるが、奈良時代の範疇で考える資料である。

5 土坑



第64図 SK01平・断面図 (1/20)



第65図 SK01出土遺物実測図 (1/3)

SK01 (第64・65図)

B 2 調査区で確認した円形の土坑で、257が据えられていた。断面は浅い皿状を呈する。出土遺物は256～259で、257の土製風呂のほか256瓦片、258・259の不明鉄器片が見られる。258はX線写真から見て鉄製鋤先に釘が錆着している状態と考えられる。258は断面円形の釘先の可能性が高い。年代は特定できないが近代以降の可能性が高いと考えられる。

SK02 (第66・67図)

B 2 調査区で確認した円形の土坑で、263が据えられていた。断面は浅い皿状を呈する。出土遺物は260～263で、263の土製甕のほか262瓦片、260・261の不明鉄製品が見られる。年代はSK01同様、近代以降と考えられる。

SK03 (第68図)

B 2 調査区で確認した円形の土坑で、出土遺物はない。断面は逆台形で二層の埋土からなる。1層には、焼土ブロック等が混ざることから埋められたことが明らかである。土坑の性格は不明である。

SK04 (第68図)

B 2 調査区で確認した卵形の土坑で、断面は浅い皿状を呈する。ベースブロック等を含むことから、短時間での埋没と考えられる。土坑からは264が出土している。264は、東播系こね鉢の口縁部片と考えられ、Ⅱ-⑦～⑨期、13世紀代に位置づけられる。

SK05 (第68図)

B 2 調査区で確認した不整形な土坑で、土坑内に掘り込みが3ヵ所確認できた。内、中央の掘り込みは、断面からも明らかなように柱穴の観を呈していることから、この土坑の性格は、3つの柱穴から柱材を抜き取る際の抜き取り穴の可能性も否定できない。いずれにしても、年代は出土遺物がないため不明である。

SK06 (第68図)

B 2 調査区で確認した不整形な土坑で、土坑底から265～267が出土している。土坑は、断面がいびつな逆台形で、埋土は3層からなる。自然埋没と考えられる。

265～267は土師器杯で、265はやや突出した底を持ち、266・267はやや不安定な底である。266は底面ヘラ切りが見られる。Ⅱ-⑦～⑨期、13世紀中葉～後半代に位置づけられる。

SK07 (第69図)

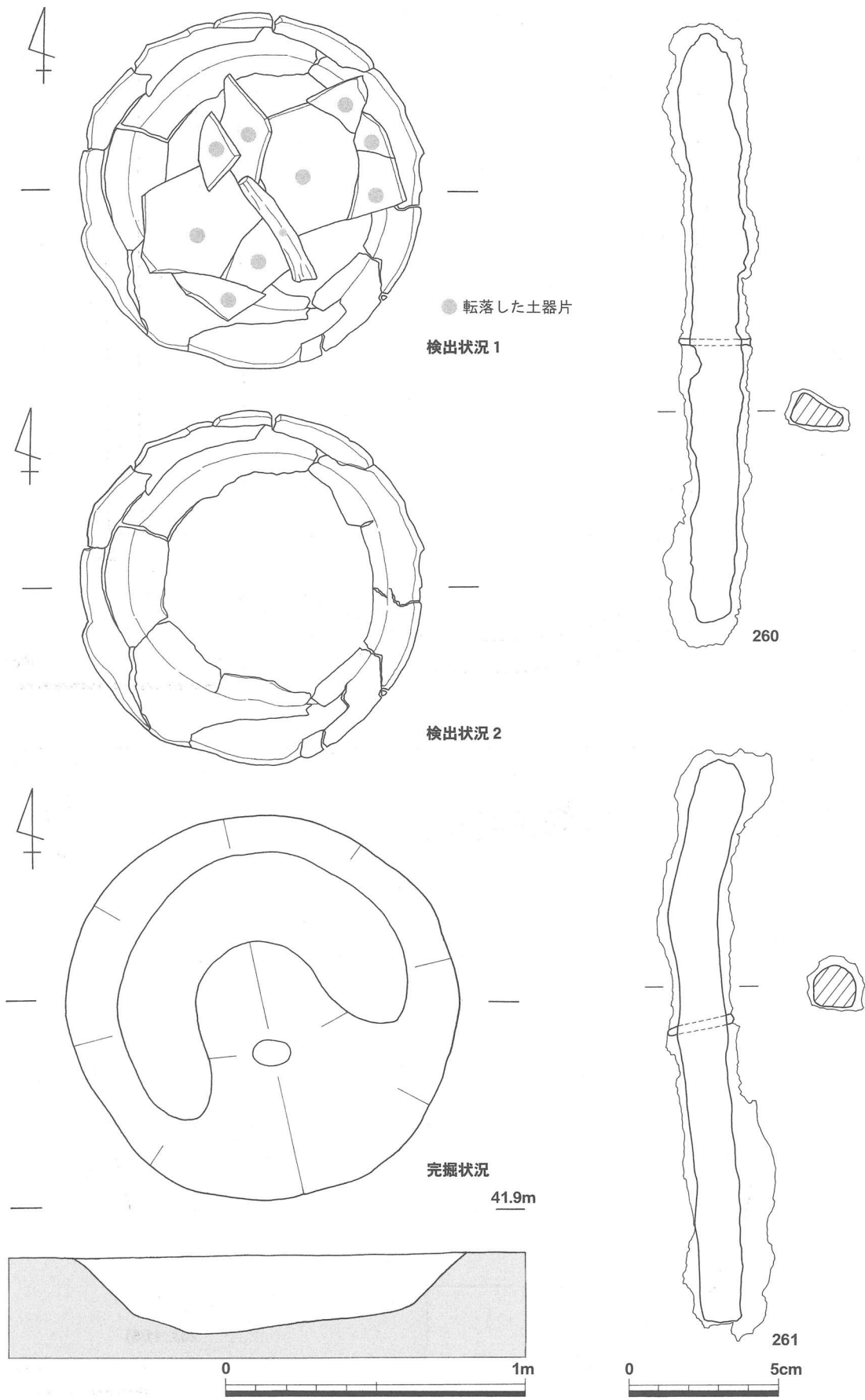
A 2 調査区で確認した不整形な土坑で、断面は四角形を呈する。埋土は1層で、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。

SK08 (第69図)

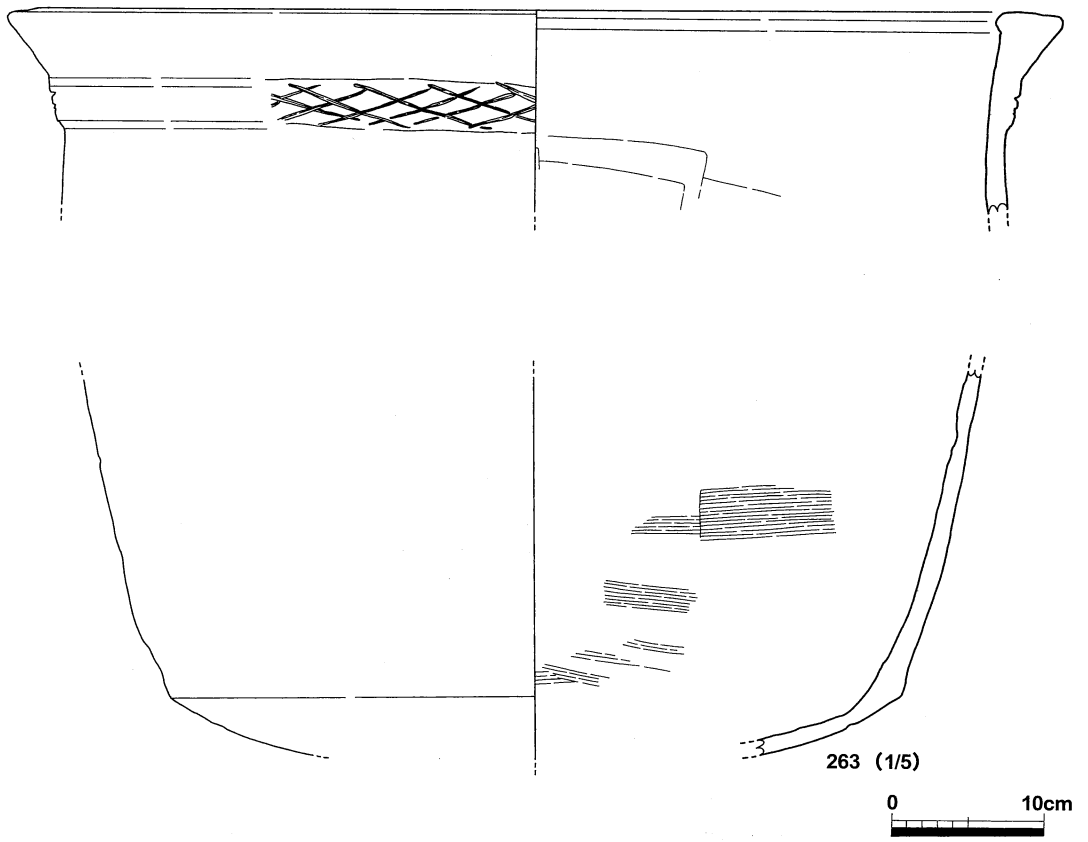
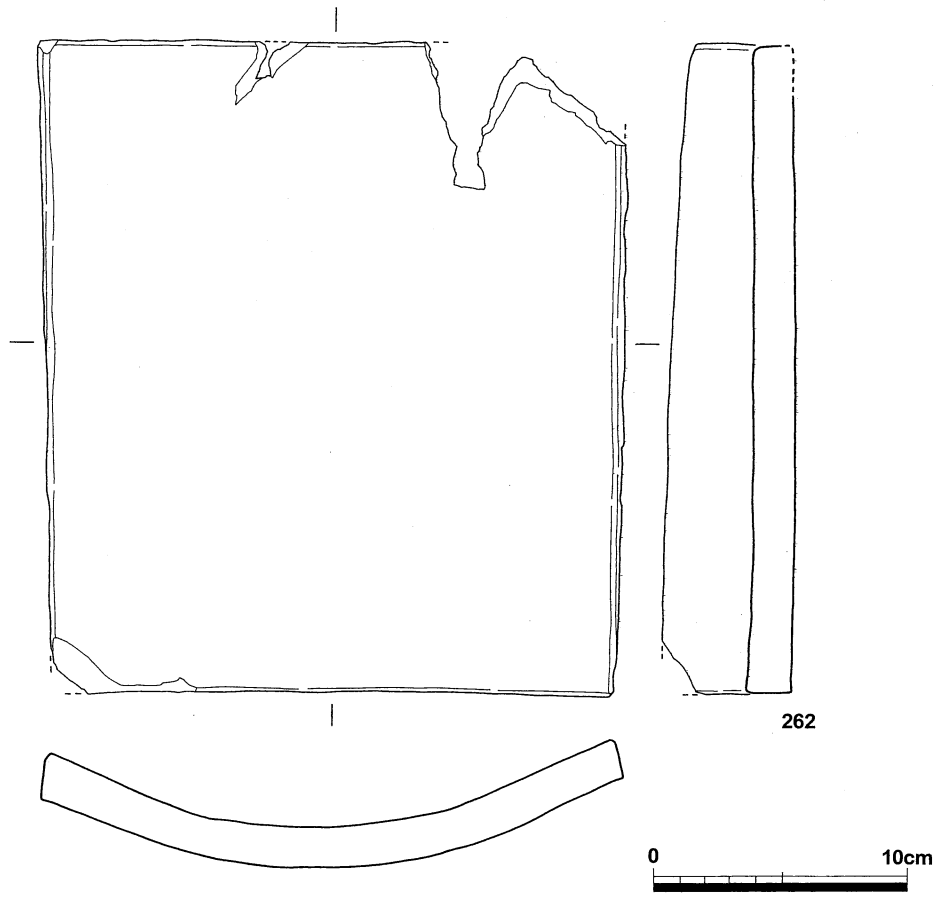
B 2 調査区で確認した不整形な土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は1層で、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。

SK09 (第69図)

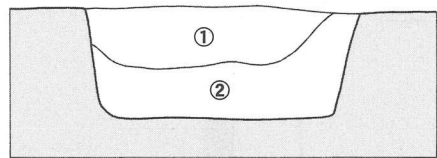
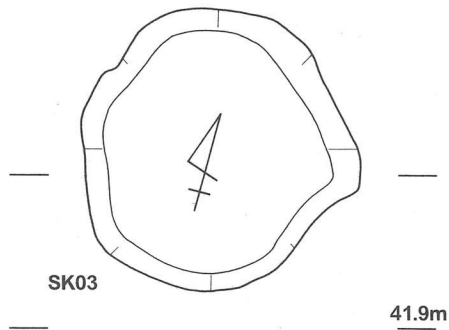
C 2 調査区で確認した隅丸方形の土坑で、断面は逆台形を呈する。埋土は1層で、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。



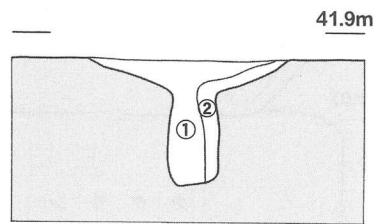
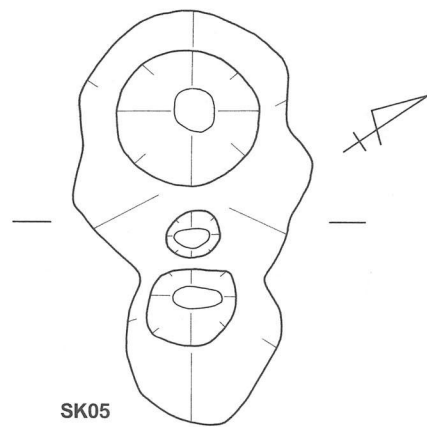
第66図 SK02平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図① (1/2)



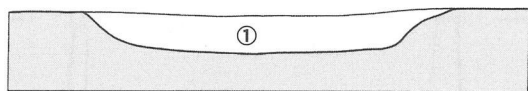
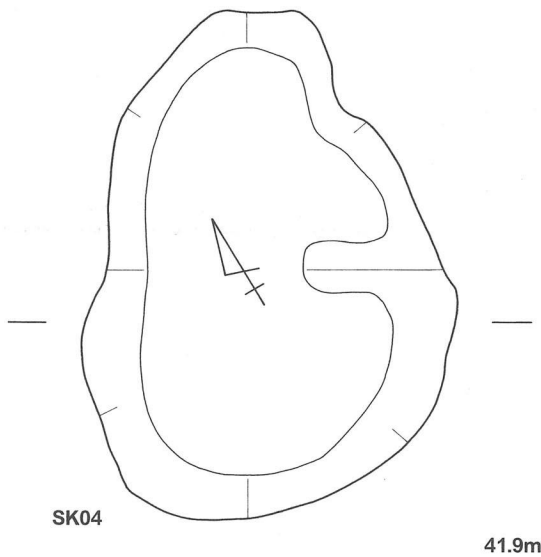
第67図 SK02出土遺物実測図② (1/3)



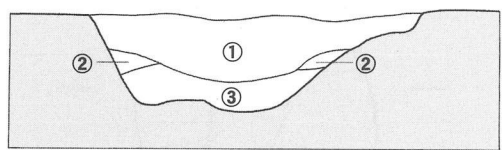
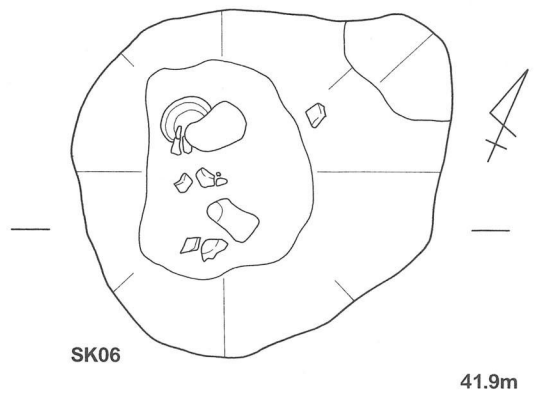
①濁灰色砂混じりシルト
(黄褐色粘質土ブロック, 暗褐色砂質土ブロック
焼土ブロック混じる)



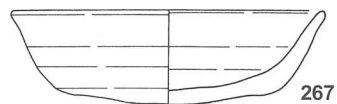
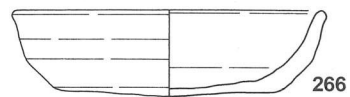
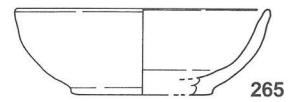
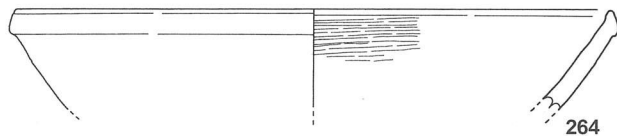
①灰色砂混じり粘質土(Mn, Fe)
②黄褐色粘質土



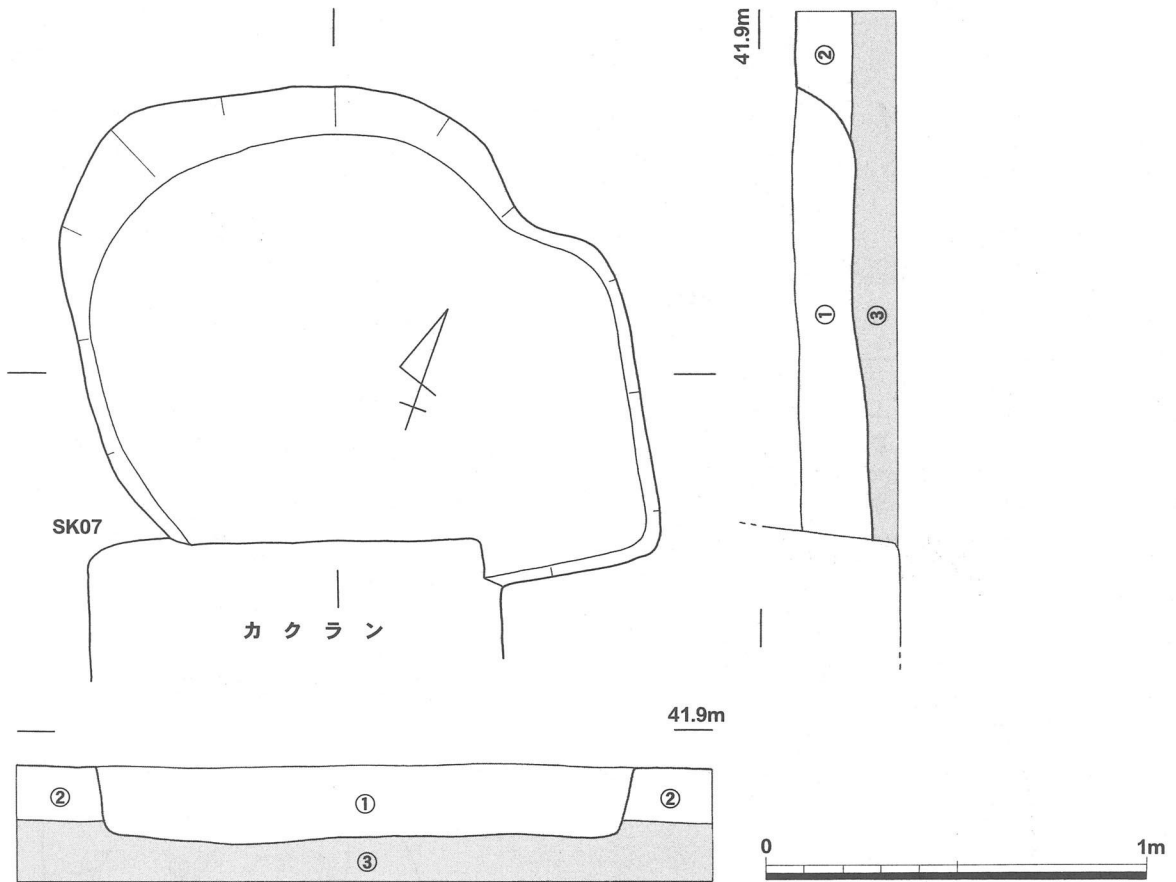
①灰色砂混じりシルト
(暗褐色粗砂混じり粘質土, ベースブロック混じる)



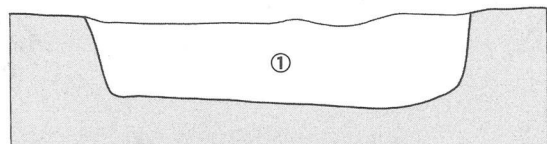
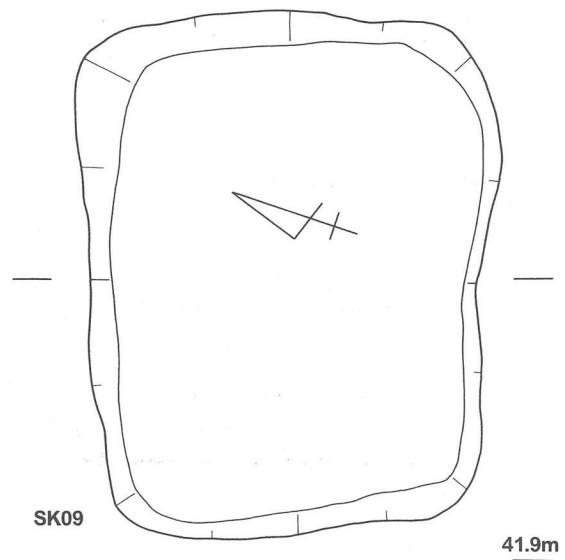
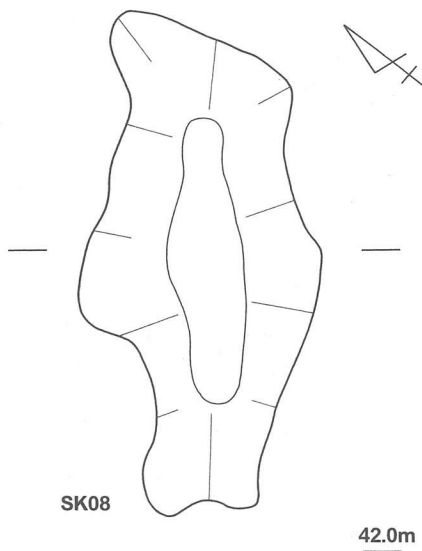
①濁黄灰色砂混じりシルト(Mn, Fe)
②暗黄褐色砂混じりシルト
③褐灰色シルト



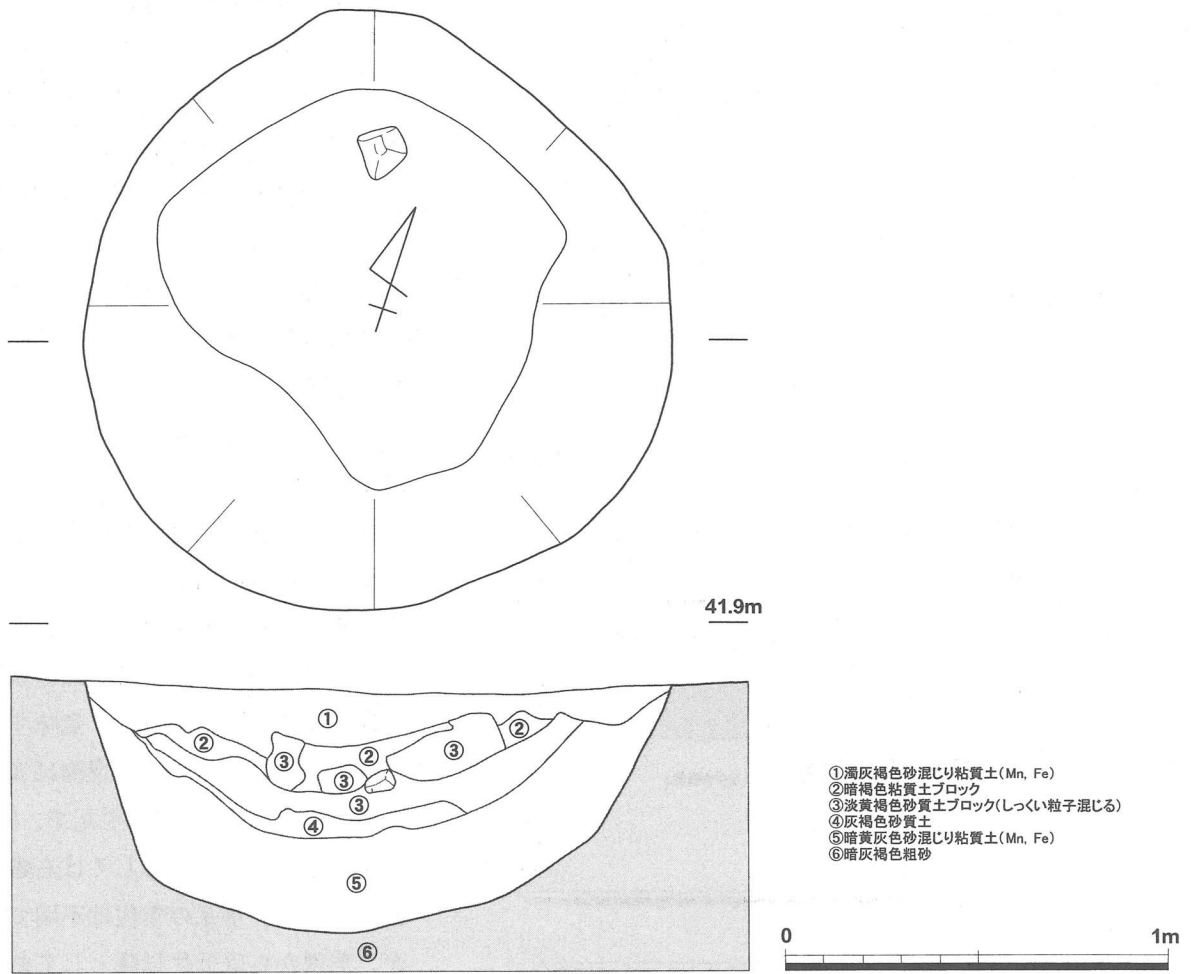
第68図 SK03~06平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/3)



- ① 灰色砂混じりシルト(Mn, Fe含む)
- ② 灰褐色シルト(Mn含む)
- ③ 灰黄色シルト



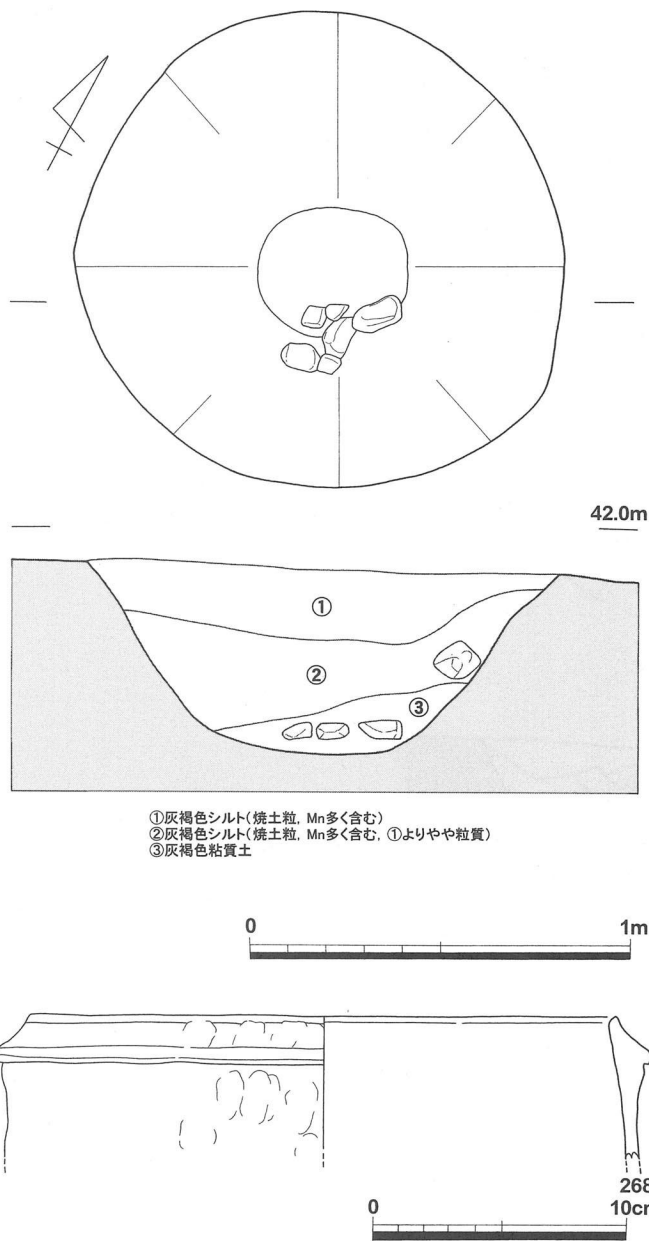
第69図 SK07~09平・断面図 (1/20)



第70図 SK10平・断面図 (1/20)

SK10 (第70図)

C 2 調査区で確認した円形の土坑で、断面はU字形を呈する。埋土は5層で、浅い皿状に堆積している。3層土は部分的にブロック状に混ざることから、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。



第71図 SK11平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/3)

SK11 (第71図)

B 2・3 調査区で確認した円形の土坑で、断面は上部の広がるU字形を呈する。埋土は3層で、最下層には礫が多く見られた。堆積状況からは、埋められた可能性が高い。出土遺物は268土師質羽釜1点である。268は、直立する体部に、形骸化した鏝が付き、形態的にはⅢ-①~③期頃に位置づけられ、14世紀代と考えておく。

SK12 (第72図)

B 2 調査区で確認した隅丸方形の土坑で、断面は四角もしくはいびつな逆台形を呈する。埋土は3層で、埋められた可能性が高い。土坑内には人頭大の礫が多数確認されるが、意味するところは不明である。出土遺物は269・270の2点である。269は平瓦で、270は二次調整のある剥片もしくは石鏝の可能性もある。平瓦の年代は不明であるが、形態からは近代以降としておく。

SK13 (第73図)

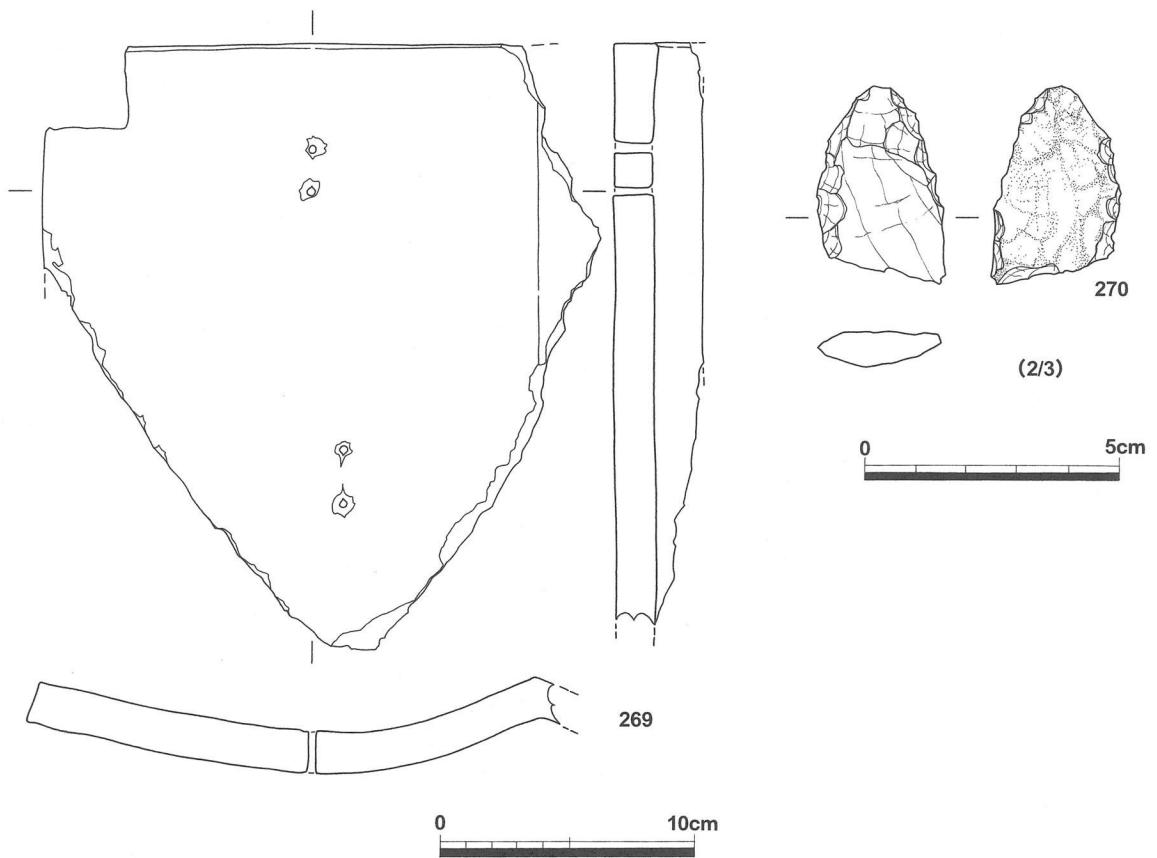
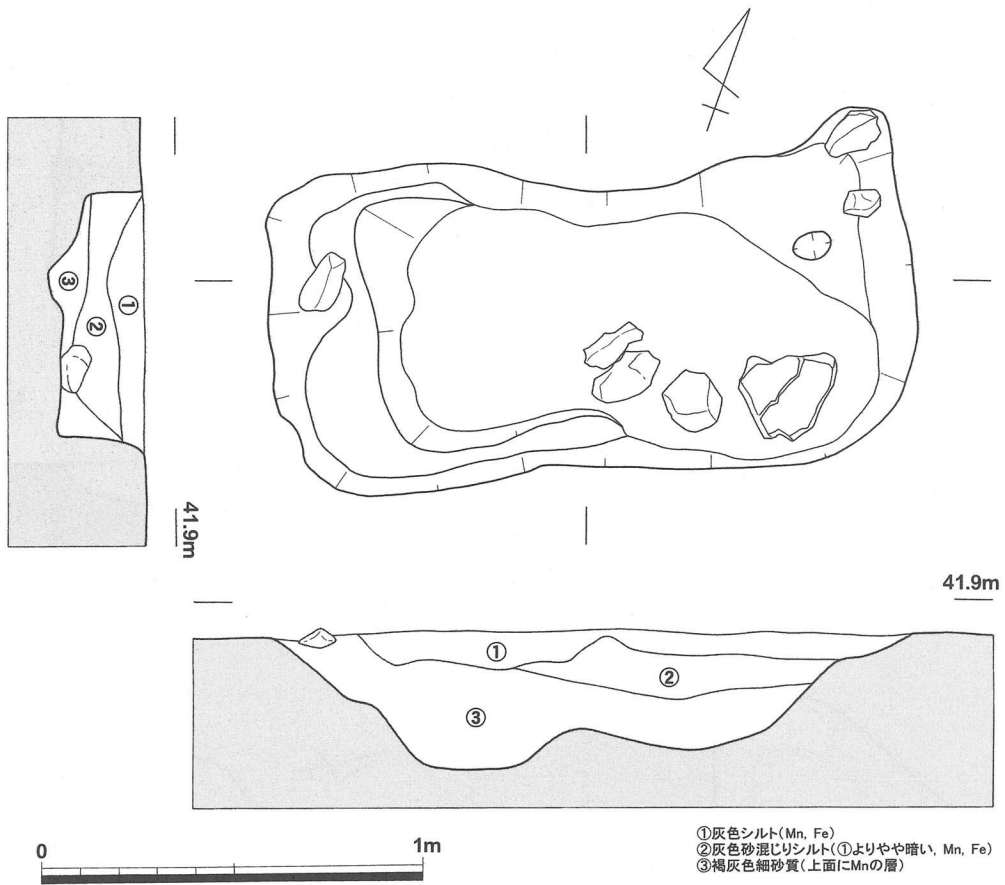
B 3 調査区で確認した方形の土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は1層で、焼土粒が含まれることから埋められた可能性が高い。出土遺物はない。

SK14 (第73図)

B 3 調査区で確認した不整形な土坑で、断面は逆台形を呈する。埋土は2層で、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。

SK15 (第73図)

A 3・B 3 調査区で確認した不整形な土坑で、断面は皿状を呈する。埋土は1層で、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。



第72図 SK12平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/3)